

高德院周辺遺跡 (No.327)

長谷町五丁目 387 番 7 の一部地点

例 言

1. 本報は「高德院周辺遺跡 (No.327)」長谷五丁目382番7の一部地点 (略称KTS0503)における個人専用住宅の建築 (地盤の柱状改良) にともなう埋蔵文化財発掘調査報告である。
2. 調査期間：平成17(2004)年6月20日～同年8月19日 調査面積：50.00㎡
3. 現地調査・整理作業の体制は以下の通りである。
調査担当者：原 廣志
調査員：太田美智子・小野夏菜・柁岡溪音・須佐仁和・中川建二・平山千絵・橋本和之・
銘苺春也・山口正紀
作業員：奥山利平・清水光一・中須洋二(社)鎌倉市シルバー人材センター
協力機関名：(社)鎌倉市シルバー人材センター・鎌倉考古学研究所
4. 整理作業及び本報の作成は以下の分担で行った。
遺物実測：小野・柁岡・渡辺・原
挿図作成：小野・平山・原
遺物観察表：平山
遺構写真：山口・原
遺物写真：平山
原稿執筆：原(第四章は調査員協議のもとに原が稿を創した)
6. 出土遺物、図面・写真などの発掘調査資料は、報告書刊行後に鎌倉市教育委員会が保管している。
7. 本報の凡例は、以下の通りである。
挿図縮尺：全側図：1/80 遺構図：1/40 1/50 遺物図：1/3 銭1/2
使用名称：本書で使用する用語のうち、「土丹(どたん)」は逗子シルト岩の砂泥岩、「鎌倉石」は
逗子市池子層に顕著な粗粒凝灰岩、「伊豆石」は相模川以西の河川・海浜に産する
安山岩で礎石に利用可能な扁平な円礫を指し、表記を簡略化した。
遺構図：遺構の標高は海拔高の数値を示している。
遺物図：黒塗りは灯明皿に付着した油煙煤、漆器の朱漆文様を表現している。
8. 本遺跡の現地調査から本報作成に至るまで、以下の方々からご助言とご協力を賜った。記して感謝の意を表したい(敬称略、五十音順)。
秋山哲夫・伊丹まどか・沖元 道・押木弘己・小野正敏・河野眞知郎・菊川 泉・菊川英政・熊谷満・後藤 健・古田戸俊一・五味文彦・佐藤仁彦・汐見一夫・宗臺秀明・宗臺富貴子・鈴木庸一郎・玉林美男・塚本和宏・中田 英・中野晴久・松尾宣方・松葉 崇・馬淵和雄・森 孝子

目次

本文目次

第一章 遺跡の位置と歴史的環境	117
1. 遺跡の位置	
2. 遺跡の歴史的環境	
第二章 調査の概要	121
1. 調査の経過	
2. 側量軸の設定	
3. 層序	
第三章 検出遺構と出土遺物	124
1. 第1面の遺構と遺物	
2. 第2面の遺構と遺物	
3. 第3面の遺構と遺物	
4. 第3面下トレンチ	
第四章 まとめ	141

挿図目次

図1 遺跡の位置	117	図9 第3面遺構全測図	129
図2 調査地点の位置と周辺遺跡	118	図10 第3面・第3面下遺構	130
図3 国土座標とグリッド設定図	122	図11 第3面遺構出土遺物	131
図4 調査区南壁土層断面	122	図12 第3面遺構外出土遺物	132
図5 第1面遺構	125	図13 第3面下トレンチ	133
図6 第2面遺構全測図	126	図14 第3面下土坑1出土遺物	134
図7 第2面遺構	127	図15 第3面下トレンチ出土遺物	135
図8 第1・2面出土遺物	128		

表目次

表1 周辺遺跡の調査地点一覧表	119	表5 遺物観察表(4)	139
表2 遺物観察表(1)	136	表6 遺物観察表(5)	140
表3 遺物観察表(2)	137	表7 遺物層位別出土数量表	142
表4 遺物観察表(3)	138	表8 遺物種類別の出土比率表	142

図版目次

図版1	144	図版6	149
a. I区第1面全景(西から)		a. II区第3面全景(東から)	
b. I区第1面全景(東から)		b. 第3面土坑4	
c. 同上かわらけ溜り		c. 柱穴列1 P25	
図版2	145	d. 柱穴列1 P26	
a. I区第2面全景(南から)		e. I区調査区南壁土層断面	
b. II区第2面全景(西から)		図版7	150
c. I区第2面遺構(東から)		第1面各遺構 第2面各遺構・遺構外出土遺物	
図版3	146	図版8	151
a. II区第2面全景(東から)		第3面各遺構出土遺物	
b. 第1面近世溝		図版9	152
c. 第2面P 1		第3面遺構外・第3面下遺構出土遺物	
d. 第2面P 2		図版10	153
図版4	147	第3面下各遺構出土遺物	
a. I区第3面全景(南から)			
b. II区第3面全景(西から)			
c. I区第3面全景(東から)			
図版5	148		
a. 第3面建物1(東から)			
b. 第3面土坑1・2(東から)			
c. 同上 土坑1			
d. 同上 土坑2			

第一章 遺跡の位置と歴史的環境

1. 遺跡の位置

本遺跡は鎌倉市内中心部の西南部に位置する。調査地の所在する谷戸は露座の鎌倉大仏で有名な高德院の位置から三方に展開する谷戸のうち、北東方向に深く伸びた谷戸で大谷戸と呼称されている。今回の調査地点はJ R横須賀線鎌倉駅の西方約1.0km付近の鎌倉市長谷五丁目387番7に所在する(第1・2図)。

遺跡周辺の地形をみると、源氏山に端を発して桔梗山から浅間山に連なる丘陵が南へ伸びて大仏坂切通で画されている。そのような丘陵に挟まれた中、大谷戸に源を発した稲瀬川は高德院の東山裾を西へ流下し、大仏坂切通や桑ヶ谷などの谷戸から流れてきた小河川と合流している。大仏通りでは暗渠に流れを変えた流路は、長谷寺門前から開渠となり東へ曲がり由比ヶ浜へと注いでいる。

大谷戸の規模は南北方向に約750mを測り、北の谷戸奥から南の開口部に向かって傾斜しており、高低差は30m以上となり、調査地点は谷戸中央を走る道路の高德院から北方へ約500m進んだ道沿い東側となり、谷戸内の北寄りの位置である。開口部幅は80m程であるが谷奥へ行くにつれて開析が進み、大小の小谷戸を内包した樹枝状の入り組んだ地形を呈する。大谷戸を取り巻く尾根の標高は50～75m前後、谷戸内の平地海拔高は13～25mを測り、今回調査対象となった地点は海拔20.00m前後に立地している。現在の大谷戸は各支谷を含めて宅地化が進んでおり、北奥には鎌倉駅から東西に走る市役所通りで新佐助隧道や長谷隧道を抜けて藤沢方面へ行く、往来が絶えない交通要路となっている。



図1 遺跡の位置

2. 遺跡の歴史的環境

鎌倉旧市街地は古代において相模国鎌倉郡に所属し、鎌倉郷と荏草郷の一部に相当すると考えられる。各郷の詳細な範囲と区画は不明だが、本遺跡は鎌倉郷内の西に位置していると推定される。

大谷戸の開口部には鎌倉大仏(国宝銅像阿弥陀如来坐像)の鎮座する高德院が所在している。高德院はもと光明寺奥院であり、大異山高徳院清浄泉寺と号す。開山・開基ともに不明であるが、勧進上人浄光で中興は顕誉祐天である。もと浄泉寺の支院であった高德院だけが残ったものと考えられる。

『極楽寺縁起』によれば、鎌倉時代に極楽房忍性が別当に任ぜられたとあり、その頃には悲田もあったことが知られる。南北朝時代以降は建長寺の管轄となり、江戸時代の正徳三年(1713)に芝増上寺僧祐天が山号を獅子吼山と改めたというが、今は大異山に復している。その時に宗旨を真言から天台宗へ



図2 調査地点の位置と周辺遺跡

(S= 1/5000)

改宗しており、その際に光明寺の末寺になったようである。

大仏の造立については、『吾妻鏡』暦仁元年(1238)三月二十八日条に僧浄光が諸国に勧進して浄財を集め同年に深沢里大仏堂の事始めが行われ、五年後の寛元元年(1243)に木造の八丈あまりの阿弥陀像及び大仏殿が竣工している。さらに九年後の建長四年(1252)には金銅大仏の鑄造が開始されたが、完成の年次については記載がなく詳しくはわからない。鑄造に際しては、鎌倉鑄物師棟梁の物部重光をはじめ、河内鑄物師丹治久友や大野五郎右衛門らの鑄工が参加したという。金銅大仏の完成時期については諸説あるが、久友の肩書が「鑄師」から「新大仏」への呼称変化に注目し、文応元年(1260)から文永元年(1264)の間の時期の説(清水1979)と、鎌倉時代の政治・宗教史の立場から推測して弘長二年(1262)との指摘があげられる(馬淵1998)。この金銅大仏も完成時には大仏殿に安置されていたが、その後大仏殿は『太平記』などの記事によると、建武二年(1335)におきた大風で倒壊、明応七年(1498)には津波の被害を受けている。このような相次ぐ災害はついに大仏殿を消滅させ、それ以降再建や倒壊の記事はみられない。元禄十六年(1703)の大地震では台座が崩れ傾くなどするが、正徳年間～元文年間(1711～1740)にかけて僧祐天・養国らによって台座の修復や欠穴の箇所を修理・修復している。その後、関東大震災で被害を受けるが、昭和34年(1959)に修理が実施され、現在ではみんなに親しまれる露座の大仏の姿となっている。

長谷の地名は長谷寺が建立された鎌倉中期以降に寺名から生まれたもので、それ以前は『吾妻鏡』にも長谷の地名がみられず「甘縄」「深沢」の内に含まれていたようである。『新編相模国風土記稿』には「観音堂起立ありしより寺号によりて村名となす…」とあり甘縄・稲瀬川・桑ヶ谷などの事蹟を記述しており、また明治十二年(1879)編纂の『県皇国地誌』には長谷の小字に長谷小路・新明町・上町・新宿・甘縄・深沢・愛泉堂・宿屋・入地・長者ヶ久保・小谷・大谷があったと記している。

なお、遺跡周辺の発掘調査事例や旧跡については、図2と共に「表1 周辺遺跡の調査地点一覧表」を参照されたい。

表1 周辺遺跡の調査地点一覧表(図2)

遺跡所在地	調査報告書名・遺跡名・遺跡台帳番号など
1 長谷五丁目 387番7一部	本調査地点 高德院周辺遺跡(No.327)
2 長谷五丁目 377番、393番2	松葉 崇・菊川 泉・鈴木絵美 2010『長谷大谷やぐら群』かながわ考古学財団 調査報告 257 長谷大谷やぐら群(No.146)
3 長谷五丁目 429番	大三輪竜彦・田代郁夫 1986『高德院周辺遺跡(やぐら)発掘調査報告書』高德院 周辺遺跡(やぐら)発掘調査団 長谷浅間神社下やぐら(No.307)
4 長谷四丁目 550番1外	福田 誠・鈴木 茂・平尾良光ほか 2002『鎌倉大仏周辺発掘調査報告書』鎌倉市 教育委員会 鎌倉大仏殿跡(史跡)
5 長谷四丁目 548番4	馬淵和雄 1995『高德院周辺遺跡』高德院周辺遺跡発掘調査団 高德院周辺遺跡(No.327)
6 長谷一丁目 290番1外	宗臺秀明・斎木秀雄 1989『長谷一丁目290番-1地点遺跡』高德院周辺遺跡発掘調査団 高德院周辺遺跡(No.327)
7 長谷五丁目 341番10の一部	宮田 眞 2006『高德院周辺遺跡』(株)博通 高德院周辺遺跡(No.327)
8 常盤 932番1	鈴木庸一郎・菊川英政 2001『<古都鎌倉>を取り巻く山稜部の調査』神奈川県教育委員会・鎌倉市教育委員会・かながわ考古学財団 大仏切通(史跡)
9 長谷三丁目 630番1、630番17	田代郁夫・原 廣志 1991『桑ヶ谷療病院跡 長谷三丁目 630番1』『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』7 鎌倉市教育委員会 桑ヶ谷療病院跡(No.294) 木村美代治・田代郁夫 1991『桑ヶ谷療病院跡 長谷三丁目 630番17』『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』7 鎌倉市教育委員会 桑ヶ谷療病院跡(No.294)
10 長谷三丁目 633番2の一部外7	瀬田哲夫 2007『長谷小路周辺遺跡発掘調査報告書』(株)斉藤建設 長谷小路周辺遺跡(No.236)
11 長谷一丁目 284番1	玉林美男 1988『長谷小路周辺遺跡』『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』4 鎌倉市教育委員会 長谷小路周辺遺跡(No.236)

【引用・参考文献】

- 秋山哲雄 2006『北条氏権力と都市鎌倉』吉川弘文館
- 臼井永二編 1986『鎌倉事典』東京堂出版
- 宇佐美龍夫 1994『わが国の歴史地震被害一覧表』(社)日本電気協会
- 上本進二 2000「鎌倉・逗子の地形発達史と遺跡形成」『池子棧敷戸遺跡(逗子市 No.100)』東国歴史考古学研究所
神奈川県図書館協会郷土資料編集委員会 1991「神奈川県皇国地誌 相模国鎌倉郡村誌」『神奈川県郷土資料
集成』第十二輯
- 鎌倉市教育委員会編 1990「としよりのはなし」『鎌倉市文化財資料』第7集
- 鎌倉国宝館 1995「鎌倉の古絵図Ⅲ」『鎌倉国宝館図録』第十五集 鎌倉市教育委員会
- 鎌倉文化研究会編 1972「鎌倉－史蹟めぐり会記録－」
- 河野真知郎 1995「中世都市鎌倉－遺跡が語る武士の都－」『講談社選書メチエ』49 講談社
- 木下 良ほか 1997『神奈川の古代道』藤沢市教育委員会
- 五味文彦 1995「大仏再建－中世民衆の熱狂－」『講談社選書メチエ』56 講談社
- 清水真澄 1979『鎌倉大仏－東国文化の謎－』有隣堂
- 貫 達人・川副武胤 1979『鎌倉市史 社寺編』鎌倉市史編纂委員会 吉川弘文館
- 貫 達人・川副武胤 1980『鎌倉廃寺事典』有隣堂
- 馬淵和雄 1992「中世鎌倉における谷戸開発のある側面」『鎌倉』第六十九号 鎌倉文化研究会
- 馬淵和雄 1998『鎌倉大仏の中世史』新人物往来社

第二章 調査の概要

1. 調査の経過

今回の発掘調査は、基礎地盤の柱状改良の工事を実施する個人専用住宅建設の計画があったため、工事の実施により掘削深度の関係から埋蔵文化財に影響を及ぼす恐れが予想され、鎌倉市教育委員会による遺構確認の試掘調査が行われた。その結果、現地150cm前後まで近・現代の客土や畑耕作土が確認され、それ直下は薄い中世遺物包含層を挟んで江戸時代から鎌倉時代に至る少なくとも4時期の遺構面（生活面）と、それに伴う遺物が出土して具体的な埋蔵文化財の存在することが判明した。これにより当該建築工事の実施による埋蔵文化財への影響が避けられないと判断された。このため事業者との協議を行ったところ、当初の計画に基づき建築工事を実施したいとの意向が示された。そこで文化財保護法に基づく届け出手続きを行い、施工者と調査方法・工程の協議を重ねた結果、平成17年6月20日から約2ヶ月の予定で発掘調査を実施する運びとなった。

現地調査は6月20日に機材搬入し、試掘データに基づいて遺構面を傷つけないように地表下150cm程までを重機で除去した後、それ以下を人力により掘り下げて遺構の確認・検出を行なった。平成17年8月19日までの間に必要な記録保存作業を行い、同日に機材撤収して現地調査を終了した。調査面積は50.0㎡が対象である。調査の経過については、以下に主な作業内容を日誌抜粋で記しておく。

日誌抄

- 6月20日(月) I区の調査範囲を地表下150cmまで重機により表土掘削を実施する。調査機材搬入。
- 22日(水) 第1面の検出へ向けて荒掘り作業を開始、湧水多量。近代井戸攪乱で調査区北東壁
- 27日(金) 鎌倉市4級基準点を基に測量軸方眼の設定、測量用の海拔高のレベル原点を移動。
- 7月 6日(水) 第1面の調査終了。全景写真の撮影及び平面図の作成を行う。
- 14日(木) 第2面遺構の調査終了。全景写真及び個別遺構の写真撮影、平面図を作成開始。
- 22日(木) 第3面遺構の全景写真及び平面図の作成を行う。
- 25日(月) 調査区南壁直下にトレンチ設定し、以下の生活面と遺構を確認する。I区調査終了。
- 27日(水) II区調査開始、表土を重機掘削し、第1面検出に向け荒掘り作業を開始する。
- 8月 3日(火) 第1・2面遺構の調査終了し、平面図作成。全景及び個別遺構の写真撮影を行う。
- 11日(水) 第3面遺構の調査終了。全景及び個別遺構などの写真撮影。平面図を作成開始。
- 15日(月) 調査区南壁直下にトレンチ設定し、以下の生活面と遺構を確認する。
- 19日(金) 機材撤収し、現地調査終了。

2. 側量軸の設定

調査にあたって測量方眼軸の設定には、図3で示したのように国土座標の数値を用い、測量方眼軸は調査区の軸方位にほぼ平行して基準となる南北軸を設けた。測量軸の設定には調査地の西辺沿いを谷戸奥へ南北に走る道路面上に鎌倉市道路管理課が設置したD O 26とD O 27 2点の市4級基準点（日本測地系第IV座標系）が確認された。このD O 26・D O 27を国土座標の基準点として開放トラバース側量によって敷地内に任意点であるA点を設け、さらに測量基準点のC-8杭を設置した。側量軸は東西軸

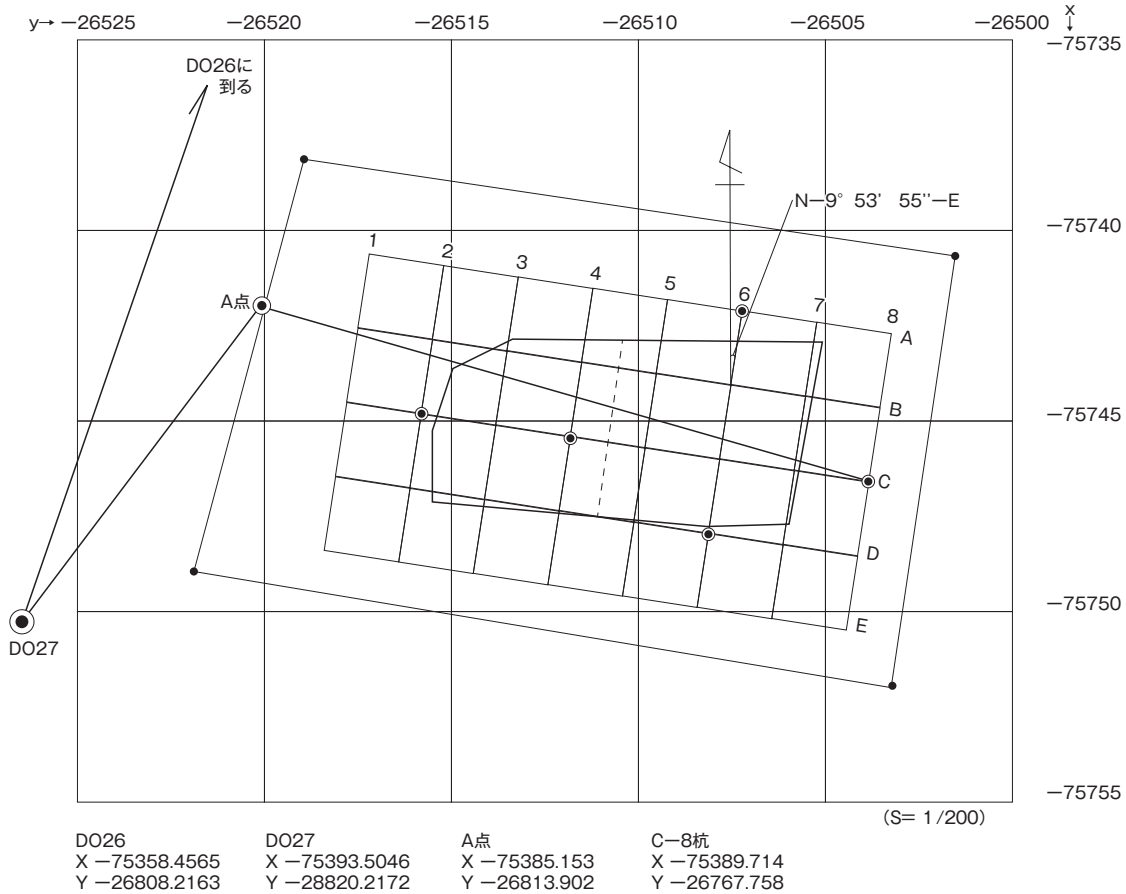
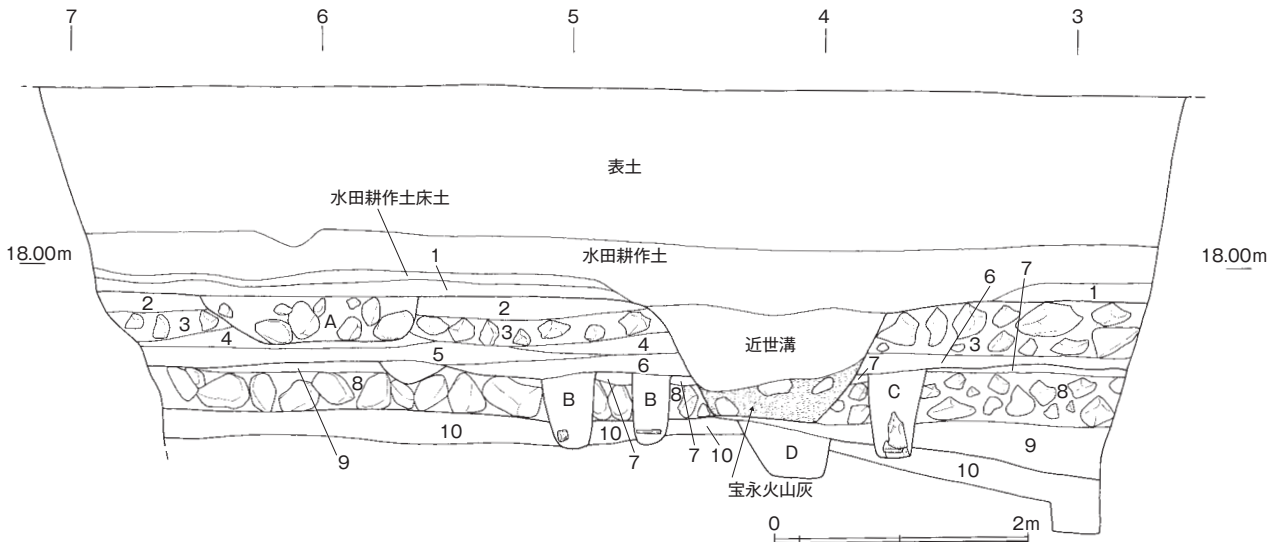


図3 国土座標とグリット設定図



土層注記

1. 青灰褐色粘質土：拳大の土丹・土丹粒を中量、炭粒、かわらけ片、1cm 大の小石を少量含む。締まりやや有り 遺物包含層
2. 青灰褐色弱粘質土：拳大の土丹・土丹粒を多量に含む。炭粒中量、かわらけ片少量含む。締まりやや有り 第1面構築土
3. 青灰色粘質土：人頭大の土丹・土丹粒を多く含む。炭粒、かわらけ片を多く含む。締まりやや有り
4. 青灰褐色弱粘質土：土丹粒、炭粒少量含む。締まり有り。
5. 青灰褐色弱粘質土：土丹粒、炭粒、かわらけ片少量含む。締まりやや有り。
6. 灰褐色粘質土：土丹粒多量、炭粒、かわらけ片少量含む。締まりやや有り。
7. 灰褐色粘質土：土丹粒多量、かわらけ片少量含む。締まりなし。
8. 青灰褐色粘質土：30cm 大の土丹・土丹粒を多く含む。炭粒を少量含む。締まり有り。 第2面構築土
9. 黒褐色粘質土：土丹粒、炭粒を中量含む。締まりやや有り。
10. 黒褐色粘質土：中世基盤層
- A. 青灰色弱粘質土：30cm 大の土丹・土丹粒を多く含み、かわらけ片を少量含む。締まりやや有り。
- B. 暗灰褐色粘質土：5cm 大の土丹粒を多量に含む。炭粒を中量含み。締まりやや有り。
- C. 暗灰褐色粘質土：拳大土丹を多く含み、炭粒を少量混じる。締まりやや有り。D. 黒褐色粘質土：3cm 大の土丹粒を含み、貝殻少量含む。遺物を多量に含む。締まりなし。(コ

図4 調査区南壁土層断面

と南北軸を2m方眼による軸線を配し、南北軸はA～Eのアルファベットの名称、東西軸に1～8の算用数字をそれぞれ付してグリッド設定を行った。

現地調査で使用した国土座標は、日本測地系(座標AREA9)の国土座標数値であったため、報告書作成の整理作業段階で、国土地理院が公開する座標変換ソフト『web版TKY2JGD』を参考にしながら世界測地系第IX系の座標数値に準じて算出し直したのが、図3に示した数値である。調査地点は世界測地系第IV系のX-75.735～75.755、Y-26.525～26.500の国土座標区域内に位置している。挿図中の方位は、すべて真北を採用しており、測量方眼の南北軸線は真北より東に触れている。また調査地点の経緯度は以下のとおりである。

南北軸線：[N-9°53'55"-E]

調査地点：[北緯35°19'12"] [東経139°32'18"]

さらに海拔高の原点移動は、調査地点西辺の道路を谷戸奥へ100m程進むと、市役所通りとの交差点である長谷大谷戸になる。その交差点南西隅の道路上に設置された鎌倉市3級水準点(No.53109 L=24.381m、1985年8月設置)から調査地内のC-8杭上(L=19.505m)とC-2杭上(L=19.490m)へ仮水準点を移設した。本報の文章中または挿図に記載されたレベル数値は、すべてこれを基準にした海拔標高を示している。

3. 層序

調査地点は大谷のほぼ中央部の東側に位置し、現地表の海拔高19.40m前後を計り、ほぼ平坦な宅地を形成している。鎌倉市教育委員会が実施した試掘調査の結果を基に、現地表下約150cmまで堆積していた近・現代の客土や水田耕作土を重機で除去した後、中世遺構の確認を実施した。調査区壁面の土層堆積は遺構覆土を除くと、表土・耕作土以下が1層の遺物包含層から中世地山上面(中世基盤層=黒褐色粘質土)まで概ね9層に区分され、少なくとも4時期以上の生活面が確認されている。調査区南壁土層堆積の状況は図4に示したとおりである。表土や耕作土を除去すると、水田床土を挟んで中世遺物包含層で締りのない青灰褐色粘質土の1層が観察された。この包含層を取り除くと、概ね5cm～拳大の土丹小塊を多く混えた青灰褐色弱粘質土(2層)が顔を覗かせ、近世溝や遺物溜りなどが確認されたので第1面と捉えてこの上面で遺構検出を行った。第1面は海拔高17.70～17.76mを測る。第1面を構成する厚さ20cm程の土層を掘り下げると、包含層を挟まずに表面が破碎土丹による地形面を表出したので第2面とした。この面は拳大から人頭大の土丹塊を多く混入した青灰色粘質土により構成された地形層である。海拔高は調査区の西端17.70m程、東端17.60m程であり、西から東に向かって緩やかな傾斜をもつ生活面を構築している。検出した遺構は土坑、柱穴様のピットなどである。

厚い地形層の第2面構成土を除去すると、その下には4層の青灰褐色弱粘質土を挟み第3面上に堆積する5・6層の遺物包含層が認められた。第3面は拳大～人頭大の土丹塊を詰め込んだ粗い基礎地形の8層と、その上に7層のような細かな土丹粒を敷き詰めた生活面が表出したので第3面として調査を行った。面の海拔高は17.20mである。検出した遺構には掘立柱建物、土坑、柱穴様のピットなどである。

第3面検出時点で表土から2.2m以上の掘削深度に達しており、調査区壁の崩落などの危険を伴うと判断された。そこでI・II区の調査南壁際を深掘りして中世基盤層の黒褐色粘質土層(10層)を確認した。上面の海拔高は、調査区の東端から4・5ライン中間までが16.85m前後とほぼ平坦であるのに対し、9層の西へ向かって厚くなる堆積が示すように急な傾斜をもち落ち込んでおり、西端は16.30mを測る。調査区南壁トレンチ内の中世地山面(第4面)からは土坑1基が検出されている。

第三章 検出遺構と出土遺物

1. 第1面の遺構と遺物（図5・8）

近世の水田床土を取り除くと、近世溝や遺物溜りなどを伴う遺構が確認されたので生活面として調査を実施した。遺構の確認レベルはは海拔高17.75m前後を測る。遺物は近世溝から瀬戸・美濃窯皿や煙管、中世が遺物溜りのかわけや銭などが出土した。

近世溝：調査区中央寄りでグリット4・5ラインの間で検出された南北方向に走る素掘りの溝である。溝両端は調査区外に延びており、確認された規模は長さ420cm以上、上幅192～200cm、下幅97cm前後、深さ105cm前後であり、断面逆台形状の掘り方を呈する。主軸方位はN-18°30'-Eと東にやや触れた軸方向を示している。溝底面の海拔高は北端16.92m・南端16.76m前後をを計ることから北から南、谷戸開口部へ向かって緩やかな傾斜を示していた。覆土は上層が粗砂や土丹粒を含んだ灰褐色弱粘質土、下層は江戸時代の宝永4年(1707)富士山噴火に伴う火山灰が溝底まで厚く堆積する。

出土遺物は図8-1が青磁櫛描文皿、2が瀬戸窯卸皿、4が常滑窯片口鉢で覆土中に混入した鎌倉時代の所産品である。3は瀬戸・美濃窯の鉄釉灯明皿と、6が真鍮製の煙管雁首で江戸時代の資料である。5はかわらけ質の土錘である。

遺物溜り：図5のように調査区東側（I区）において近世溝に掘削されていたが、面上からかわらけや土丹塊がある程度まとまった状況で検出された（ここでは便宜上「遺物溜り」と呼称する）。遺物溜りは南北約3m、東西2m程の範囲に部分的な集中をみせながら検出され、かわらけの完形品を主体に銭も認められた。出土遺物の8～16のかわけは全てロクロ成形の回転糸切底、器形は薄手器壁の内湾した丸深タイプの大・中・小皿、17・18は北宋銭の熙寧元寶（初鑄1068年）と紹聖元寶（初鑄1094年）である。

2. 第2面の遺構と遺物（図6～8）

第2面は、現地表下約170cmの深度に検出された破碎の大小土丹塊による地形層であり、生活面のレベルは海拔高17.65m前後である。検出した遺構は土坑4基、ピット5穴などがあり、それに伴う遺物はロクロ成形かわらけ、青磁・白磁碗皿の貿易陶磁器、瀬戸窯入子、常滑窯甕、備前窯擂鉢の国産陶器、加工骨、銭などである。

土坑2：調査区南東で検出した大型の土坑で南側は調査区外に拡がり全容は不明である。確認された規模は東西径174cm、南北径125cm以上、深さ37cm、断面逆台形の掘り方を呈し、底面の海拔高約17.30mである。覆土は拳大～人頭大の土丹塊を多く含む青灰色弱粘質土の単一層である。出土遺物は図8-19のかわけ小皿で薄手器壁の内湾した器形の資料である。

土坑3・4：土坑2の北側に位置する。土坑3は不整円形の形状を呈し、長径98cm、短径78cm、底面が平らで深さ25cmと浅い掘り方である。覆土は小土丹塊・炭化物を含む締りのない青味を帯びた灰褐色粘質土であった。土坑4は平面形状が不整円形、大きさは長径72cm、短径62cm、深さ20cmの浅い掘り方である。締りのない灰褐色弱粘質土の覆土で良好な遺物の出土はない。

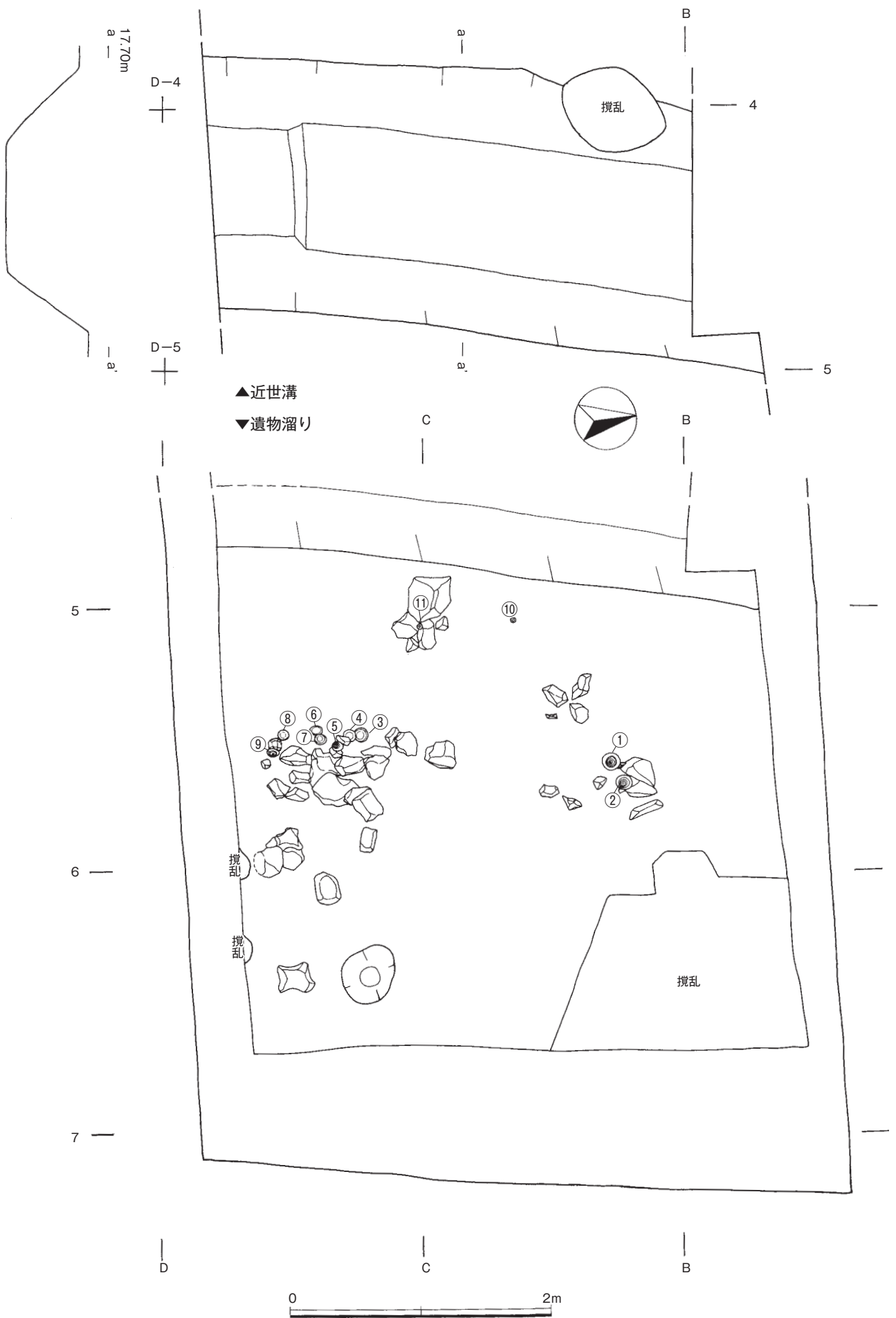


図5 第1面遺構

P 1・2 : B - 5・6 に位置し、P 2 は攪乱により掘り方の一部が壊されている。P 1 は隅丸方形を呈し、長径72cm、短径60cm、深さ55cmを測り、締りのない灰褐色土の覆土中から図8 - 20のかわらけ

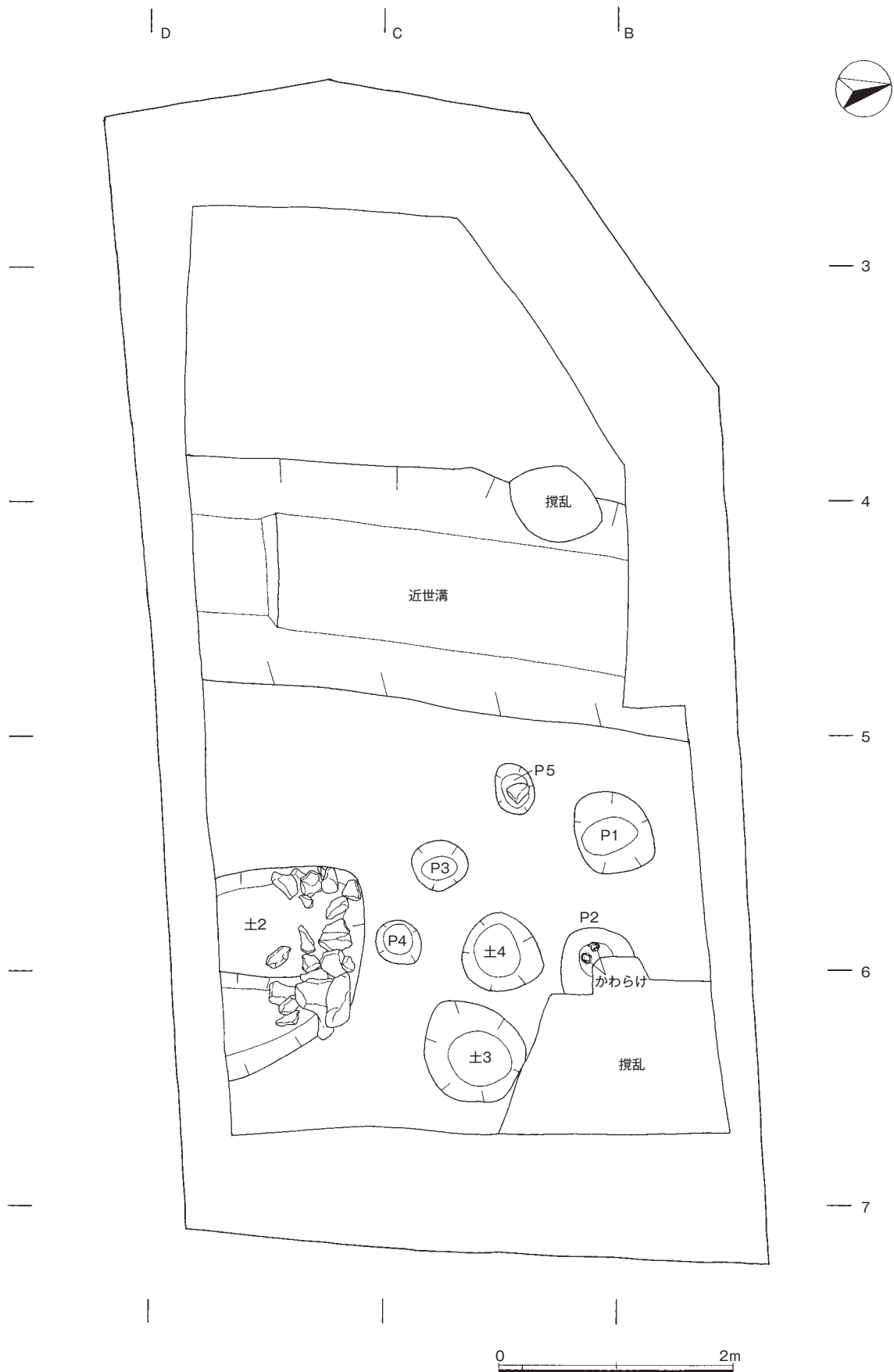


図6 第2面遺構全測図

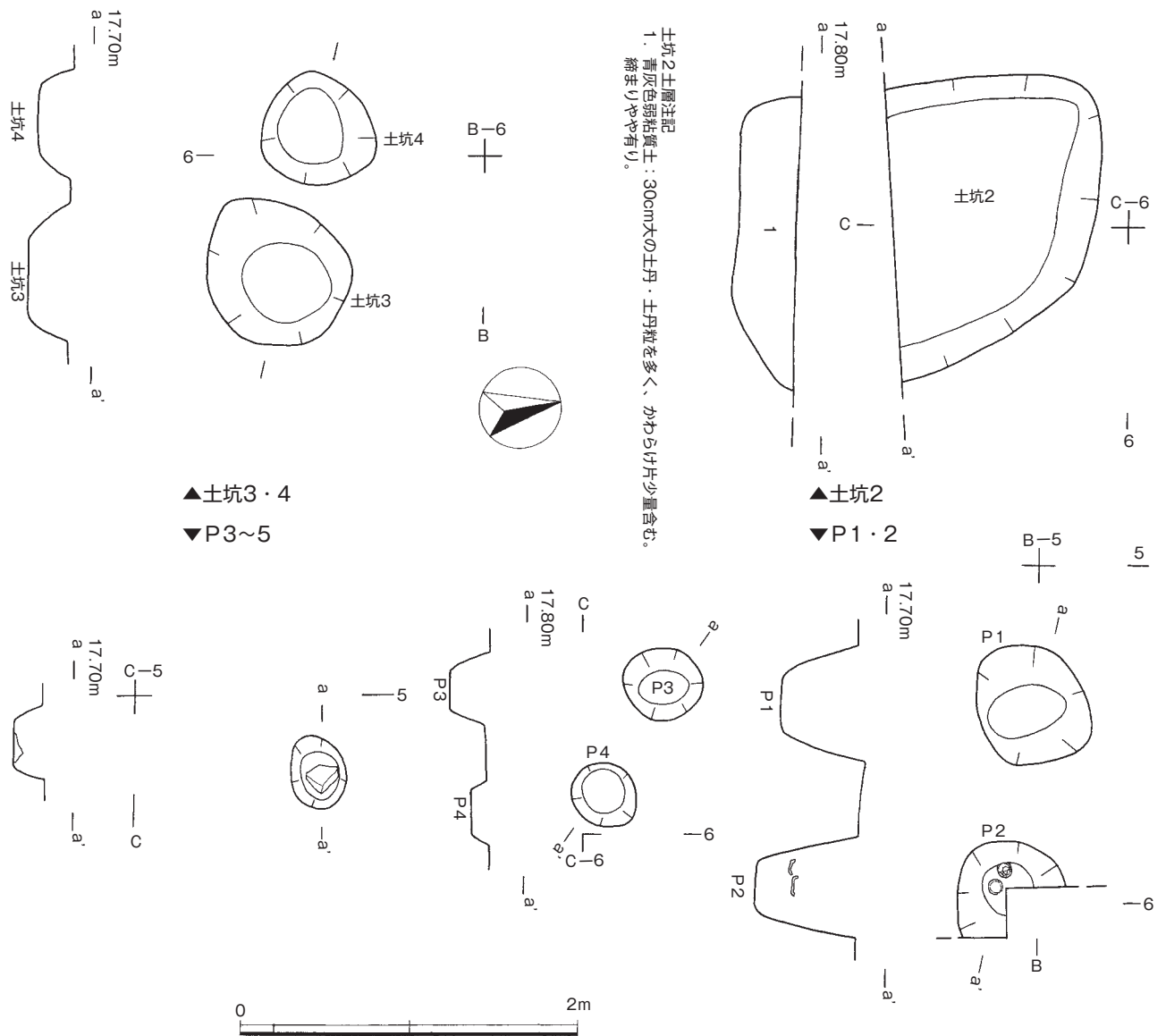


図7 第2面遺構

け小皿が出土した。P 2 は長径60cm以上、深さ65cmの楕円形状と推測され、青灰色粘質土の覆土中からは完形品かわらけを含む7個体が出土した。

P 3・4：C - 6 杭の西側に位置する。P 3 は径47cm、深さ25cmの円形を呈し、P 4 は楕円形の径43cm前後、深さ14cmと浅い掘り方である。遺物はかわらけ小片だけである。

P 5：調査区中央のC - 5 杭付近に位置する。楕円形を呈し、長径48cm、短径33cm、深さ20cmで底面には扁平な土丹塊の礎石を据えている。

第2面遺構外出土遺物：図8 - 28 ~ 39 はかわらけ大・中・小皿である。小皿は主に薄手器壁で28・29の背高と30 ~ 35の背低気味の一群があり、中・大皿は36 ~ 38の薄手器壁の丸深タイプと39の背低気味がある。40は手捏ね成形の白かわらけである。41・42は青磁碗で龍泉窯鎬蓮弁文と同安窯櫛描文、43は白磁印花文皿の貿易陶磁器であり、国産陶器は44・45は瀬戸窯入子、46・47は備前窯播鉢、48は常滑窯甕の口縁部（中野常滑編年8型式か）で上層からの混入品の可能性が考えられよう。48は骨製品であるが、上面と両側面を刃物で削り加工を施した未成品、50は北宋銭の「天聖元寶」（初铸1023年）である。

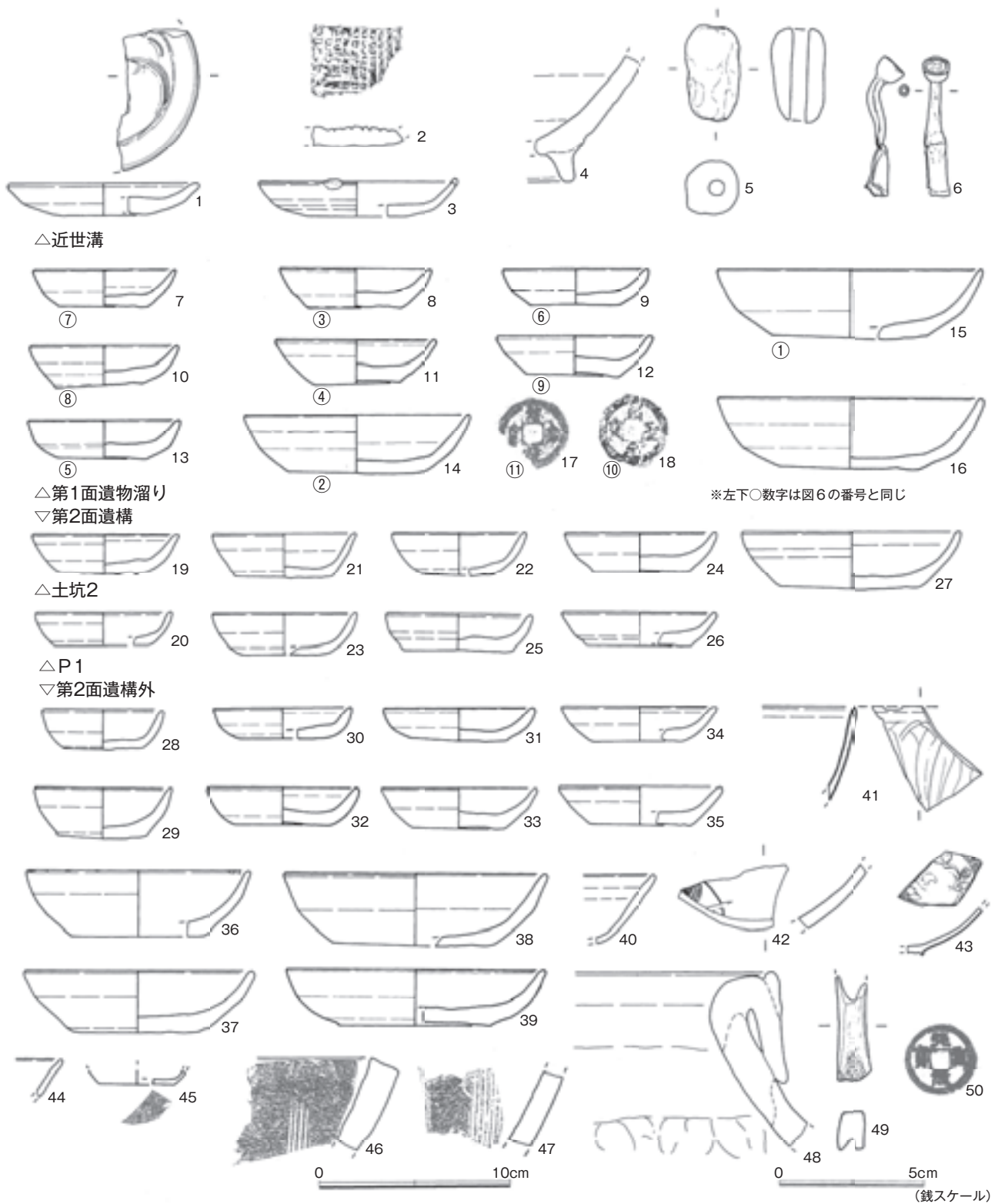


図8 第1・2面出土遺物

3. 第3面の遺構と遺物 (図9～12)

第3面は、現地表下約220cmの深度に検出された破碎の大小土丹塊による地形層であり、遺構を確認したレベルは海拔高17.18m前後で比較的平坦な面に整地している。検出した遺構には柱穴列2列、土坑4基と、主に柱穴様ではないピット32穴などが認められた。出土した遺物はロクロ成形かわらけをはじめ、舶載陶磁器の青磁・白磁碗皿・褐釉壺などがあり、国産陶器には瀬戸窯の入子・壺、常滑窯の

甕・片口鉢、備前窯の播鉢などの他、土製品、砥石、加工骨や銭なども認められた。

貿易磁器の青磁・白磁碗皿・褐釉壺などがあり、国産陶器には瀬戸窯の入子・壺、常滑窯の甕・片口



図9 第3面遺構全測図

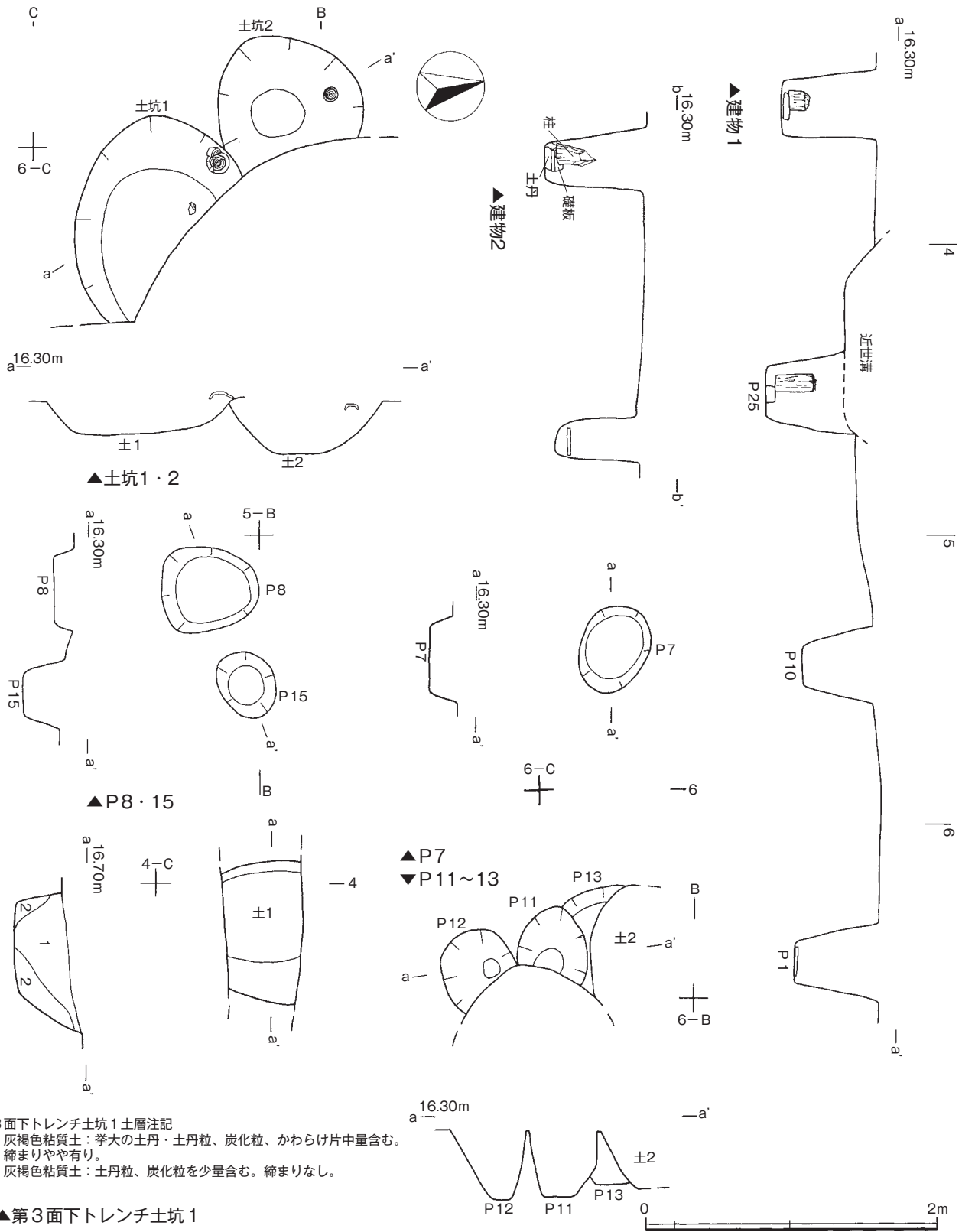


図10 第3面・第3面下遺構

鉢、備前窯の播鉢などの他、土製品、砥石、加工骨や銭なども認められた。

柱穴列1：調査区中央の位置で測量軸のCラインに沿って確認され、現況で東西3間(595cm)が検出された。柱間寸法を観察すると、調査区内で西端に位置するP26からP25の間分に残る角柱痕の芯々距離は198cm(約6.6尺)を測り、さらにP25～P10～P1の東側二間分も各198cm程の柱間距

離を測ることができた。主軸方位はN-80° 20' -Wである。各柱穴の掘り方は平面形状が円形または楕円形を呈し、掘り方の大きさは径52～65cm、確認面からの深さ50～60cmである。P 25は掘り方上部を近世溝で削平されていた。柱穴の底面にはP 25・P 26に礎板と、その上に13×18cm角の柱痕、P 11に礎板がそれぞれ認められた。礎板は角柱の再利用で長さ20cm程に切断された後、2・3枚に縦割りにしたものを使用している。柱穴底面の海拔高は16.45～16.55mである。柱穴内からの出土遺物は、図11-35・36がかわらけ大小皿と37がかわらけ質の不明土製品でP 10、38が底部回転糸切痕かわらけ大皿でP 11、50が常滑窯片口鉢Ⅱ類でP 25から出土した。

柱穴列2：調査区南壁際で東西方向に1間分を確認した。柱間寸法をみると、西側のP 27角柱痕中心から東側のP 28礎版までの芯々距離が198cm（約6.6尺）を測り、主軸方位は柱穴列1とほぼ同じである。掘り方は径40cm以上、確認面からの深さ60・68cmを測り、楕円形の掘り方であろう。P 27の底面には柱の沈下防止や高さ調整のためと考えられる扁平な土丹塊と礎板があり、その上に13cm角の

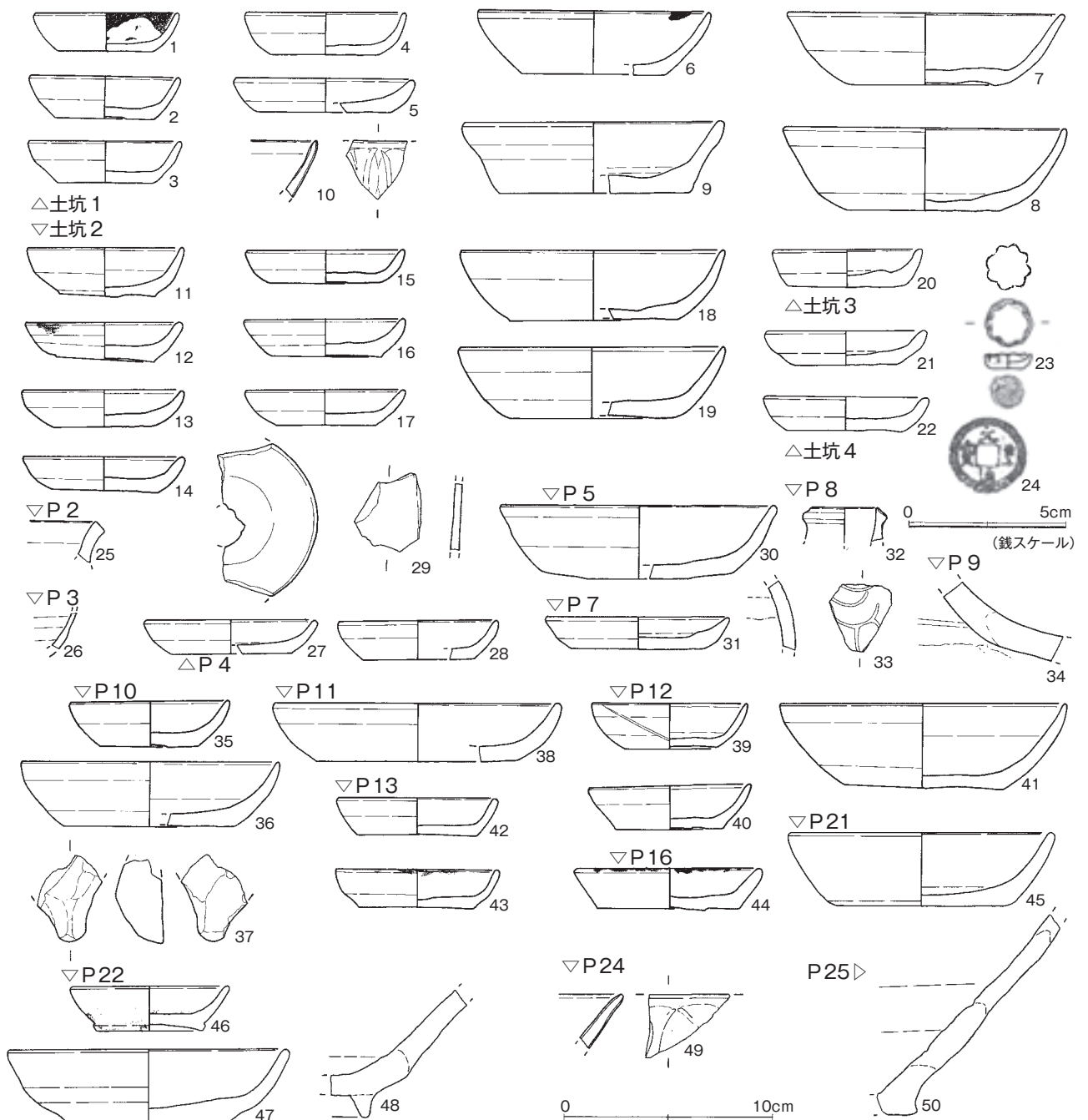


図11 第3面遺構出土遺物

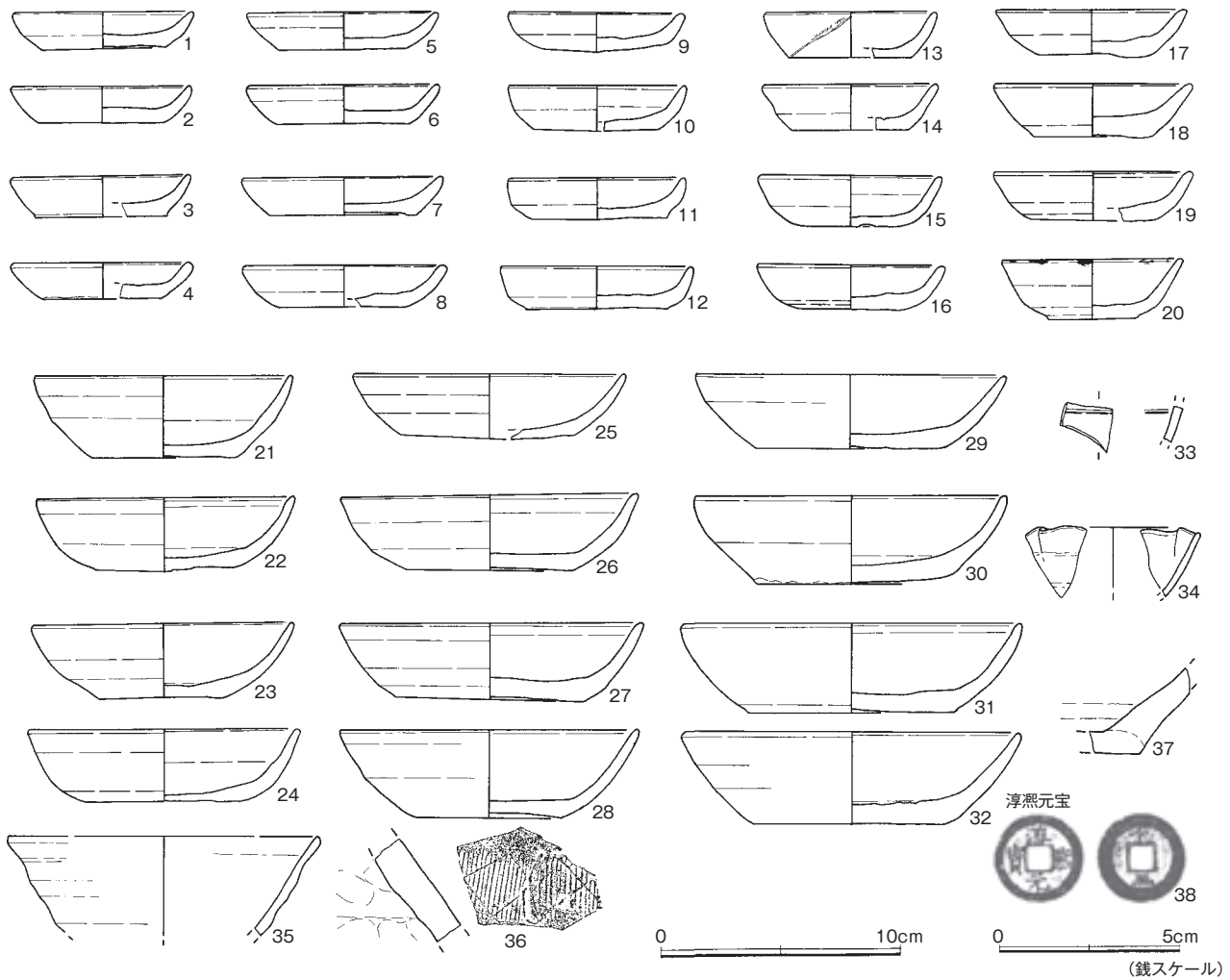


図12 第3面遺構外出土遺物

柱痕が据えられていた。柱穴底面の海拔高16.45m前後である。図示可能な遺物は出土していない。

土坑1・2：調査区北東隅の位置で近代井戸掘削の攪乱によって掘り方東側が削平された状態で検出され、土坑2より土坑1が新しい。土坑1は長径150cm・短径120cm以上、底面が平らで深さ25cmの皿状断面の掘り方である。覆土は土丹粒・炭化物を多く含む締りのない暗灰褐色粘質土の単一層である。土坑4は確認した大きさが長径102cm、短径80cm以上、深さ38cmの断面播鉢の掘り方である。覆土は土丹粒・炭化物を多く混入した上層と、下層の拳大土丹塊を多く含む暗灰褐色粘質土に分けられた。出土遺物は土坑1がかわらけの1～4・6～8の薄手器壁で内湾したやや高めの器形が主体である。土坑2はかわらけ小皿が11以外が低めの器高、大皿はやや薄手器壁である。

土坑3：B-4杭に位置し、掘り方は東部を近世溝に壊され、大半が調査区外に拡がり全容不明である。確認した大きさは東西径110cm・南北径60cm以上、深さ35cm程である。覆土は拳大の土丹塊を含む締まりのない暗茶褐色粘質土、遺物は20の背低で厚手器壁のかわらけ小皿が出土した。

土坑4：調査区南西の位置で検出した円形の土坑である。大きさは径100cm程、深さ30cmの底面平らな掘り方である。覆土は土丹粒・炭化物を多く含む暗茶褐色粘質土、21・22の背低で厚手器壁のかわらけ小皿が出土している。

ピット：掘立柱や柱穴列を構成しないピット26口のうち、特徴的なものや遺物を伴うものを中心として簡単に触れる。ピットは概ね楕円形で断面逆台形を呈し、径30～60cm、深さ20～50cm程であり、P2やP29からは根石や角柱痕が検出された。遺物は図11の資料うち、P4は27～29が底部穿孔を

含むかわらけ小皿と京都鳴滝産の砥石、P 8 は32・33が瀬戸壺と褐釉壺、P 12・P 13はかわらけ大小皿、P 22もかわらけ大小皿と常滑窯片口鉢 I 類などが出土している。

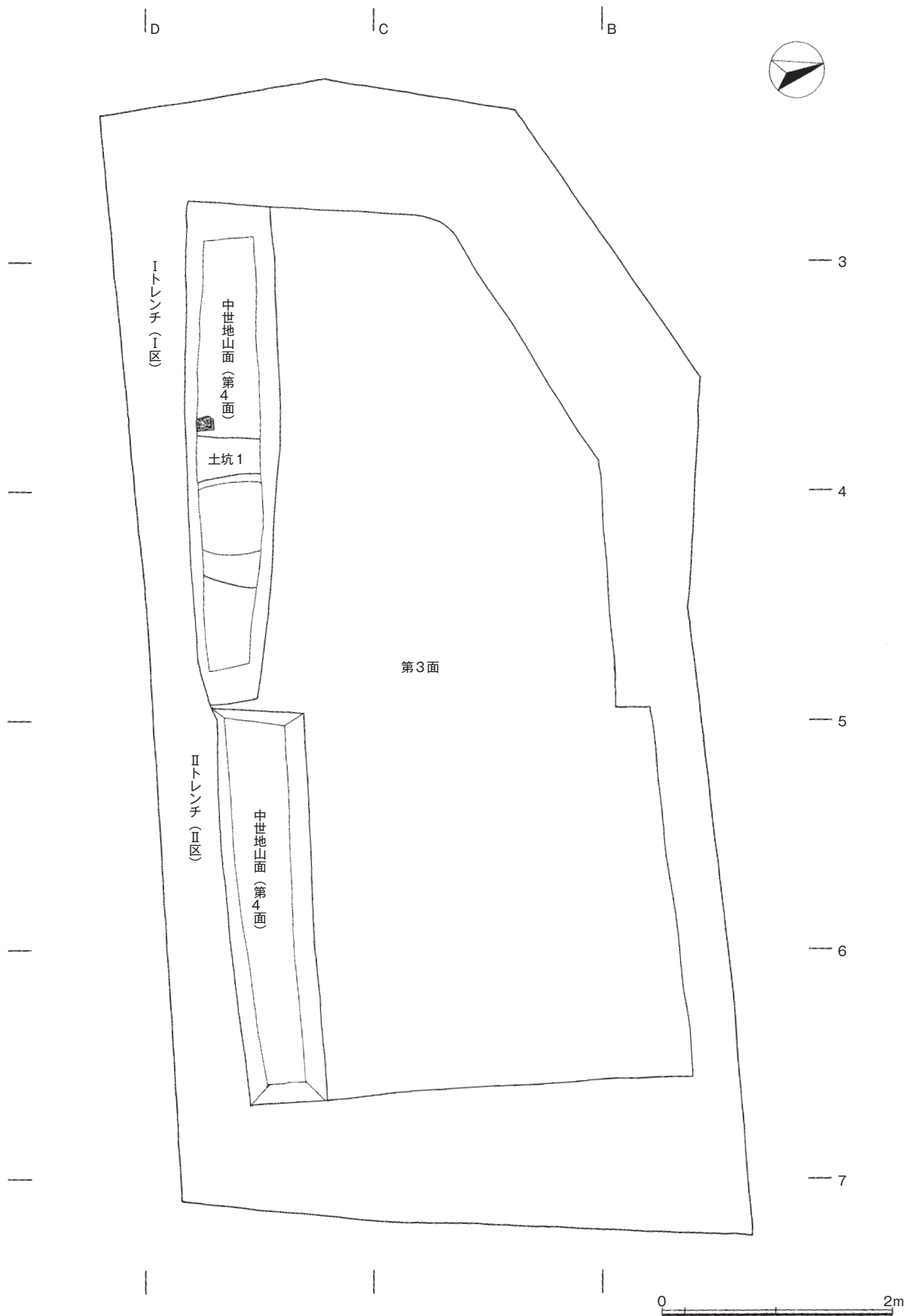


図13 第3面下トレンチ

第3面遺構外出土遺物：図12-1～31はかわらけ大・中・小皿である。小皿は主に背低のやや薄手器壁であるが、20の背高薄手器壁も混じっている。中・大皿は薄手器壁で丸深タイプが主体を占めている。33は白磁口元皿、34は瀬戸窯入子、35は北部系山茶碗、36・37は常滑窯甕片、38は南宋銭の「淳熙元寶」で背文に「十三」の元号があり、淳熙十三年(1187)に鑄造したものであろう。

4. 第3面下トレンチ (図10・13～15)

第3面検出時点で表土から2.2m以上の掘削深度に達しており、調査区壁の崩落などの危険を伴うと判断された。そこでI・II区の調査南壁際を幅80cm程、深掘りして中世基盤層の黒褐色粘質土層(10層)を確認した。地山上面の海拔高は、調査区の東端から4・5ライン中間までが16.85m前後とほぼ平坦であるのに対し、9層の西へ向かって厚くなる堆積が示すように急な傾斜をもち落ち込んでおり、西端は16.30mを測る。調査区南壁トレンチ内の中世地山面(第4面)からは土坑1基が検出されている。

土坑1：Iトレンチの中央東寄りに位置し、南北がトレンチ外に拡がる土坑である。確認した大きさは東西径107cm、南北径55cm以上、深さ42cmで底面平らな断面逆台形の掘り方である。覆土は2層から構成され、上層(1層)は拳大の破碎土丹塊、土丹粒・炭化物、かわらけ小片をやや多く含む灰褐色粘質土、下層(2層)は土丹粒・炭化物を少量含む締めりのない灰褐色粘質土が堆積していた。出土遺物は図14-1～8がかわらけである。1～4の小皿は背低で底部から開き気味立ち上がり、体部中位から内湾傾向を示す器形である。5～8の大皿は口径と底径の比率が少なめで底部から開き気味に立ち上がる器形である。

9は白磁口元碗、削り出し高台で内底面に一条沈線を巡らす、10は白磁口元皿、口唇部内外を削り加工で露胎である。11は緑釉盤(泉州窯系)で内底面に線描文、外底面に墨書痕がみられた。12～14は常滑窯片口鉢I類である。15は鉄製釘、16は鉄製品で釘隠しのようなものか。

I・II区トレンチ出土遺物：図15に示した出土遺物は、I・II区3面下トレンチの中世基盤層面上(第

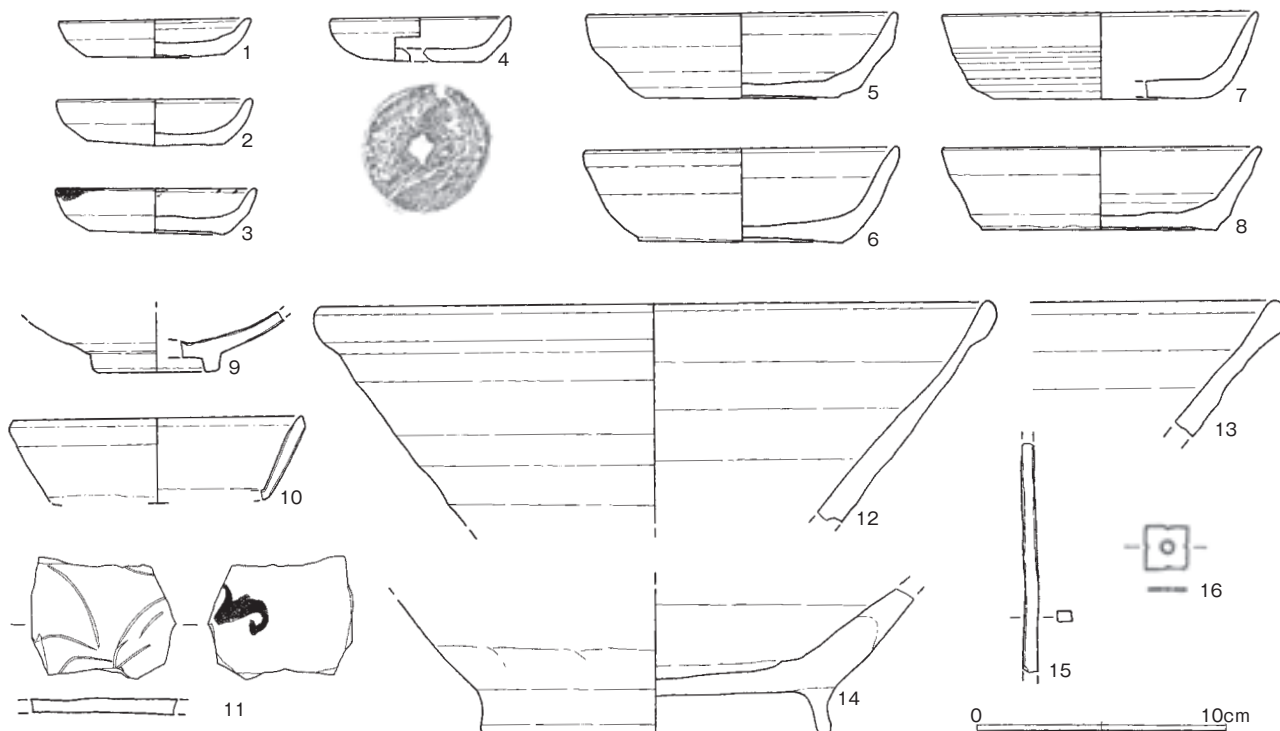


図14 第3面下土坑1出土遺物

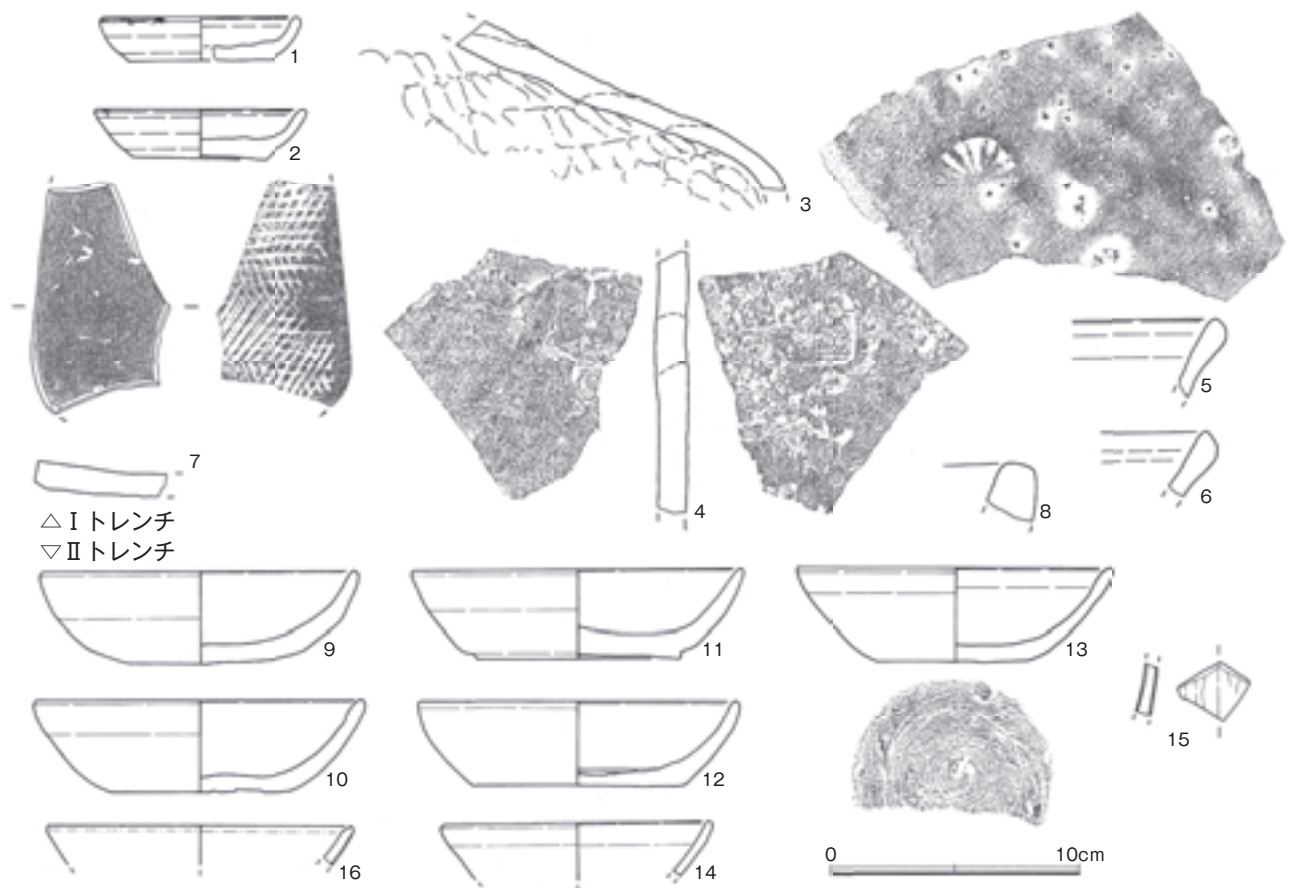


図15 第3面下トレンチ出土遺物

4面)に堆積した9層の黒褐色粘質土及び第3面構築土(7・8層)からの遺構外資料であり、I・II区に分けて掲載している。

Iトレンチの出土遺物は、1・2のかわらけ小皿が背低気味で1が内湾気味の器形、2が器壁は開きながら立ち上がるもの。3～6は常滑窯の甕と片口鉢I類(13世紀後半)である。7は猿面硯と考えられる。外面が平行状叩き目、内面は青海波文の叩き目を施した須恵器破片を利用したもので、一種の転用硯である。内面側にあたる凹面は叩き目が殆んど消去されるほどの摩耗と、わずかに墨の付着が認められる。8は滑石製鍋で内外面にノミ状工具痕を残すが、煤などの使用痕は認められない。

IIトレンチの出土遺物は、9～12がかわらけ大皿である。9・10は背高気味の器壁はわずかに内湾したものと、11・12は器壁が内湾気味に立ち上がるものに大別された。12は口縁部下より外反し、13は外底の回転糸切痕が中央部で抜けた特徴的な資料であり、ともに内底面のナデ調整が甘くロクロ目痕を残している。14はロクロ成形の白かわらけである。15は龍泉窯青磁の鎬蓮弁文碗、16は白磁口元皿で口唇部内外をヘラ削り加工を施して露胎である。

表2 遺物観察表(1)

()は復元値

挿図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
			(c m)	(c m)	(c m)	
8-1	第1面近世溝	龍泉窯 青磁 柳搔文皿	9.7	3.7	1.7	a.ロクロ b.灰色 精良堅緻 d.灰色透明 やや厚手施釉 大まかな貫入あり f.内底に柳搔劃花文
8-2	"	瀬戸 卸皿	底部片 4.9×4.5			a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.明黄灰色 砂粒 良土 d.外底部以外極めて薄く施釉 e.良好 硬質
8-3	"	瀬戸・美濃 鉄釉灯明皿	(10.1)	(4.7)	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.灰色 精良粘質土 d.茶色 極めて薄く施釉 e.良好 f.灯明皿 口縁部に粘土溜りあり
8-4	"	常滑 片口鉢Ⅰ類	体部下部～高台部片 6.5×6			b.灰色 白色粒 黒色粒 砂粒 小石粒 c.灰色
8-5	"	土錘	長さ4.9×径2.8×孔径0.8			b.微砂 海綿骨芯 c.上部部橙色だが全体として灰黄色 e.良好 f.かわらけ質
8-6	"	煙管 雁首	全長 7.1			b.真鍮製 羅字なし f.土圧でかなりの変形が見られる
8-7	第1面 遺物溜り	かわらけ	7.3	4.0	1.9	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
8-8	"	かわらけ	7.8	4.7	2.1	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
8-9	"	かわらけ	7.5	4.6	1.9	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
8-10	"	かわらけ	7.5	4.6	2.0	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
8-11	"	かわらけ	(8.2)	(4.4)	2.2	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
8-12	"	かわらけ	8.0	4.8	2.0	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
8-13	"	かわらけ	7.8	4.5	2.0	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 小石粒 粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
8-14	"	かわらけ	(11.6)	(7.2)	2.9	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c.黄橙色 e.良好
8-15	"	かわらけ	(13.6)	(8.0)	3.5	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
8-16	"	かわらけ	13.7	7.3	3.7	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
8-17	"	銭	外径2.42 内径1.92 孔径0.65 厚さ0.1			熙寧元寶 北宋 初鑄年1068年 f.真書体
8-18	"	銭	外径2.41 内径1.9 孔径0.73 厚さ0.15			紹聖元寶 北宋 初鑄年1094年 f.行書体
8-19	第2面土坑1	かわらけ	7.5	4.5	2.1	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
8-20	第2面P-1	かわらけ	(7.0)	(5.0)	1.7	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
8-21	第2面P-2	かわらけ	7.3	4.9	2.2	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c.黄橙色 e.良好
8-22	"	かわらけ	(6.8)	(3.9)	2.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 良土 c.黄灰色 e.やや甘い
8-23	"	かわらけ	(7.5)	(4.1)	2.1	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 良土 c.黄橙色 e.良好
8-24	"	かわらけ	7.8	5.0	2.1	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
8-25	"	かわらけ	(7.5)	(5.8)	1.9	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
8-26	"	かわらけ	(8.0)	5.6	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
8-27	"	かわらけ	(11.2)	(7.3)	3.0	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
8-28	第2面遺構外	かわらけ	(6.2)	(3.9)	2.0	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
8-29	"	かわらけ	(7.0)	(4.7)	2.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
8-30	"	かわらけ	7.1	4.4	1.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
8-31	"	かわらけ	7.8	5.0	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
8-32	"	かわらけ	(7.8)	(5.0)	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c.橙色 e.良好
8-33	"	かわらけ	(8.0)	(4.7)	2.1	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
8-34	"	かわらけ	(7.9)	(4.7)	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
8-35	"	かわらけ	(8.4)	(5.3)	1.9	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.橙色 e.良好

表3 遺物観察表(2)

()は復元値

挿図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
			(c m)	(c m)	(c m)	
8-36	第2面遺構外	かわらけ	(11.5)	(6.9)	3.4	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い f.灯明皿
8-37	"	かわらけ	11.7	6.2	3.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
8-38	"	かわらけ	(13.4)	(8.6)	3.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c.黄橙色 e.やや甘い
8-39	"	かわらけ	(13.4)	(7.9)	2.9	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
8-40	"	白かわらけ	口縁部～体部片			a.成形判別不可 外底指頭痕 b.微砂 良土 c.白色 e.良好 f.体部に指頭痕
8-41	"	青磁 鎬蓮弁文碗	口縁部片			a.ロクロ 外面片切彫り蓮弁文 b.灰白色 微砂 精良堅緻 d.灰緑色不透明 やや厚手施釉 f.二次焼成を受け釉薬白濁不透明
8-42	"	白磁 櫛搔劃花文碗	体部片			a.内面櫛搔劃花文 b.白色 精良堅緻 d.灰白色不透明 薄手施釉 小気泡 細かなキズあり
8-43	"	白磁 皿	体部～高台部片			a.内面型捺し 口縁部付近に雷文・内底部にかけて牡丹文 b.白色 精良堅緻 d.水青色 外面：やや厚手で透明 高台脇まで施釉 外底露胎 内面：薄手施釉だが不透明
8-44	"	瀬戸 入子	口縁部片			b.砂質 精良土 c.灰色 e.良好 硬質 f.口縁～器壁に自然釉付着 二次焼成受ける
8-45	"	瀬戸 入子	底部片 (3.9)			a.外底へラ削り b.きめ細かい精良土 c.灰白色 e.硬質 f.内面体部 自然降灰ゴマ降り状
8-46	"	備前 播鉢	口縁部片			b.黄灰色 赤色粒含むが精良 粘性強い
8-47	"	備前 播鉢	口縁部片			b.黄灰褐色 赤色粒含むが精良 粘性強い
8-48	"	常滑 甕	口縁部片			a.輪積み技法 内面指頭痕 b.暗灰色 長石 石粒 砂粒多め 粗土 c.褐色 e.堅緻
8-49	"	加工骨	4.9	1.4	1.9	f.3面削り 摩耗している
8-50	"	銭	外径2.46 内径2.01 孔径0.64 厚さ0.13			天聖元寶 北宋 初鑄年1023年 f.篆書体
11-1	第3面土坑1	かわらけ	6.8	4.5	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 良土 c.橙色 e.良好 f.外体部焼きムラ有り 灯明皿
11-2	"	かわらけ	(7.0)	(4.2)	2.0	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 良土 c.橙色 e.良好
11-3	"	かわらけ	7.2	4.5	2.0	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
11-4	"	かわらけ	(7.6)	(5.2)	2.0	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 良土 c.橙色 e.良好
11-5	"	かわらけ	(8.5)	(6.3)	1.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
11-6	"	かわらけ	(11.0)	(6.8)	3.0	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 良土 c.黄橙色 e.良好
11-7	"	かわらけ	(13.2)	(7.8)	3.4	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 良土 c.橙色 e.良好
11-8	"	かわらけ	13.5	7.5	4.0	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 c.橙色 e.良好
11-9	"	かわらけ	(12.3)	(9.5)	3.4	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 粗土 c.橙色 e.良好
11-10	"	青磁 鎬蓮弁文碗	口縁部片			a.ロクロ b.灰色 精良堅緻 d.緑灰色半透明 やや厚め施釉 貫入・気泡あり
11-11	第3面土坑2	かわらけ	7.4	4.6	2.3	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 粉質良土 c.灰橙色 e.良好
11-12	"	かわらけ	7.3	4.8	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや良土 c.黄灰色 e.やや不良
11-13	"	かわらけ	7.8	4.9	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 砂質やや粗土 c.灰橙色 e.良好
11-14	"	かわらけ	7.7	5.2	1.7	a.ロクロ 外底指頭痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質やや粗土 c.黄橙色 e.やや不良
11-15	"	かわらけ	7.5	5.4	1.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c.灰橙色 e.良好
11-16	"	かわらけ	7.8	5.3	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒少量 やや粉質良土 c.黄橙色 e.不良
11-17	"	かわらけ	7.7	4.8	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質やや粗土 c.黄灰色 e.不良
11-18	"	かわらけ	12.7	8.1	3.4	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手丸深 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粉質良土 c.黄橙色 e.やや不良
11-19	"	かわらけ	12.6	7.8	3.4	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 砂質やや粗土 c.橙色 e.良好
11-20	第3面土坑3	かわらけ	(7.0)	(5.6)	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好

表4 遺物観察表(3)

()は復元値

挿図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
			(c m)	(c m)	(c m)	
11-21	第3面土坑4	かわらけ	(7.5)	(4.8)	1.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c.黄橙色 e.良好
11-22	”	かわらけ	(7.7)	(5.5)	1.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
11-23	”	瀬戸 入子	2.2	1.5	0.7	a.八弁輪花状 b.灰白色 良土 d.口縁一部、内底に自然降灰 e.良好 硬質
11-24	”	銭	外径2.46 内径2.01 孔径0.64 厚さ0.13			元寶通宝 北宋 初鑄年 1078年 f.真書体
11-25	第3面P-2	褐釉 壺	口縁部片 残存長2.0×幅4.1×厚0.6			b.暗灰色 砂粒 気泡あり d.褐色不透明 薄手施釉
11-26	第3面P-3	白かわらけ	口縁部小片			a.手捏ね b.微砂 c.白色 e.良好
11-27	第3面P-4	穿孔かわらけ	(8.0)	(5.8)	1.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い f.底部に穿孔あり
11-28	”	かわらけ	(7.5)	(5.3)	1.9	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
11-29	”	砥石	残存長3.6×幅3.2×厚0.5			f.両面共に使用痕なし 鳴滝産 仕上砥石
11-30	第3面P-5	かわらけ	(13.0)	(9.2)	3.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 やや粗土 c.橙色 e.良好
11-31	第3面P-7	かわらけ	(8.7)	(6.4)	1.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 土丹粒 粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
11-32	第3面P-8	瀬戸 壺	口縁部片 口径(3.1)			b.灰色 良土 d.緑灰色透明 やや厚い 部分的に剥離 e.良好 硬質
11-33	”	褐釉 壺	体部片 残存長3.3×幅3.0×厚0.65			b.暗灰色 砂粒 気泡あり d.褐色 部分的に青い 半透明 薄手施釉 f.刻文様あり
11-34	第3面P-9	常滑 甕	肩部片 残存長6.3×幅9.2×1.3			a.輪積み技法 内面指頭痕 b.灰色の間に灰橙色挟む 微砂 長石 粗土 c.降灰部黄白色・褐色 d.自然降灰
11-35	第3面P-10	かわらけ	7.6	4.7	2.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒少量 砂質やや粗土 c.黄灰色 e.不良
11-36	”	かわらけ	(12.3)	(8.1)	3.1	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒少量 やや砂質粗土 c.黄灰色 e.不良
11-37	”	かわらけ質 土製品	残存長4.1×高さ2.2			a.手捏ね 製品用途不明 b.微砂多量 海綿骨芯 赤色粒 砂質粗土 c.橙色 e.良好
11-38	第3面P-11	かわらけ	(13.6)	(9.7)	2.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 やや粗土 c.橙色 e.良好
11-39	第3面P-12	かわらけ	7.4	4.4	2.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手丸深 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粉質良土 c.橙色 e.良好 f.回転糸切りの際に紐抜けが悪く 器壁に溝状の傷あり
11-40	”	かわらけ	7.7	5.1	2.1	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手丸深 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒少量 やや砂質良土 c.黄橙色 e.良好
11-41	”	かわらけ	13.7	7.6	4.1	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手丸深 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質やや良土 c.橙色 e.良好
11-42	第3面P-13	かわらけ	(7.6)	(5.7)	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 c.橙色 e.良好
11-43	”	かわらけ	7.7	5.4	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.灯明皿 全体的に歪んでいる
11-44	第3面P-16	かわらけ	8.8	6.8	1.9	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
11-45	第3面P-21	かわらけ	(12.6)	(8.1)	3.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
11-46	第3面P-22	かわらけ	(7.5)	(5.1)	2.1	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好 f.口縁以外煤ける
11-47	”	かわらけ	(13.3)	(7.9)	3.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 良土 c.黄橙色 e.良好
11-48	”	常滑 片口鉢Ⅰ類	高台部片 残存長6.3×幅11.0			a.輪積み技法 内面指頭痕 b.灰色 砂粒少量 白色粒 黒色粒 粘質土 c.灰色 f.貼付け三角高台 内面若干摩耗
11-49	第3面P-24	青磁 蓮弁文碗	口縁部小片			a.ロクロ 外面片切彫り蓮弁文 b.精良堅緻 気孔有り d.灰緑色半透明 やや厚手施釉 若干の貫入有り
11-50	第3面P-25	常滑 片口鉢Ⅱ類	底部片 残存長13.0×幅10.2			a.輪積み技法 内面指頭痕 横ナデ 離れ砂付着 b.灰褐色 白色粒多量 黒色粒・砂粒多量 粘質土 c.暗褐色 f.使用による摩耗有り
12-1	第3面遺構外	かわらけ	7.5	5.1	1.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 開き気味の器形で背低い b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
12-2	”	かわらけ	(7.4)	(5.3)	1.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 良土 c.橙色 e.良好
12-3	”	かわらけ	(7.3)	(5.5)	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
12-4	”	かわらけ	(7.4)	(5.0)	1.9	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
12-5	”	かわらけ	7.9	5.4	1.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 良土 c.黄灰色 e.やや甘い

表5 遺物観察表(4)

()は復元値

挿図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
			(c m)	(c m)	(c m)	
12-6	第3面遺構外	かわらけ	7.9	5.6	1.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 良土 c.黄灰色 e.やや甘い
12-7	"	かわらけ	(8.4)	(6.1)	1.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 土丹粒 海綿骨芯 やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
12-8	"	かわらけ	(8.2)	(5.4)	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 土丹粒 海綿骨芯 良土 c.黄橙色 e.良好
12-9	"	かわらけ	7.3	5.2	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粉質やや粗土 c.黄灰色 e.良好
12-10	"	かわらけ	7.4	5.2	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 内湾器形で背高気味 b.微砂 海綿骨芯・赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
12-11	"	かわらけ	7.3	5.6	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
12-12	"	かわらけ	7.9	5.7	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 内湾器形で背高気味 b.微砂 海綿骨芯・赤色粒 やや良土 c.橙色 e.良好
12-13	"	かわらけ	(7.2)	(5.2)	1.9	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.外面 体部に糸切の際の糸痕あり
12-14	"	かわらけ	(7.2)	(4.9)	1.9	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 やや粗土 c.橙色 e.良好
12-15	"	かわらけ	(7.4)	(3.1)	2.1	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 良土 c.黄橙色 e.良好
12-16	"	かわらけ	(7.7)	(4.3)	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粉質良土 c.黄灰色 e.やや甘い
12-17	"	かわらけ	7.9	4.7	1.9	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粉質やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
12-18	"	かわらけ	(8.1)	(5.0)	2.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粉質良土 c.黄灰色 e.やや甘い
12-19	"	かわらけ	(8.3)	(5.2)	2.0	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粉質良土 c.黄灰色 e.やや甘い
12-20	"	かわらけ	7.4	3.7	3.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手器壁で背高気味 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粉質良土 c.橙色 e.良好 f.口縁部内外に油煙煤付着
12-21	"	かわらけ	(10.7)	5.9	3.9	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手器壁で背高器形 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粉質やや良土 c.黄橙色 e.不良
12-22	"	かわらけ	(10.7)	5.8	3.1	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手器壁で背高気味 b.微砂 海綿骨芯 良土 c.暗橙色 e.良好
12-23	"	かわらけ	(10.9)	(5.2)	3.1	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 良土 c.橙色 e.良好
12-24	"	かわらけ	(11.3)	(6.5)	3.0	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂多め 海綿骨芯 赤色粒・土丹粒 粉質やや良土 c.黄橙色 e.良好
12-25	"	かわらけ	(11.3)	(7.4)	2.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
12-26	"	かわらけ	12.4	6.9	3.1	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質やや粗土 c.橙色 e.良好
12-27	"	かわらけ	12.5	7.8	3.2	a.ロクロ 粗めの外底回転糸切痕 板状圧痕 底部厚手器壁 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒少量 やや粉質良土 c.黄灰色 e.不良
12-28	"	かわらけ	(12.5)	(6.0)	3.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手器壁で背高器形 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒少量 粉質良土 c.橙色 e.良好
12-29	"	かわらけ	(12.9)	(8.0)	3.1	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手器壁 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 砂質やや粗土 c.橙色 e.良好
12-30	"	かわらけ	12.0	8.0	3.65	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手器壁 b.微砂 海綿骨芯 小石粒 やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い f.内底面のナゲ激しい
12-31	"	かわらけ	(14.0)	(8.5)	3.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 良土 c.橙色 e.良好
12-32	"	かわらけ	(13.8)	(8.0)	3.9	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 良土 c.黄橙色 e.良好 f.内底面ロクロ横 ナゲの回転痕
12-33	"	白磁 口元皿	体部小片			b.灰色 精良堅緻 d.灰色不透明 薄手施釉 f.体部内面に沈線が巡る
12-34	"	瀬戸 入子	残存率口～体部にかけて1/8口径(7.4)			a.輪花状 b.黄灰色 微砂 良土 d.灰色 薄く施釉 e.良好
12-35	"	北部系山茶碗	(12.9)	—	—	a.ロクロ 薄手器壁 口唇端部が縁帯気味 b.灰白色 白色粒 黒色粒少量 良土 c.灰白色 d.自然降灰 e.良好 硬質 f.東濃型
12-36	"	常滑 甕	肩部小片			a.ロクロ 外面：平行状の叩き目 内面：指頭痕 横位ナゲ b.茶灰色 白色砂粒 流文状 粘性あり c.茶灰色 d.外面：灰白色自然降灰 e.良好
12-37	"	常滑 甕	底部片			a.輪積み技法 内面：指頭痕 横位ナゲ 外面：縦位ナゲ 外底砂底 b.灰橙色 長石 石英 砂粒多い 粗土 c.黄橙色 e.不良
12-38	"	銭	外径2.42 内径1.86 孔径0.63 厚さ0.14			淳熙元寶 南宋 初鑄年 1174年 f.真書体 背文「十三」
14-1	第3面下土坑1	かわらけ	7.7	5.5	1.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 背低器形 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質 やや粗土 c.淡橙色 e.良好
14-2	"	かわらけ	7.6	5.6	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 内湾・背低器形 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 やや良土 c.黄灰色 e.やや不良

表6 遺物観察表(5)

()は復元値

挿図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
			(c m)	(c m)	(c m)	
14-3	第3面下土坑1	かわらけ	8.0	5.5	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 内湾・背低器形 b.微砂 海綿骨芯 やや粉質良土 c.黄灰色 e.不良 f.灯明皿
14-4	"	かわらけ	7.2	4.7	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 内湾・背低器形 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 良土 c.暗橙色 e.良好 f.底部中央寄りに焼成後の穿孔あり
14-5	"	かわらけ	12.4	7.8	3.4	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 底部から開く立ち上り口縁部下で内湾気味器形 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
14-6	"	かわらけ	12.5	8.2	3.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 底部から開き気味器形 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色 e.不良
14-7	"	かわらけ	(12.6)	(8.6)	3.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 内湾した器形 外面体部下半に細かなロクロ目の痕跡多い b.微砂 海綿骨芯 やや砂質良土 c.黄灰色 e.良好
14-8	"	かわらけ	12.6	9.3	3.3	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 底部から開き気味器形 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや良土 c.黄灰色 e.やや不良
14-9	"	白磁 口元碗	底部～高台片 高台径(4.8)			a.ロクロ 削り出し高台で内底面に1条沈線巡る 中央部凸出 b.灰白色 緻密 d.灰白色透明 薄手施釉 高台部露胎
14-10	"	白磁 口元皿	口縁～体部片			a.ロクロ 口唇部内外削り加工 b.灰白色 緻密 d.灰白色不透明 薄手施釉 口唇部内外・体部下露胎
14-11	"	泉州窯系 緑釉盤	底部片			a.外底砂目 b.灰褐色 小石粒多量 粗土 d.暗緑色不透明 薄手施釉 銀化 灰付着 e.堅緻 f.内底面に線描を施文 裏面に墨痕
14-12	"	常滑 片口鉢I類	口縁～胴部片 口径(27.0)			a.輪積み技法 内面指頭痕 口縁端部丸く肥厚 b.灰色 砂粒 石英 長石粒多い 粗土 e.硬質 f.内面使用摩耗 中野編年5型式
14-13	"	常滑 片口鉢I類	口縁部片			a.輪積み技法 内面指頭痕 口縁端部丸く肥厚 b.灰色 砂粒 石英 長石粒多い 粗土 e.硬質
14-14	"	常滑 片口鉢I類	底部～高台部片 高台径(13.8)			a.輪積み技法 貼付け高台 胴部下位横位へラ削り 口縁端部丸く肥厚 b.灰色 砂粒 石英 長石粒多い 粗土 e.硬質
14-15	"	鉄釘	残存長9.3×厚さ0.45			a.鍛造 断面四角形 頂部と先端部欠失
14-16	"	鉄製品	長さ1.7×厚さ0.1			a.方形の鉄板で各辺の中央にV字型の切れ込みもつ四花弁状 中央に径0.4mm大の孔 f.釘隠のようなものか
15-1	第3面下 Iトレンチ	かわらけ	(7.8)	(5.7)	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 小石粒 粗土 c.黄橙色 e.良好 f.灯明皿
15-2	"	かわらけ	(8.3)	(5.3)	2.0	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c.黄灰色 e.やや甘い f.灯明皿
15-3	"	常滑 片口鉢I類	肩部～胴部片			a.輪積み技法 b.灰褐色 白色粒やや多め 黒色粒 粗土 c.暗褐色 d.外面：暗灰緑色自然降灰 e.硬質 f.外面に菊花文スタンプ
15-4	"	常滑 甕	肩部～胴部片			a.輪積み技法 b.淡褐色 白色粒多め 粗土 c.淡褐色 e.硬質 f.外面に格子目スタンプ 表面再火の細かな剥離
15-5	"	常滑 片口鉢I類	口縁部小片			b.黄灰色 白色粒 粗土 c.褐色 e.硬質
15-6	"	常滑 片口鉢I類	口縁部小片			b.灰色 白色粒 石英多め 粗土 c.灰色 e.硬質
15-7	"	須恵器 甕 転用硯	胴部片			b.灰色 きめ細かい c.灰色 e.堅緻 f.外面：平行状叩き目 内面：同心円状の叩き目が摩耗してほとんど確認できず
15-8	"	滑石 鍋	口縁部小片			a.内面：ノミ状工具による横位の削り 外面：ノミ状工具による縦位の削り
15-9	第3面下 IIトレンチ	かわらけ	(12.8)	(8.4)	3.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 やや粗土 c.灰黄色 e.やや甘い
15-10	"	かわらけ	(13.0)	(7.5)	3.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 良土 c.橙色 e.良好
15-11	"	かわらけ	(13.2)	(8.1)	3.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 やや粗土 c.灰黄色 e.やや甘い
15-12	"	かわらけ	(12.5)	(8.5)	3.4	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 黒色粒 土丹粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面にロクロ目痕を残す
15-13	"	白かわらけ	口縁部片 口径(10.7)			a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 やや粗土 c.白色(やや黄味) e.やや甘い
15-14	"	青磁 鍋蓮弁文碗	体部小片			b.灰色 精良堅緻 d.緑灰色不透明 厚手施釉
15-15	"	白磁 口元皿	口縁部小片 (12.2)			b.灰色 精良堅緻 気孔あり d.乳白色 半透明 外体部厚手施釉 口縁部露胎

第四章 まとめ

本遺跡が所在する長谷大谷戸周辺は、これまでの調査事例や文献史料が殆んどみられず、不明な点が多い地域にあった。さらに今回の調査面積は狭小で限られた範囲に留まり、検出した遺構も希薄な状況であったため、この場の空間的な様相の把握といった点については窺い知れなかった。そのような中、各時期の生活面に伴う遺構はほぼ一定の軸方位を示し、現在の道路・敷地境のラインと近似した方向で発見され、中世期から近世まで変化することなく継承していたことが想像された。以下、各生活面の遺構についての初見と、出土遺物を基にして年代観やその遺物組成についても触れて簡単なまとめをしたい。

検出した生活面は中世地山上面まで含め4時期であるが、前述したように各面ではほぼ一定の軸方位で遺構の重複がみられ、さらに第1・2面では同一面に近い遺構の新旧関係が確認された。また出土遺物から調査地の年代観をみると、中世地山上面においては遡っても13世紀中頃から生活の痕跡が認められはじめ、14世紀中頃までと比較的に短い期間ながら生活面の造り替えが行われていたことが窺える。これは谷戸の山裾斜面を掘削や削平の造成を行い、それによって得られた大小土丹塊で整地を行い平地地形を拡張して生活面とする土地利用の様子が想像された。

第4面は、第3面検出後において調査区南壁トレンチ（Ⅰ・Ⅱトレンチ）を入れて確認したのが黒褐色粘質土の中世基盤層上面から土坑が発見された。土坑覆土や面上包含層からは概ね13世紀中頃以降の時期を示すと考えられるかわらけ、青磁・白磁の碗・皿や常滑窯の甕・片口鉢などかみられた。

第3面は、中世地山上に大小土丹塊を粗く積み増した上に破碎土丹によって整地された地形面であり、この面から掘り込んだ掘立柱建物と思しき柱穴列、土坑、ピットなどが検出された。この生活面は土坑などの遺構や面上包含層の出土遺物から概観すると、主体となるかわらけや国産陶器などからみて13世紀後葉頃に比定したいところである。

第2面も破碎した大小土丹塊を多く混入して造成された整地層であり、土坑、ピットなどが掘り込まれていた。遺構に伴うかわらけや常滑・備前製品などの遺物組成から、この生活面の年代観は14世紀前半頃に比定したいところである。

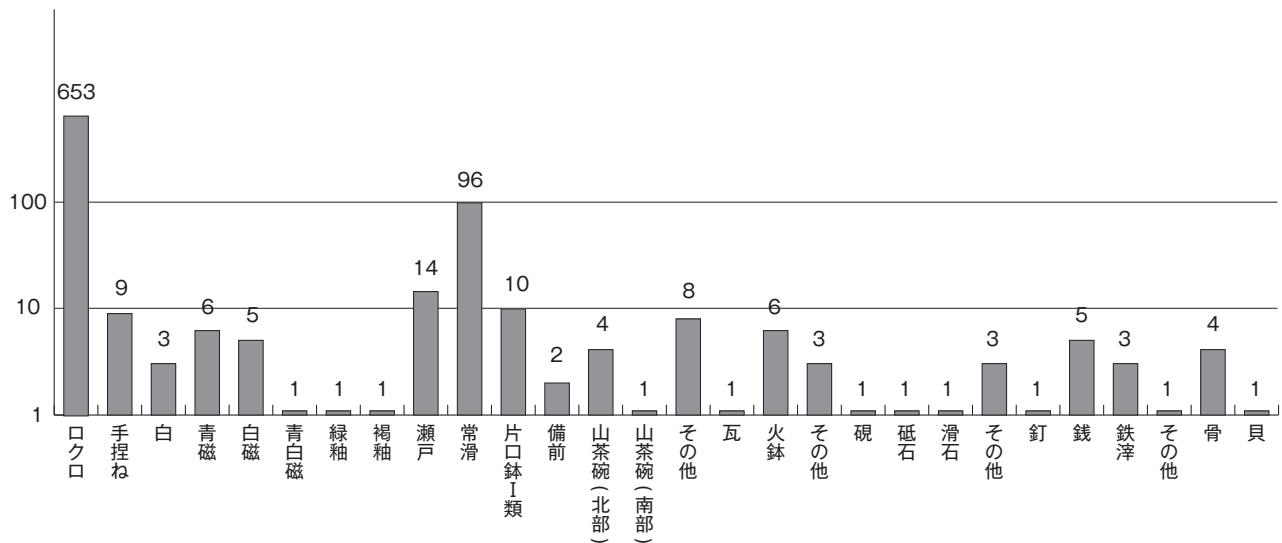
第1面は、調査区東側にかわらけを主体とした遺物溜りが認められ、さらに中世遺構を壊して開削された宝永火山灰が溝底に厚く堆積した近世溝が検出された。宝永四年(1707年)、富士山噴火で火口から噴出した火山灰などが上空高く舞い上がり、偏西風に乗り房総半島にまで降り注いだという。鎌倉でもその痕跡を示す事例が二階堂永福寺をはじめ、近世の水田耕作土に伴い数か所で確認されている(河野ほか 1982、原ほか 1997、原ほか 2001)。さらに当時、宝永火山灰被害から田畑の土をよみがえさせる方法として、降灰に覆われた表層部と深層部の土を数条の溝を掘って入れ替える「天地返し」という土壌改良法、また溝を開削して水路に降灰を流し捨てたる「砂除堰」などの除去作業で田畑を復旧したことが知られる。県内の「天地返し」好事例が足柄上郡山北町に所在する河村城跡で発見されている。近世溝は底面に厚く火山灰が堆積していたことから、上記のような降灰の除去作業に関わる溝であった可能性も考えられよう。

出土遺物についてみると、調査で出土した遺物は分類困難な小破片を除き接合後の破片数にして845点が得られた。このうち大多数を占めているのがかわらけのロクロ成形 653点で全体出土量の約8割近くにも上っており、手捏ね成形は地形層などの客土に混じって僅か9点が認められただけである。次に

表7 遺物層位別出土数量表

種類 \ 出土地	第1面上層	第1面	第2面	第2面下 トレンチ	個数	比率(%)	
かわらけ	ロクロ	123	94	370	66	653	77.3
	手捏ね	8	0	1	0	9	1.1
	白	0	1	1	1	3	0.4
舶載陶磁器	青磁	4	0	1	1	6	0.7
	白磁	0	1	1	3	5	0.6
	青白磁	1	0	0	0	1	0.1
	緑釉	0	0	0	1	1	0.1
	褐釉	0	0	1	0	1	0.1
国産陶磁器	瀬戸	11	1	2	0	14	1.7
	常滑	31	5	24	36	96	11.4
	片口鉢I類	1	0	2	7	10	1.2
	備前	2	0	0	0	2	0.2
	山茶碗(北部)	2	0	2	0	4	0.5
	山茶碗(南部)	0	1	0	0	1	0.1
	その他	7	0	0	1	8	1
土製品	瓦	1	0	0	0	1	0.1
	火鉢	1	0	5	0	6	0.7
	その他	1	1	1	0	3	0.4
石製品	硯	1	0	0	0	1	0.1
	砥石	0	0	1	0	1	0.1
	滑石	0	0	0	1	1	0.1
	その他	1	1	1	0	3	0.4
金属製品	釘	0	0	0	1	1	0.1
	銭	2	1	2	0	5	0.6
	鉄滓	1	0	2	0	3	0.4
	その他	0	0	0	1	1	0.1
遺自然	骨	1	0	2	1	4	0.5
	貝	0	0	0	1	1	0.1
合計	199	106	419	121	845	100%	
比率	24	12	50	14	100%		

表8 遺物種類別の出土比率表

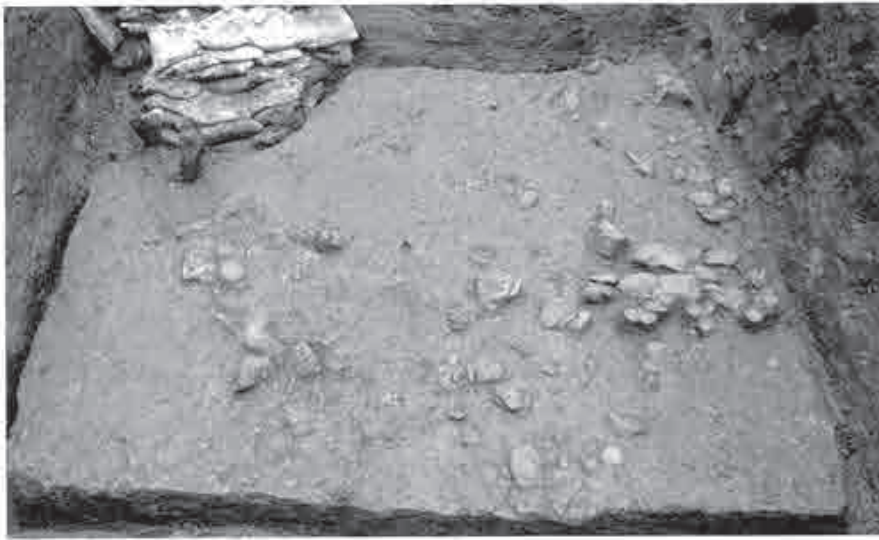


多く認められたのが常滑窯の甕・片口鉢106点(12%)であるが、瀬戸窯製品14点(1.7%)や貿易陶磁器の全体量は14点(1.7%)と低い出土比率を示していたのが特徴であろう。

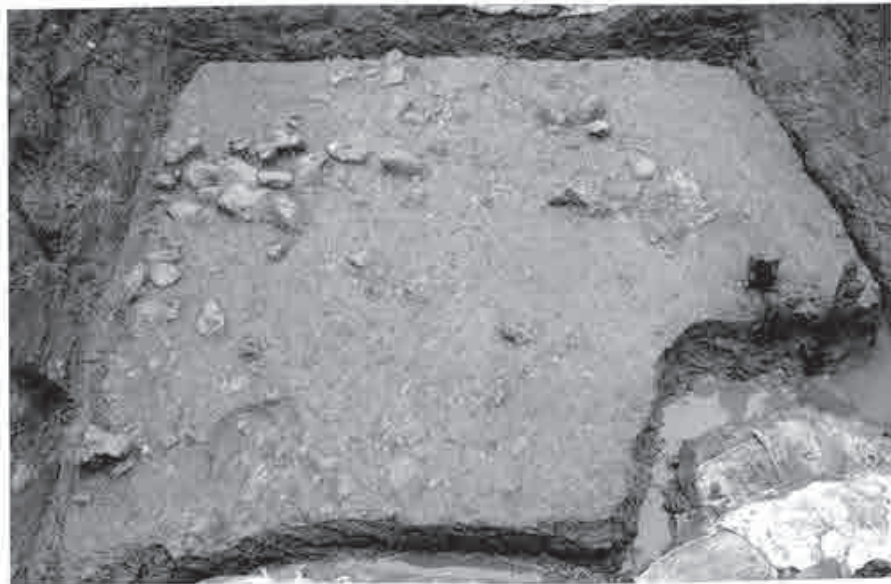
今回は狭い範囲の調査面積であり、掘削深度にも限りがあったために検出遺構の繋がりや覆土の新旧関係など判別に迷うことも多かったものの、出土遺物はある程度の種類・量が認められ、人々の活動を窺わせるものであった。遺構密度は低いものの、第3面の柱穴列は調査区外に広がる掘立柱建物と予想される状況から寺院や屋敷に関わりをもつ空間なのかもしれない。今回の調査地点では鎌倉時代前半期や南北朝時代以降の中世の土地利用については不明であり、今後の周辺調査による調査事例の蓄積が待たれるところである。

引用・参考文献

- 秋山哲雄 2006『北条氏権力と都市鎌倉』吉川弘文館 鎌倉市教育委員会
鎌倉市教育委員会編 1990「としよりのはなし」『鎌倉市文化財資料』第7集
鎌倉文化研究会編 1972「鎌倉 - 史蹟めぐり会記録 -」
河野真知郎・福田 誠・原 廣志 1982『史跡永福寺跡昭和57年度発掘調査概報』史跡永福寺跡発掘調査団・鎌倉市教育委員会
五味文彦 1995「大仏再建 - 中世民衆の熱狂 -」『講談社選書メチエ』56 講談社
宗臺秀明 2002「14世紀のかわらけ」『かながわの中世 - 鎌倉から小田原へ -』神奈川考古学会
宗臺秀明 2005「中世鎌倉出土の土器・陶磁器」『全国シンポジウム中世窯業の諸相 - 生産技術の展開と編年 - 資料集』同実行委員会
宗臺富貴子 1996「鎌倉・今小路西遺跡(御成小学校)の瀬戸製品について - 古瀬戸前期から古瀬戸後期までの出土遺物 -」『(財)瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第4輯
宗臺富貴子 2002「南関東の陶磁器流通」『中世東国の世界2 南関東』浅野晴樹・齋藤慎一編 高志書院
中野晴久 2012「常滑窯の展開」『シンポジウム「中世渥美・常滑焼をおって」』
貫 達人・川副武胤 1979『鎌倉市史 社寺編』鎌倉市史編纂委員会 吉川弘文館
貫 達人・川副武胤 1980『鎌倉廃寺事典』有隣堂
原 廣志・須佐直子・小林重子 1997「宇津宮辻子幕府跡(No.239)小町二丁目361番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』13(第2分冊) 鎌倉市教育委員会
原 廣志・須佐直子・秋山哲雄 2001「大倉幕府周辺遺跡群(No.49)雪ノ下四丁目580番10外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』17(第2分冊) 鎌倉市教育委員会
藤沢良祐 2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院
馬淵和雄 1997「中世食文化の諸相 - 食器からみた中世鎌倉の都市空間 -」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集
馬淵和雄 1998『鎌倉大仏の中世史』新人物往来社
山本信夫ほか 2000「大宰府条坊跡XV - 陶磁器分類編 -」『大宰府市の文化財』第49集 大宰府市教育委員会



◀ a. I区第1面全景(西から)



▶ b. I区第1面全景(東から)



◀ c. 同上がわらけ溜り



◀ a. I区第2面全景(南から)



▶ b. II区第2面全景(西から)



◀ c. I区第2面遺構(東から)

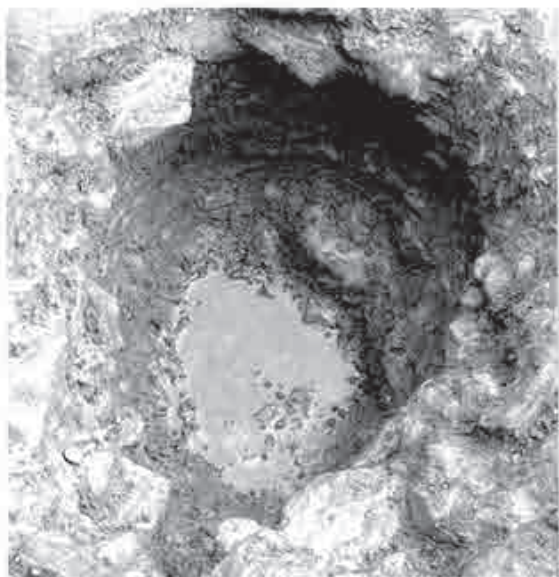


◀ a. II区第2面全景(東から)

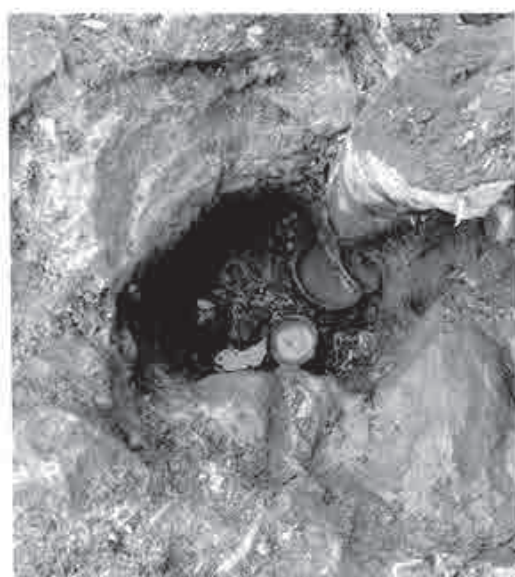


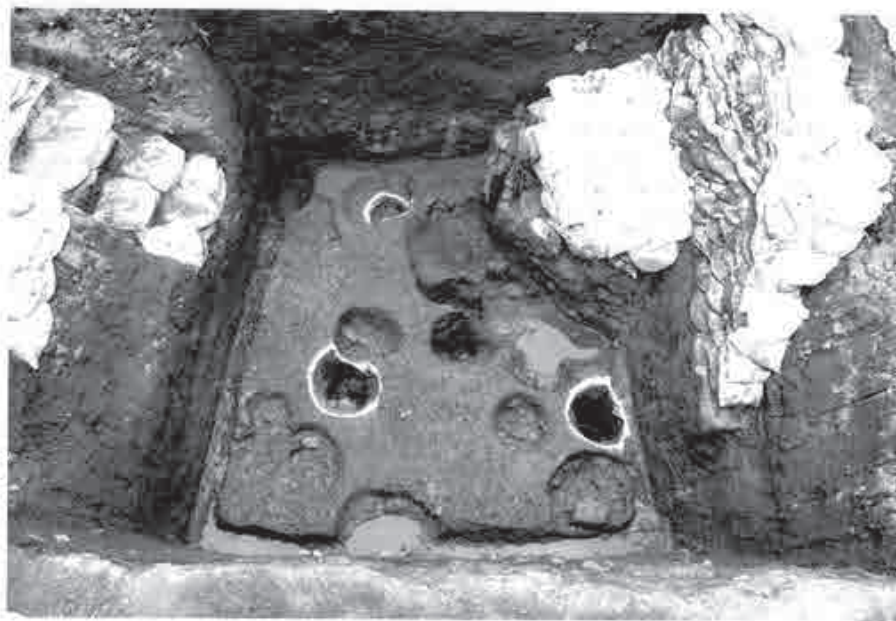
▶ b. 第1面近世溝

▼ c. 第2面P 1



▼ d. 第2面P 2





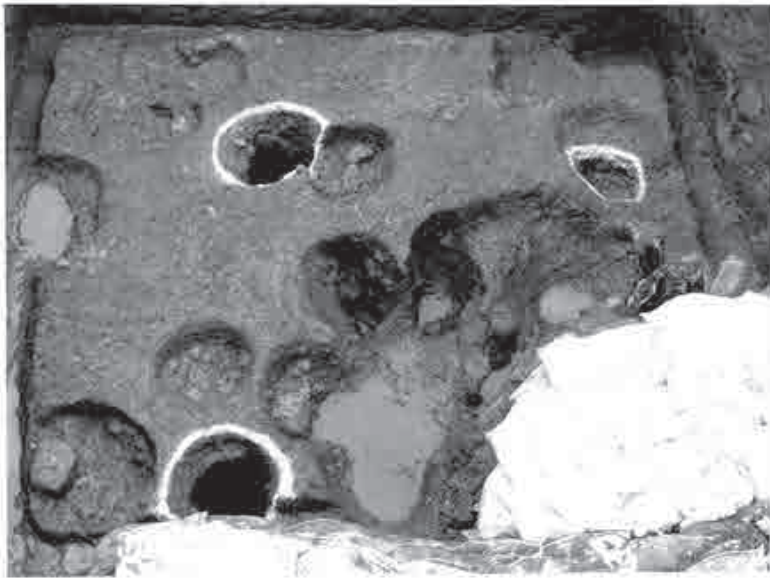
◀ a. I区第3面全景(南から)



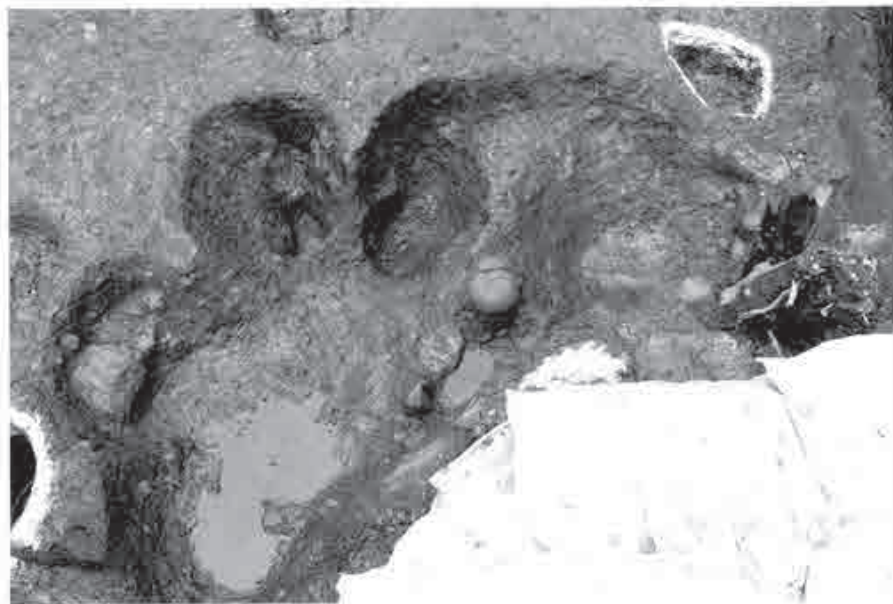
▶ b. II区第3面全景(西から)



◀ c. I区第3面全景(東から)

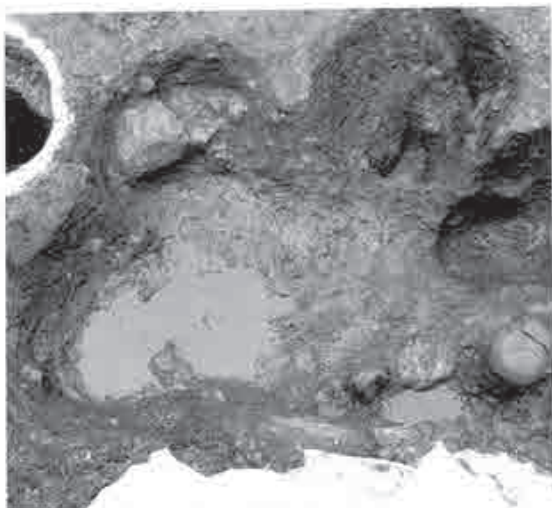


◀ a. 第3面建物1(東から)

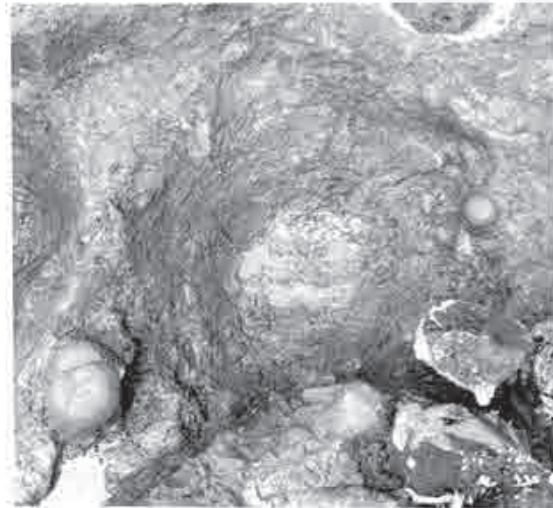


▶ b. 第3面土坑1・2(東から)

▼ c. 同上 土坑1

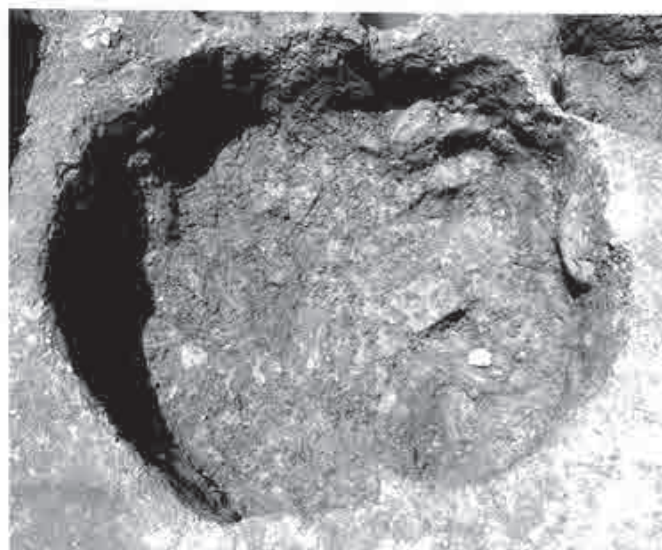


▼ d. 同上 土坑2

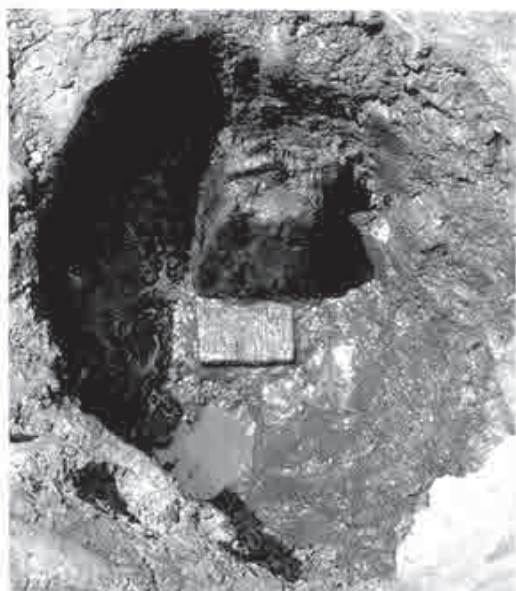




▲ a. II区第3面全景(東から)



▲ b. 第3面土坑4



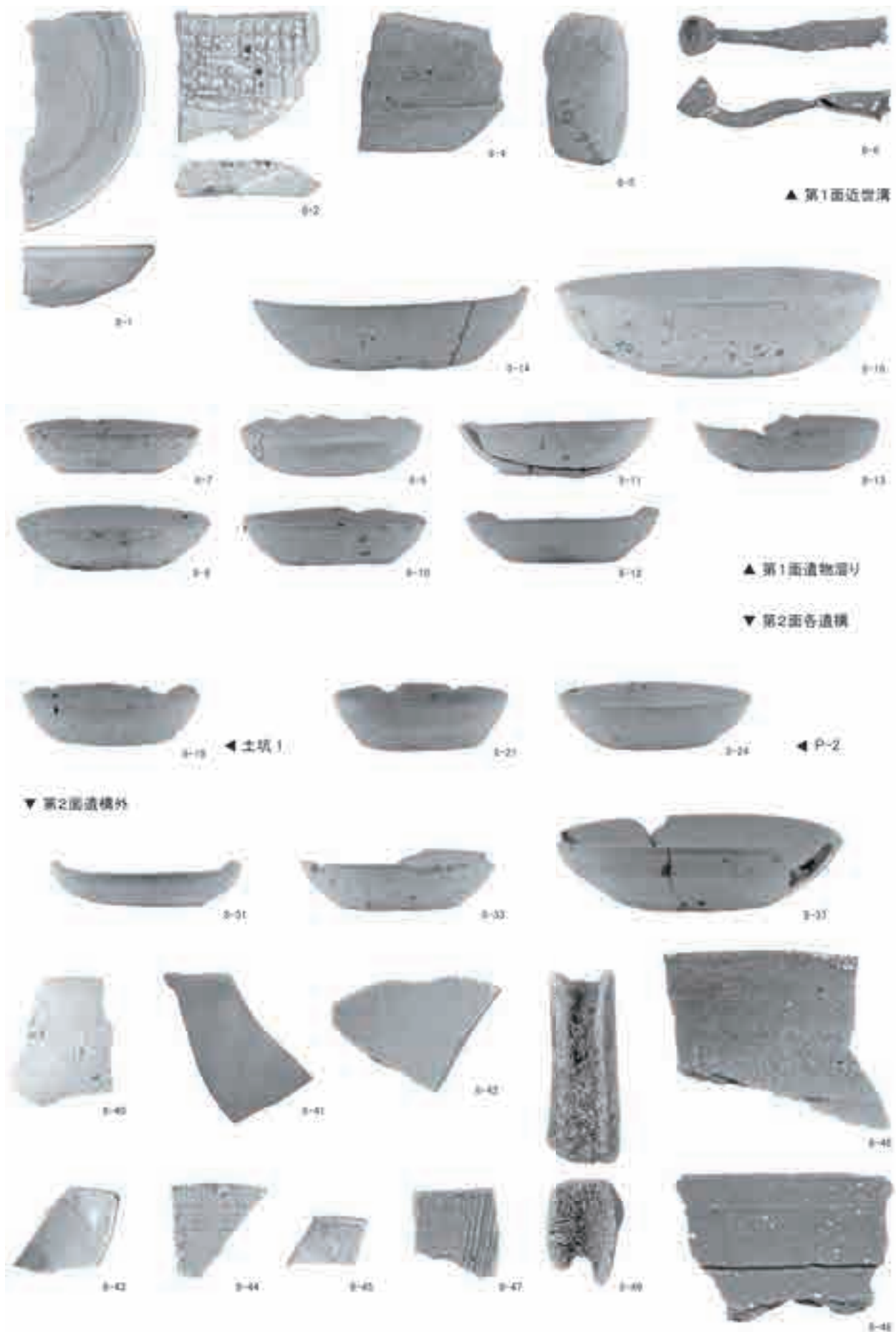
▲ c. 柱穴列1 P25



▲ d. 柱穴列1 P26



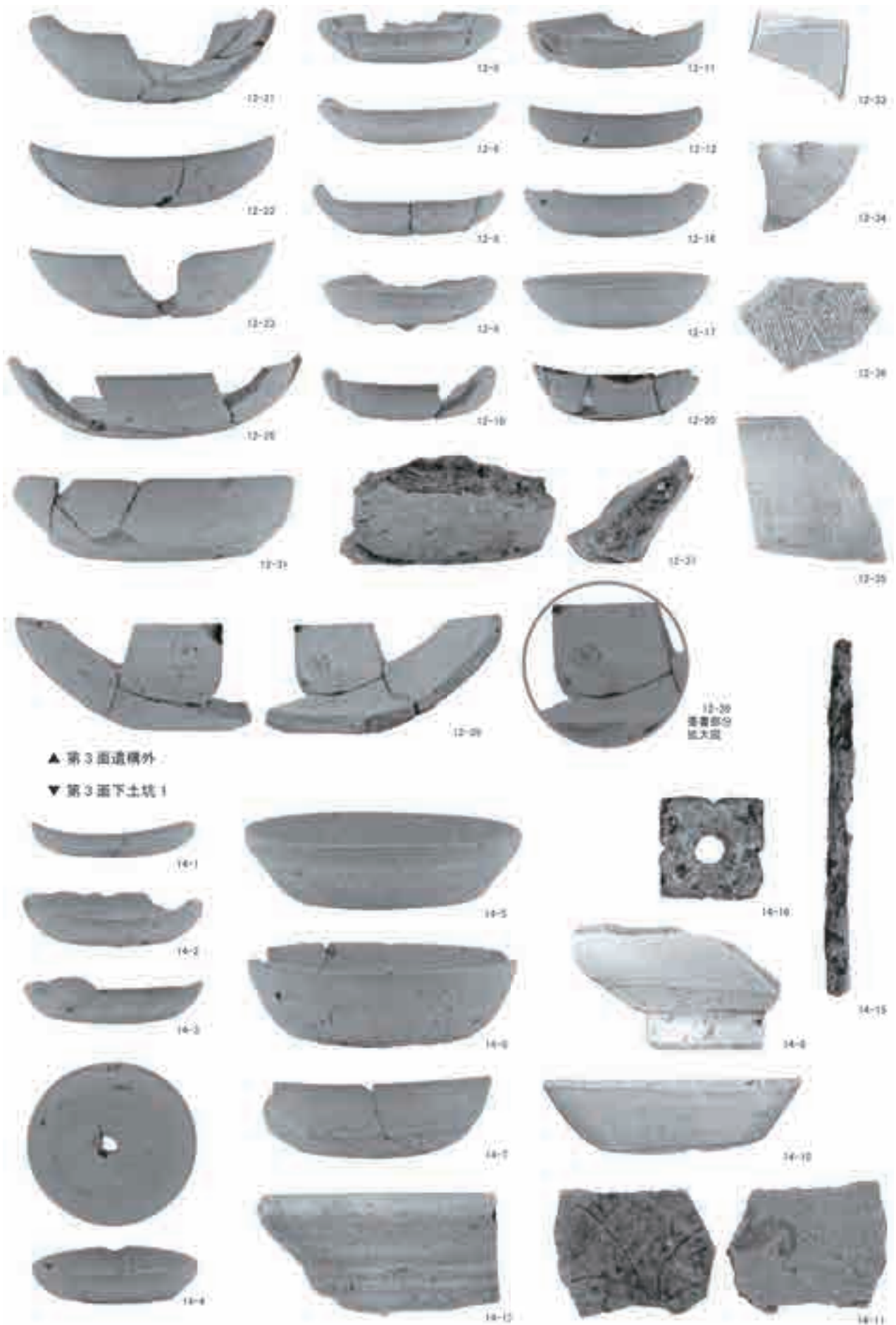
▲ e. I区調査区南壁土層断面



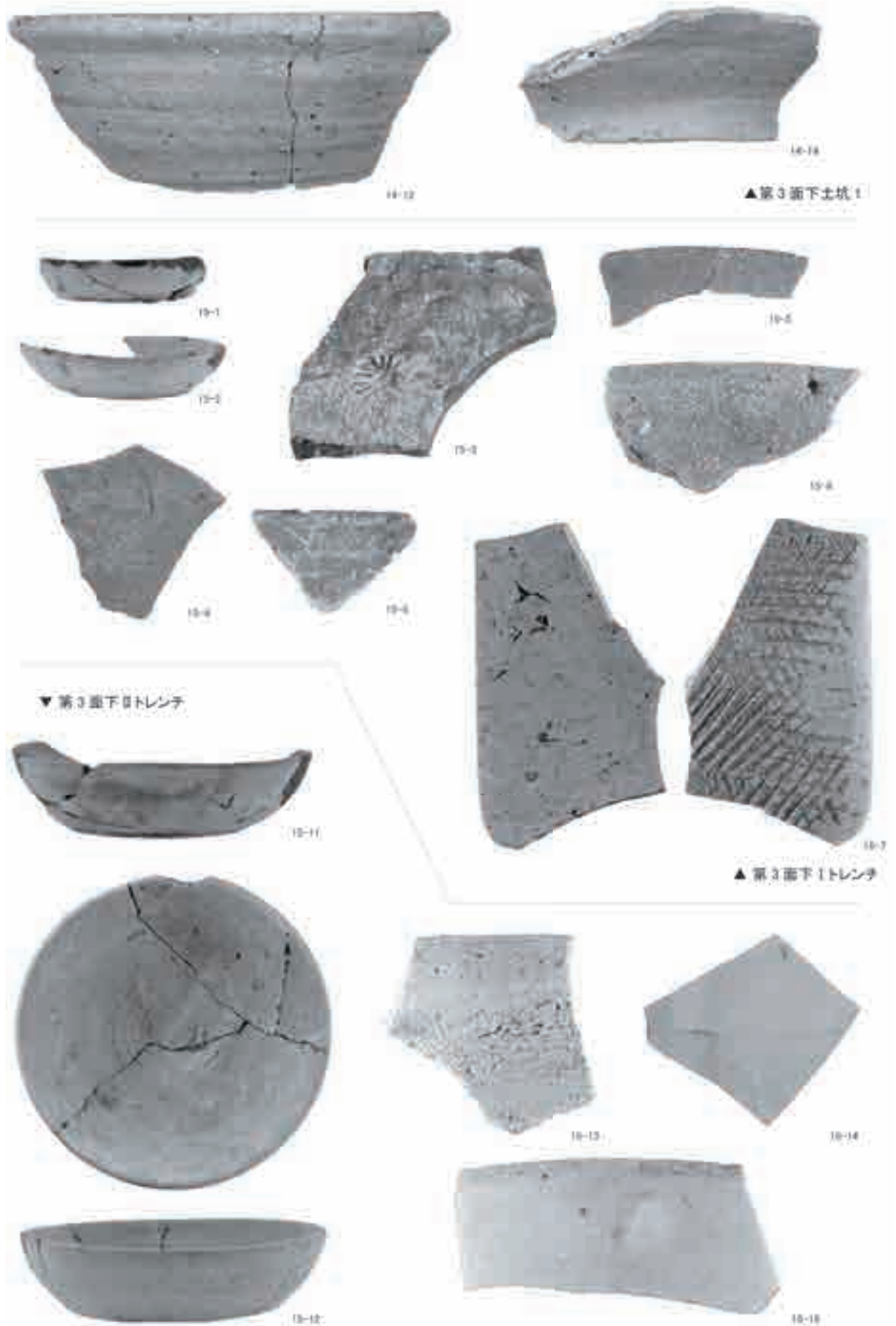
第1面各遺構 第2面各遺構・遺構外出土遺物



第3面各遺構出土遺物



第3面遺構外・第3面下遺構出土遺物



第3面下各遺構出土遺物

名越山王堂跡 (No.234)

大町三丁目 1362 番 1 地点

例 言

1. 本報は「名越山王堂跡 (No.234)」内の一部、大町三丁目1362番1地点 (略称NGD0513) における個人専用住宅の建築 (地盤の柱状改良) にともなう埋蔵文化財発掘調査報告である。
2. 調査期間：平成17(2004)年8月23日～同年10月20日 調査面積：27.5㎡
3. 現地調査・整理作業の体制は以下の通りである。
調査担当者：原 廣志
調査員：岩崎卓治・太田美智子・小野夏菜・梶岡溪音・中川建二・平山千絵・銘苺春也・森谷十美・山口正紀・渡辺美佐子
作業員：奥山利平・鯉沼 稔・宝珠山秀雄・天野隆男 (社) 鎌倉市シルバー人材センター
協力機関名：(社) 鎌倉市シルバー人材センター・鎌倉考古学研究所
4. 整理作業及び本報の作成は以下の分担で行った。
遺物 実測：岩崎・小野・梶岡・森谷・渡辺・原
挿図 作成：小野・平山・原
遺物観察表：平山
遺構 写真：山口・原
遺物 写真：平山
原稿 執筆：原
6. 出土遺物、図面・写真などの発掘調査資料は、報告書刊行後に鎌倉市教育委員会が保管している。
7. 本報の凡例は、以下の通りである。
挿図 縮尺：全側図：1/80 遺構図：1/40 1/50 遺物図：1/3
使用 名称：本書で使用する用語のうち、「土丹 (どたん)」は逗子シルト岩の砂泥岩、「鎌倉石」は逗子市池子層に顕著な粗粒凝灰岩、「伊豆石」は相模川以西の河川・海浜に産する安山岩で礎石に利用可能な扁平な円礫を指し、表記を簡略化した。
遺 構 図：遺構の標高は海拔高の数値を示している。
遺 物 図：黒塗りは灯明皿に付着した油煙煤を表現している。
8. 本遺跡の現地調査から本報作成に至るまで、以下の方々からご助言とご協力を賜った。記して感謝の意を表したい (敬称略、五十音順)。
秋山哲夫・伊丹まどか・沖元 道・押木弘己・小野正敏・河野眞知郎・菊川 泉・菊川英政・熊谷満・後藤 健・古田戸俊一・五味文彦・佐藤仁彦・汐見一夫・宗臺秀明・宗臺富貴子・鈴木庸一郎・玉林美男・塚本和宏・中田 英・中野晴久・松尾宣方・松葉 崇・馬淵和雄・森 孝子

目次

本文目次

第一章 遺跡の位置と歴史的環境	159
1. 遺跡の位置と立地	
2. 遺跡の歴史的環境	
第二章 調査の概要	164
1. 調査の経過	
2. 側量軸の設定	
3. 層序	
第三章 検出遺構と出土遺物	168
1. 第1面の遺構と遺物	
2. 第2面の遺構と遺物	
3. 第3面の遺構と遺物	
4. 第4面の遺構と遺物	
5. 第5面の遺構と遺物	
6. 第6面の遺構と遺物	
7. 第7面の遺構と遺物	
8. 第7面下トレンチ	
第四章 まとめ	204

挿図目次

図1 調査地点の位置と周辺遺跡	160	図15 第4面遺構・遺構外出土遺物	180
図2 国土座標とグリット設定図	165	図16 第4面遺構外出土遺物	181
図3 調査区東壁・西壁土層断面	166	図17 第5面全測図	182
図4 第1面全測図	168	図18 第5面建物・土坑・ピット	183
図5 第1面土坑・ピット	169	図19 第5面遺構・遺構外出土遺物	184
図6 第1面遺構・遺構外出土遺物	170	図20 第6面全測図	185
図7 第2面全測図	172	図21 第6面土坑・ピット	186
図8 第2面土坑・ピット	173	図22 第6面遺構・遺構外出土遺物	187
図9 第2面遺構・遺構外出土遺物	174	図23 第7面全測図	188
図10 第3面全測図	175	図24 第7面土坑・ピット	189
図11 第3面建物・土坑	176	図25 第7面土坑・曲物出土遺物	190
図12 第3面の遺構・遺構外出土遺物	177	図26 第8面曲物出土さし銭	191
図13 第4面全測図	178	図27 第7面ピット・遺構外出土遺物	192
図14 第4面土坑・井戸・ピット	179	図28 第7面下トレンチ	194

表 目 次

表 1 周辺遺跡の調査地点一覧表 ……………	162	表 8 遺物観察表 (6) ……………	200
表 2 埋設曲物出土銭の名称・年代別個数表 …	192	表 9 遺物観察表 (7) ……………	201
表 3 遺物観察表 (1) ……………	195	表 10 遺物観察表 (8) ……………	202
表 4 遺物観察表 (2) ……………	196	表 11 遺物観察表 (9) ……………	203
表 5 遺物観察表 (3) ……………	197	表 12 層位別遺物の出土数量表 ……………	205
表 6 遺物観察表 (4) ……………	198	表 13 種類別遺物の出土比率表 ……………	205
表 7 遺物観察表 (5) ……………	199		

図 版 目 次

図版 1 ……………	207	図版 7 ……………	213
a. 山王堂跡の谷を望む (南から)		a. 土坑 1	
b. 第 1 面全景 (南から)		b. P2 柱跡	
c. 第 1 面全景 (西から)		c. P2 土層断面	
図版 2 ……………	208	d. 常滑甕出土状況	
a. 第 2 面全景 (南から)		e. 曲物	
b. P11 かわらけ出土状況		f. 曲物内出土のさし銭	
c. 第 3 面全景 (南から)		図版 8 ……………	214
図版 3 ……………	209	a. 調査区南壁土層断面	
a. 第 3 面全景 (西から)		b. 調査区北壁土層断面	
b. 面上遺物出土状況		c. 調査区北壁西端土層断面	
c. 第 3 面全景 (西から)		d. 井戸 1	
d. 第 3 面建物 1 (東から)		e. 井戸 1 木柢検出状況	
図版 4 ……………	210	図版 9 ……………	215
a. 第 4 面全景 (南から)		第 1 面各遺構・遺構外	
b. 第 4 面全景 (西から)		図版 10 ……………	216
c. 滑石製スタンプ出土状況		第 2・3 面各遺構・遺構外	
d. 井戸 1 (西から)		図版 11 ……………	217
e. 井戸 1 木柢		第 4 面各遺構・遺構外	
図版 5 ……………	211	図版 12 ……………	218
a. 第 5 面全景 (北から)		第 5 面各遺構・遺構外	
b. 建物 1 (北から)		図版 13 ……………	219
c. 第 5 面全景 (東から)		第 6 面遺構外・第 7 面各遺構	
d. 建物 1 Pハ		図版 14 ……………	220
e. 面上馬歯出土状況		第 7 面遺構外	
図版 6 ……………	212		
a. 第 6 面全景 (西から)			
b. 第 6 面貝砂敷			
c. 第 7 面全景 (西から)			

第一章 遺跡の位置と歴史的環境

1. 遺跡の位置と立地

本遺跡は、鎌倉市内中心部の南東側にあたる名越ヶ谷と称される谷戸の一支谷に位置し、今回の調査地点はJ R横須賀線鎌倉駅の東方約1.0km付近の鎌倉市大町三丁目1362番1に所在する(第1図)。

鎌倉市南東部は、太平山から天台山に連なる丘陵で東隣の逗子市と画され、その南辺の衣張山から西南に派生する丘陵は、市内北東部の十二所・朝比奈峠に源を発し、西に流下する滑川が南へと流路を変えて市街地の低地に至っている。丘陵基盤は第三紀後期中新生～前期鮮新世にかけての堆積層で、三浦層群に属する逗子シルト岩層と呼ばれる。これらの丘陵に囲まれた名越ヶ谷は、谷戸の規模が東西の奥行約1.0kmを測り、北側に膨らんで弓なりに屈曲しながら北西方に開口している。谷戸の開口部幅は200m程であるが谷奥へ行くにつれて開析が進み、大小の小谷戸を内包した樹枝状の入り組んだ地形を展開している。

県道鎌倉・葉山線(旧国道134号線)の名越四ツ角から東北方向へ進むと二股に分かれた谷戸が展開しており、谷戸内の低地を北及び東最奥に源を発する逆川が西方し、大町四ツ角から南へと流下して上河原橋付近で滑川に合流する。逆川が谷戸内で一時的に南方へ流をかえるあたりの北側、南に開口した支谷は山王ヶ谷と呼ばれ、西側の祇園山丘陵の尾根先から最奥まで概ね200m程の谷戸である。山王ヶ谷を取り巻く尾根の標高は25～65m前後、谷戸内の平地海拔高は10～20mを測り、今回調査対象となった地点は海拔14.70m前後に立地している。

2. 遺跡の歴史的環境

本遺跡の名称に係わる「名越」という地名は、現在のところ国史跡の名越切通や名越ヶ谷などの字名に限られた範囲でしか残されていないが、この地名は中世まで遡り鎌倉の境をなして大町から光明寺がある材木座地区にまたがった中世鎌倉の重要な場所の一つである。この名越一帯には北条氏一門の名越氏や三善氏等の有力御家人の居館、現在は廃寺となるが山王堂・慈恩寺・長善寺・新善光寺・崇寿寺等の有力寺院が知られている。一方、町名である「大町」も鎌倉時代まで遡り、『吾妻鏡』建長三年(1251)、小町屋や売買の施設を「大町・小町・米町(穀町)・亀ヶ谷辻・和賀江・大倉辻・気と飛坂(化粧坂)山上」の七ヶ所に商業活動を限定し、それ以外での活動を禁止しているが、その筆頭に大町が挙げられている。大町・小町は、それぞれ大町大路・小町大路沿い付近と推定される。商業地域の場所が「町」「辻」「江」「坂山上」等であるが、「辻」は道が十字に交差した四ツ角を意味し、本来的には無主・無縁の自由な場であるという興味深い意見がある。鶴岡八幡宮北東の宝戒寺門前から和賀江津へと南北に走る小町大路、下馬四ツ角から名越方面へ東西に走る大町大路が交差する現在の町四ツ角が位置し、さらにその南側に大町大路と並行する車大路とが松葉ヶ谷入口あたりで合流し、名越切通(名越坂口)へと向かっていたと思われる。

鎌倉における奈良時代以来の古東海道の経路は、二説に大別される。ひとつは極楽寺坂近辺を抜けて稲瀬川河口付近から鎌倉に入って海岸に近い砂丘地帯を通り、六地藏交差点を北東へ進み下馬四ツ角の交差点で若宮大路を横切り直進して名越から山道を超えて沼浜(逗子市沼間)に至る道である(馬淵1994)。もうひとつが『鎌倉市史 総説編』の述べる説で、六地藏交差点から東は県道鎌倉・葉山線より南、

▽調査地点の位置



▽調査地点の周辺遺跡

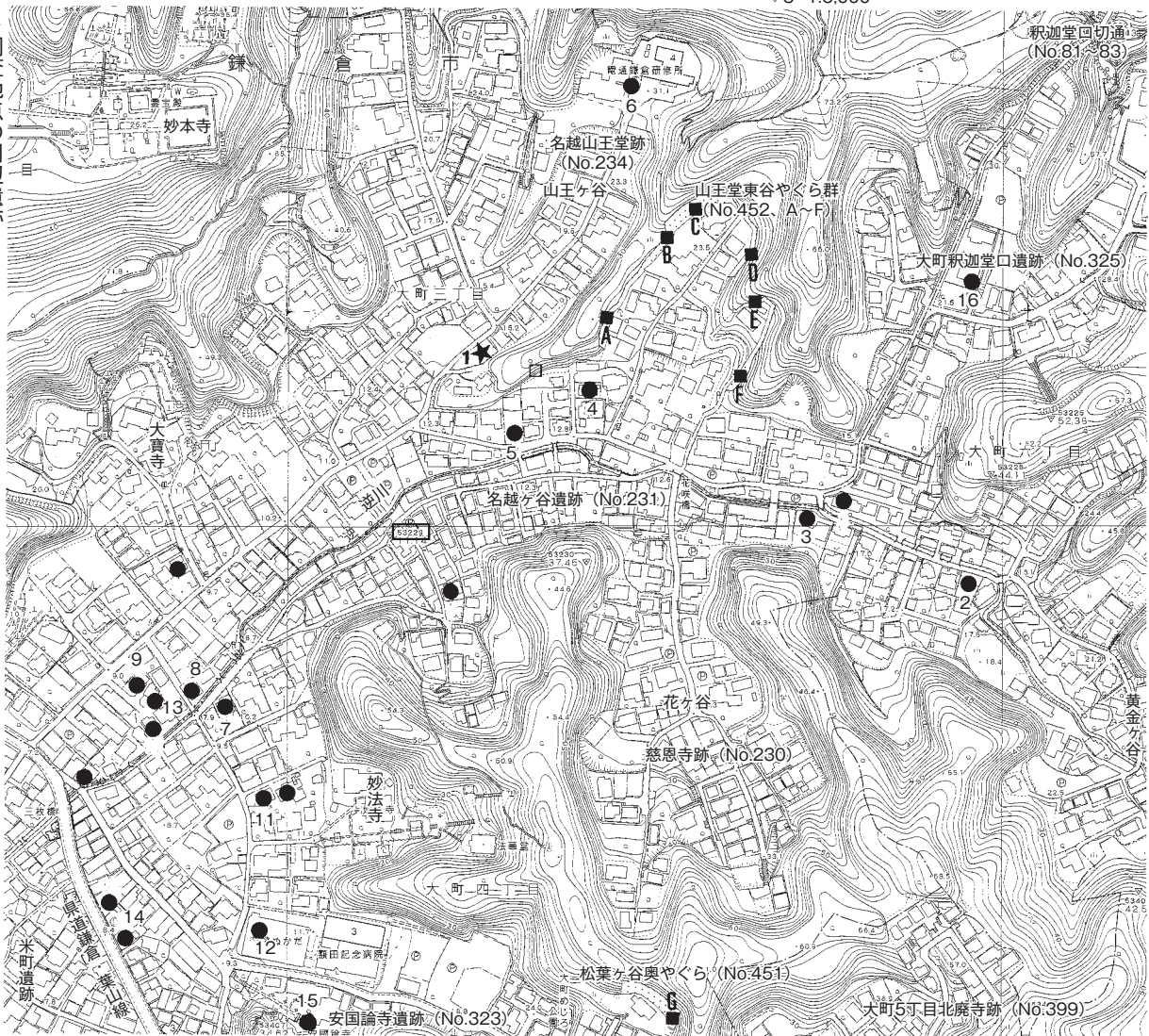


図1 調査地点の位置と周辺遺跡

現在の鎌倉女学院北縁を通り、由比若宮の元八幡・辻薬師堂付近を東進した先で県道に合流する古道が推測されている。いずれにせよ相模国府から鎌倉郡から三浦郡を抜けて房総を經由で常陸国府へと往還した重要な幹線であったことはまちがいない。なお、鎌倉を東海道が通過していたのは大化元年(645)に始まり宝亀二年(771)までの五畿七道制の改編に伴う時期までであった。

本遺跡が所在する大町三丁目周辺には名越ヶ谷・山王ヶ谷・六坊ヶ谷・花ヶ谷・松葉ヶ谷・赤門などの字名が知られている。名越大谷及び谷戸開口部付近には、別願寺、安養院、大寶寺、妙法寺、安国論寺が法灯を伝えており、現在は廃寺となるが山王堂、善導寺、慈恩寺、木束寺などの寺院があったという。

本遺跡の山王堂について『吾妻鏡』の記事をみると、建長四年(1252)二月三十八日、大火で東は名越山王堂前まで延焼した。建長六年(1254)正月十日、早朝浜の風早町辺が焼け、名越山王堂に至る。人家数百宇災し、焼死者数十人とある。また弘長三年(1263)三月十八日、名越辺焼亡。山王堂在其中。失火云々とあり。さらに『相模風土記稿』(以後『風土記稿』と省略する)にも「是も名越谷の内にて往昔此所に山王社今廃セリ…」と山王ヶ谷の名をあげている。

大寶寺は多福山一乗院大寶寺と号し、俗に名越佐竹屋敷跡と伝える場所に建つ日蓮宗の寺院である。『風土記稿』によれば、佐竹義盛が応永六年(1399)に多福寺を建立したが早く廃寺となり、文安元年(1444)に日蓮宗の僧日出がその地にまた寺を建て、前の寺号を山号としたという。境内には佐竹氏の租、新羅三郎義光の霊廟の多福明神社と、その墓と伝える変形の宝篋印塔もある。

花ヶ谷には慈恩寺・木束寺の旧跡地があった。慈恩寺(No.230)は臨濟禅で山号が白華、足利直冬の菩提寺、開山は桂堂士聞というが、すでに元亨三年(1323)の史料にその名がみえるので、開創は鎌倉時代まで遡るようである。『成氏年中行事』によると、毎年正月十六日に真言・律・天台の住僧と共に当寺も御所へ参上している。15世紀の終わり頃には廃絶していたらしい。木束寺(目足寺または無垢息寺とも書く)も慈恩寺同様に臨濟禅の寺院である。文安三年(1446)に円覚寺正統院領内の昭西堂の跡地へ移造した記録はある。『風土記稿』などの史料に断片的な記載があるだけで沿革や廃年など不詳である。

安養院は祇園山長楽寺安養院と号した浄土宗寺院である。寺伝では、嘉禄元年(1215)笹目に建立した律宗寺院の長楽寺が前進で開山は願行房憲静、開基は北条政子と伝える。鎌倉時代末期に現在地の浄土宗善導寺跡に移って安養院と号したという(旧境内は善導寺跡・No.280と遺跡指定)。史料を見ると、『金沢文庫文書』10の118頁に「於相州鎌倉名越郷善導寺書写之了 執筆源(カ)音生廿二歳也」(正応三・1290年)とあり、同十一の61頁には「鎌倉名越善導寺ニメ書之処也」(弘安十・1287年)と記されている。延宝八年(1680)の火災により全焼した。本堂背後には重要文化財の徳治三年(1308)七月の銘を刻んだ安山岩製の大宝篋印塔(相輪除く総高247.3cm)がある。破損部は多いが鎌倉で現存する関東型式の宝篋印塔中で最古の作例である。西隣りには時宗の稻荷山超世院別願寺がある。開山は覚阿公忍、弘安五年(1282)に公忍が真言宗能成寺を時宗に改め、別願寺と改称したという。鎌倉時宗寺院の第一で鎌倉御所の菩提所のひとつに挙げられる。境内には鎌倉時代末期まで遡る安山岩製の大宝塔(相輪除く総高243.2cm)がある。

松葉ヶ谷に所在した安国論寺、妙法寺はともに日蓮上人が安房から鎌倉入りし初めて小さな庵室を結んだという伝承地になっている。安国論寺は妙法山と号し、妙法寺と同じく寺地は松葉ヶ谷法難の跡と伝える(安国論寺遺跡・No.323)。本堂の他、御小庵・庫裡・山門・熊王稻荷大明神尊殿などの伽藍を配置している。また日蓮が籠って『立正安国論』を執筆したという岩窟(安国論寺やぐら・No.228)が残されている。一方、妙法寺は楞巖山と号し、日蓮を開山、中興開山を日叡と。『風土記稿』によれば、小庵跡に建てられていた大光山本国寺の旧地に、護良親王遺子の日叡が正平十二<延文二>年(1357)

に伽藍を再興した。山号は日叡の幼名の楞嚴丸から、寺名は房号の妙法房からとり称するようになったという。

このように名越・大町は中世都市鎌倉において大町大路が走る幹線路の一つであり、名越大谷はその中であって、三浦や六浦を経て房総方面への交通の要衝として、また有力御家人居館や寺社が所在した地域であった。さらに日蓮上人が布教拠点としての場、すなわち都市民が集中する町屋の様相も兼ね備えていたのではないだろうか。今後さらなる研究が望まれるところである。

なお、遺跡周辺の発掘調査事例や旧跡については、「表1 周辺遺跡の調査地点一覧表」を参照されたい。

表1 周辺遺跡の調査地点一覧表

遺跡所在地	調査報告書名・遺跡名・遺跡台帳番号など
1 大町三丁目1362番1	本調査地点
2 大町六丁目1708番4	汐見2004「名越ヶ谷遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書20(第2分冊)』
3 大町四丁目1736番2外	宗臺1998「名越ヶ谷遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14(第1分冊)』
4 大町三丁目1367番4	玉林1986「名越ヶ谷遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書2』
5 大町三丁目1364番1外	森2004『名越ヶ谷遺跡』〈有〉博通
6 大町三丁目1340番外	齋木ほか1990『名越・山王堂跡発掘調査報告書』同遺跡発掘調査団
7 大町四丁目1880番6外	田代ほか1996「名越ヶ谷遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11(第1分冊)』
8 大町三丁目1826番9	手塚ほか2002「名越ヶ谷遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18(第2分冊)』
9 大町三丁目2356番3	滝澤ほか2001『名越ヶ谷遺跡発掘調査報告書』同遺跡発掘調査団
10 大町三丁目2356番10	福田2003「名越ヶ谷遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書19』
11 大町四丁目1888番	汐見ほか2000「名越ヶ谷遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書16(第2分冊)』
12 大町四丁目1901番16外	滝澤ほか2003『名越ヶ谷遺跡発掘調査報告書(医療法人財団額田記念会老健ぬかだ建設に伴う発掘調査報告同遺跡発掘調査団)』
13 大町四丁目2356番11	宮田2003「名越ヶ谷遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書19』
14 大町四丁目2395番2	滝澤2006「名越ヶ谷遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書22』
15 大町四丁目1947番	松尾1992『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報I(昭和46～52年度)』
16 大町六丁目1442番4外	永田ほか2009『大町釈迦堂口遺跡発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会
A 大町三丁目1375番3	鈴木2000『鎌倉城(大町三丁目)所在やぐら(No.87)』かながわ考古学財団調査報告書89
B 大町三丁目1376番5外	池田ほか2002『山王堂東谷やぐら群』かながわ考古学財団調査報告書1
C 大町三丁目1377番1	鈴木ほか2002『山王堂東谷やぐら群II』かながわ考古学財団調査報告書140
D 大町三丁目1378番、1381番3	鈴木2005『山王堂東谷やぐら群III』かながわ考古学財団調査報告書182
E 大町三丁目1388番乙号	井関ほか2005『山王堂東谷やぐら群IV』かながわ考古学財団調査報告書184
F 大町三丁目1389番	鈴木ほか2005『山王堂東谷やぐら群V』かながわ考古学財団調査報告書186
G 大町四丁目1932番3	鈴木ほか2002『松葉ヶ谷奥やぐら』かながわ考古学財団調査報告書139

【引用・参考文献】

- 秋山哲雄 2006『北条氏権力と都市鎌倉』吉川弘文館
- 池田 治・井辺一徳・宍戸 信 2001『山王堂東谷やぐら群』かながわ考古学財団調査報告117(財)かながわ考古学財団
- 井関文明・鈴木庸一郎 2005『山王堂東谷やぐら群IV』かながわ考古学財団調査報告184(財)かながわ考古学財団
- 臼井永二編 1986『鎌倉事典』東京堂出版
- 上本進二 2000「鎌倉・逗子の地形発達史と遺跡形成」『池子栈敷戸遺跡(逗子市No.100)』東国歴史考古学研究所
- 鎌倉市教育委員会編 1990「としよりのはなし」『鎌倉市文化財資料』第7集
- 鎌倉国宝館 1995「鎌倉の古絵図III」『鎌倉国宝館図録』第十五集 鎌倉市教育委員会
- 鎌倉国宝館 2002「鎌倉の宝篋印塔」『鎌倉国宝館図録』第二十二集 鎌倉市教育委員会
- 鎌倉国宝館 2003「鎌倉の石仏・宝塔」『鎌倉国宝館図録』第二十三集 鎌倉市教育委員会
- 鎌倉文化研究会編 1972「鎌倉－史蹟めぐり会記録－」
- 菊川英政 1996「名越ヶ谷遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』11(第1分冊) 鎌倉市教育委員会

- 木下 良・木本雅康・中村太一・新井秀規・笹倉義邦 1997『神奈川の古代道』博物館建設準備調査報告書 第3集
藤沢市教育委員会
- 齋木秀雄 1990『名越・山王堂跡発掘調査報告書』山王堂跡遺跡発掘調査団
- 汐見一夫・野本賢二ほか 2000「名越ヶ谷遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』16（第2分冊）鎌倉市教育委員会
- 汐見一夫 2004「名越ヶ谷遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』20（第2分冊）鎌倉市教育委員会
- 宗臺富貴子・宗臺秀明 1998「名越ヶ谷遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』14（第1分冊）鎌倉市教育委員会
- 鈴木次郎・汐見一夫・井関文明 2005『山王堂東谷やぐら 群Ⅴ』かながわ考古学財団調査報告書 186（財）かながわ
考古学財団
- 鈴木庸一郎・木村吉行 2000『鎌倉城（大町三丁目）所在やぐら』かながわ考古学財団調査報告書 89（財）かながわ考
古学財団
- 鈴木庸一郎 2001「第7編 第2章」『<古都鎌倉>を取り巻く山稜部の調査』神奈川県教育委員会・鎌倉市教育委員会・
（財）かながわ考古学財団
- 鈴木庸一郎・宮坂淳一 2002『松葉ヶ谷奥やぐら』かながわ考古学財団調査報告書 139（財）かながわ考古学財団
- 永田史子・古田戸俊一・福田 誠・小林康幸 2009『大町釈迦堂口遺跡発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会
- 鈴木庸一郎・宮坂淳一・村上吉正 2002『山王堂東谷やぐら 群Ⅱ』かながわ考古学財団調査報告書 140（財）かなが
わ考古学財団
- 鈴木庸一郎 2005『山王堂東谷やぐら 群Ⅲ』かながわ考古学財団調査報告書 182（財）かながわ考古学財団
- 鈴木庸一郎 2005『山王堂東谷やぐら 群Ⅴ』かながわ考古学財団調査報告書 186（財）かながわ考古学財団
- 高柳光寿 1959『鎌倉市史 総説編』鎌倉市史編纂委員会編 吉川弘文館
- 滝澤晶子・諸星真澄・宮田 眞 2001『名越ヶ谷遺跡発掘調査報告書』名越ヶ谷遺跡発掘調査団
- 滝澤晶子・宮田 眞 2003『名越ヶ谷遺跡発掘調査報告書（医療財団額田記念会老健ぬかだ建設に伴う発掘調査）』
名越ヶ谷遺跡発掘調査団
- 滝澤晶子 2006「名越ヶ谷遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』22（第1分冊）鎌倉市教育委員会
- 田代郁夫 1996「名越ヶ谷遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』11（第1分冊）鎌倉市教育委員会
- 玉林美男 1986「名越ヶ谷遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』2 鎌倉市教育委員会
- 手塚直樹 2002「名越ヶ谷遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』18（第2分冊）鎌倉市教育委員会
- 永田史子・古田戸俊一・福田 誠・小林康幸 2009『大町釈迦堂口遺跡発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会
- 貫 達人・川副武胤 1979『鎌倉市史 社寺編』鎌倉市史編纂委員会編 吉川弘文館
- 貫 達人・川副武胤 1980『鎌倉廃寺事典』有隣堂
- 松尾宣方 1992「安国論寺境内」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報』Ⅰ（昭和46～52年度）鎌倉市教育委員会
- 松葉 崇・鈴木絵美 2010『松葉ヶ谷奥やぐら』かながわ考古学財団調査報告書 253（財）かながわ考古学財団
- 馬淵和雄 1992「中世鎌倉における谷戸開発のある側面」『鎌倉』第六十九号 鎌倉文化研究会
- 馬淵和雄 2008「米町遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』24 鎌倉市教育委員会
- 三浦勝男 1986「鎌倉の地名考（八）-花ヶ谷について-」『鎌倉』52号 鎌倉文化研究会
- 森 孝子 2004『名越ヶ谷遺跡』『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』20（第1分冊）鎌倉市教育委員会
- 森 孝子 2004『名越ヶ谷遺跡』名越ヶ谷発掘調査団

第二章 調査の概要

1. 調査の経過

本調査地点は市内中心部の南東側、県道鎌倉葉山線の名越四ツ角の交差点を北東へ85 m程入った山王ヶ谷と呼ばれる谷戸開口部に近い東側山裾にあたる鎌倉市大町三丁目1362番1に所在している。今回の発掘調査は、基礎工事に際して地盤の柱状改良工事を実施する個人専用住宅建設の計画があったため、工事の実施により掘削深度の関係から埋蔵文化財に影響を及ぼす恐れのある事が予想された。このために鎌倉市教育委員会による遺構確認の試掘調査が行われた。その結果、現地下70cm前後まで近・現代の客土や畑耕作土が確認され、それ直下は薄い中世遺物包含層を挟んで鎌倉時代の少なくとも7時期の遺構面（生活面）と、それに伴う遺物が出土して具体的な埋蔵文化財の存在することが判明した。これにより当該建築工事の実施による埋蔵文化財への影響が避けられないと判断された。このため事業者との協議を行ったところ、当初の計画に基づき建築工事を実施したいとの意向が示された。そこで文化財保護法に基づく届け出手続きを行い、施工者と調査方法・工程の協議を重ねた結果、平成17年8月20日過ぎから約2ヶ月の予定で発掘調査を実施する運びとなった。

現地調査は8月23日に機材搬入し、試掘データに基づいて遺構面を傷つけないように地表60cm程までを重機で除去した後、それ以下を人力により掘り下げての遺構の確認・検出をおこなった。調査面積は27.50㎡が対象である。調査の結果、建物跡、土坑、井戸、溝、ピットなどにより構成された遺構群が検出された。出土遺物は多量のかわらけを始め、陶磁器類、金属・骨角製品など13世紀後半～14世紀前半頃の所産である。平成17年10月20日までの間に必要な記録作業を行い、同日に機材撤収して現地調査を終了した。調査の経過については、以下に主な作業内容を日誌抜粋で記しておく。

日誌抄

- 8月23日(火) 調査区設定して地表下60cmまで重機により表土掘削を実施。機材搬入とテント設営。
- 29日(月) 第1面の検出、遺構確認作業を開始。鎌倉市4級基準点を基に測量軸方眼の設定。
- 30日(火) 測量用の海拔高を鎌倉市が設置した三級水準点から原点レベルを敷地内に移動。
- 9月9日(金) 第1面の調査終了。全景及び個別遺構の写真撮影及び平面図の作成。第2面検出に向け荒掘り作業と面検出を開始。
- 14日(水) 第2面調査終了。全景写真の撮影、平面図の作成。
- 16日(金) 大小土丹塊を敷き詰めた第3面と建物遺構の落ち込みを検出。
- 21日(水) 第3面の全景写真、建物跡の土層断面・平面図の作成。
- 26日(月) 台風被害で調査区壁の一部崩落、土留作業を実施。掘下げ中に井戸枠を確認。
- 29日(木) 第4面の全景、井戸3・土坑1の写真撮影、平面・土層断面図の作成。
- 10月4日(火) 第5面の調査終了し、平面図作成。全景・建物跡・土坑の写真撮影。
- 7日(水) 第6面の調査終了。全景及び個別遺構などの写真撮影。平面図作成。
- 13日(木) 第7面遺構の検出終了。全景写真、調査区各壁面、曲げ物などを撮影。平面図及び調査区壁面土層断面図の作成開始。
- 20日(水) 機材撤収し、現地調査終了。

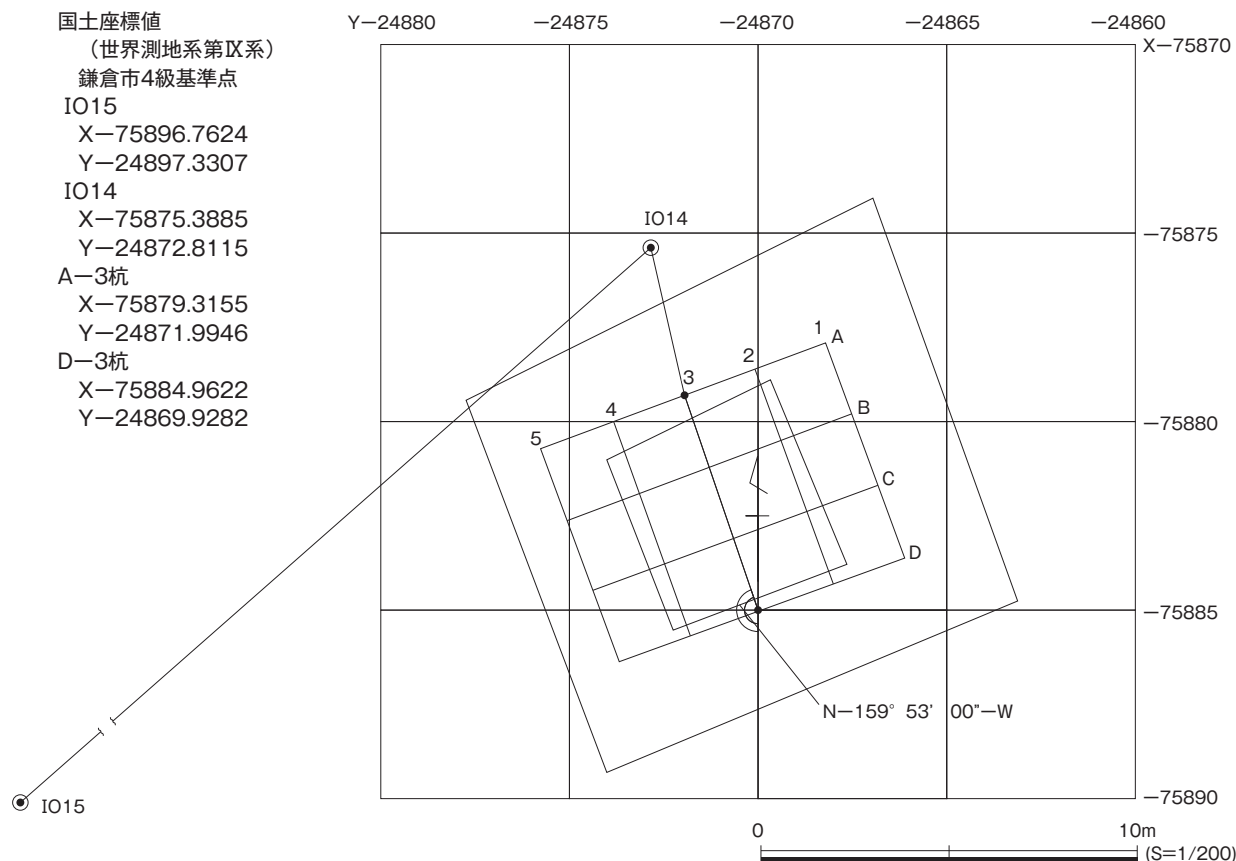


図2 国土座標とグリッド設定図

2. 側量軸の設定

調査にあたって使用した測量方眼軸の設定には、図2で示したのように調査地北辺沿いを山王ヶ谷奥に走る道路面上に鎌倉市道路管理課が設置したI 014・I 015の市4級基準点（日本測地系第IV座標系）を基準としている。この4級基準2点の関係から開放トラバース側量によって算出した側量基準点のA-3杭と、D-3杭をそれぞれ設置した。さらに側量軸は東西軸と南北軸を2m方眼による軸線を配し、南北軸はA～Dのアルファベットの名称、東西軸に1～5の算用数字をそれぞれ付して設定を行った。現地調査で使用した国土座標は、日本測地系（座標AREA9）の国土座標数値であったため、報告書の整理作業段階で、国土地理院が公開する座標変換ソフト『webTKY2JGD』によって世界測地系第IX系の座標数値に算出しなおした数値を明示している。

IO14 : [X - 75.161.159 Y - 25.087.503] A - 3杭 : [X - 75.107.060 Y - 25.077.276]

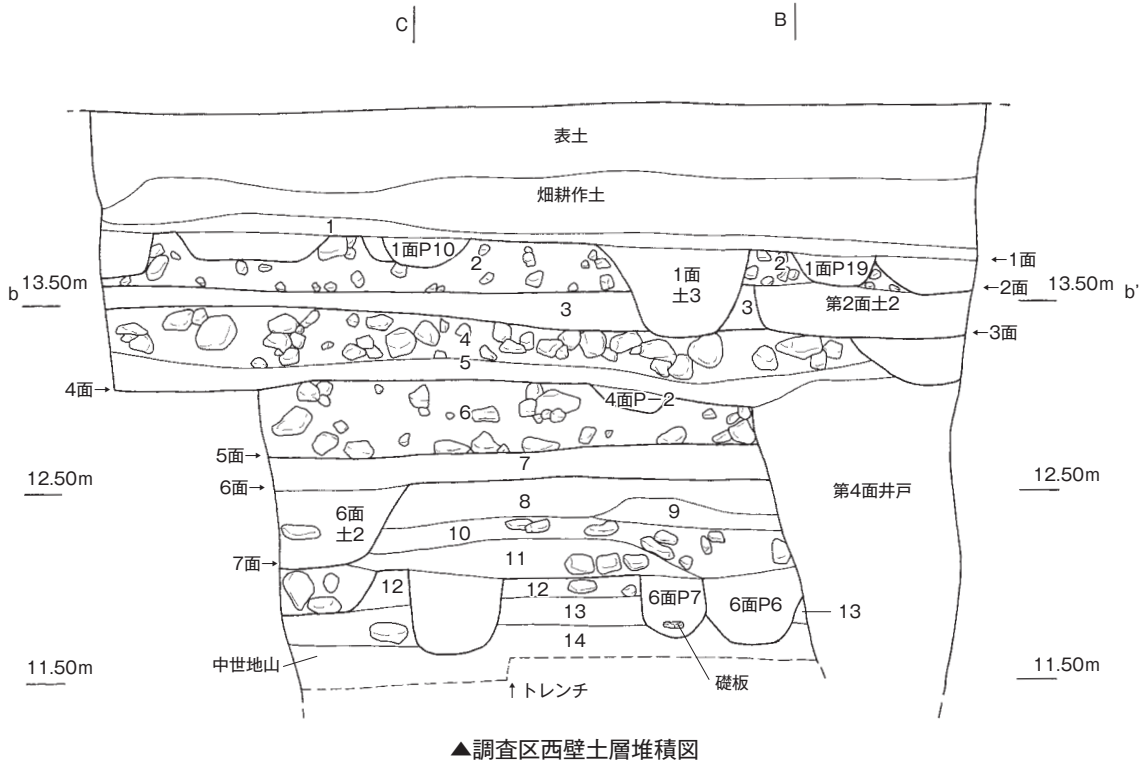
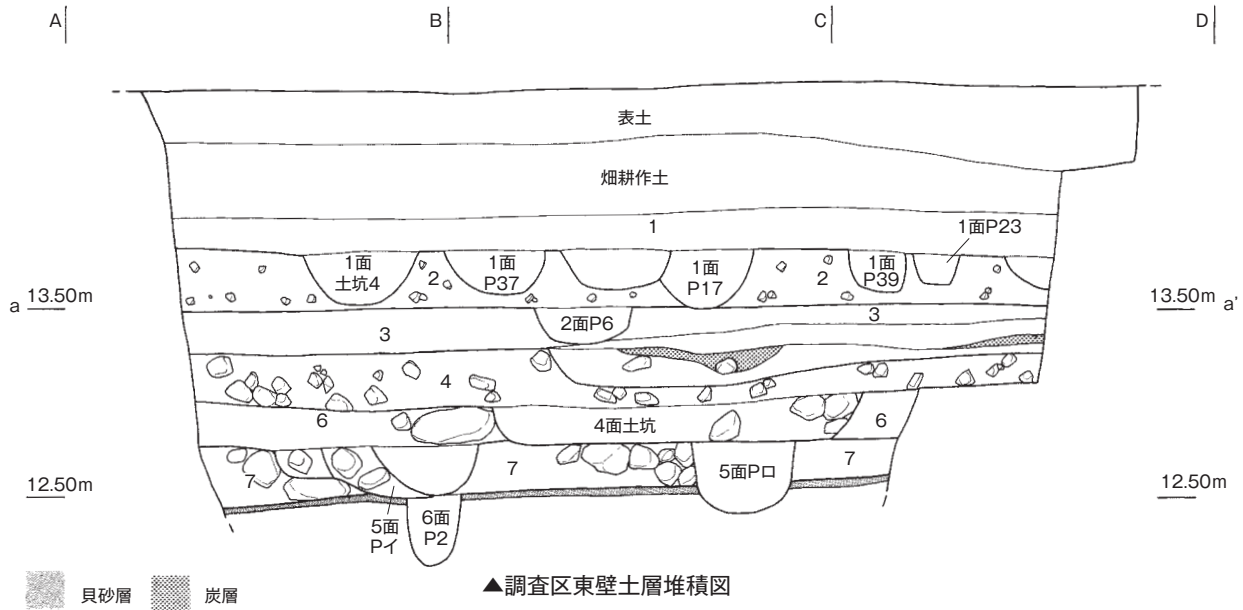
IO15 : [X - 75.198.020 Y - 25.045.906] D - 3杭 : [X - 75.107.060 Y - 25.077.276]

従って、調査地点は世界測地系第IV系のX - 75 870.000 ~ 75 890.000・Y - 24 860.000 ~ 24 8690.000の国土座標区画内に位置している。挿図中の方位は、すべて真北を採用した。測量方眼の南北軸線は遺構の方位を意識して調査区の南北軸にほぼ平行した主軸としたので真北より東に触れている。また調査地点の経緯度は以下のとおりである。

南北軸線 : [N - 20° 07' 00" - E]

調査地点 : [東経 139° 33' 35"] [北緯 35° 18' 56"]

海拔高の基準点は、調査地点から南方150m程のところ、逆川の東側沿いを黄金ヶ谷方面に向かう道路上に設置された鎌倉市3級水準点 (No.53229・L = 11. 168 m、1985年10月与点) を標高原点として調



土層注記

1. 明茶褐色弱粘質土：5cm大の土丹粒を多く含み、炭化物少量含む。締まり有り
2. 明茶褐色弱粘質土：拳大の土丹・土丹粒、鎌倉石を砕いたもの多く含み、かわらけ片少量含む。締まり有り 第1面構築土
3. 明茶褐色弱粘質土：土丹粒多く含み、炭化物、かわらけ片少量含む。締まりやや有り 第2面構築土
4. 茶褐色弱粘質土：拳～人頭大の土丹を多量に含む。炭化物、かわらけ片少量含む。 第3面構築土
5. 暗茶褐色粘質土：土丹粒多量に含み、炭化物、かわらけ片少量含む。締まりやや有り。
6. 黄褐色粘質土：拳大土丹多量に含み、かわらけ片少量含む。砂粒混じる。締まりなし 第4面構築土
7. 青灰色粘質土：拳大土丹・土丹粒多量に含み、炭化物中量含む。締まりなし 第5面構築土
8. 暗茶褐色粘質土：拳大土丹・土丹粒を多く含み、炭化物、かわらけ片、木片を少量含む。締まりやや有り。
9. 暗茶褐色粘質土：土丹粒、炭化物、小石を少量含む。締まりやや有り。
10. 暗茶灰色弱粘質土：拳大～人頭大の土丹粒を多く含み、かわらけ片、貝片を少量含む。締まりやや有り。
11. 暗茶灰色粘質土：10cm大の土丹を多く含み、土丹粒を中量、かわらけ片、木片を少量含む。締まり有り。
12. 黒褐色粘質土：拳大の土丹粒を多く含み、木片、貝片を中量含む。締まりやや有り。
13. 黒褐色粘質土：土丹粒を中量含む。締まりやや有り。
14. 黒褐色粘質土：土丹粒、自然木、貝砂を少量含む。非常に締まり有り。 中世地山

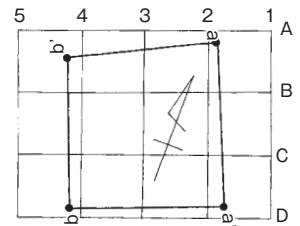


図3 調査区東壁・西壁土層断面

査地内のA-3杭上(L=14.747m)と、D-3杭上(L=14.753m)へ仮水準点を移設した。本報の文章中または挿図に記載されたレベル数値は、すべてこれを基準にした海拔標高を示している。

3. 層序

調査地点は山王ヶ谷開口部に位置し現地表の海拔高約14.70mを計り、ほぼ平坦な宅地を形成している。鎌倉市教育委員会が実施した試掘調査の結果を基に、現地表下約60cmまで堆積していた近・現代の客土や耕作土を重機で除去した後、中世遺構の確認を実施した。調査区各壁面の土層堆積は遺構覆土を除くと、表土・耕作土以下が1層の遺物包含層から中世地山上面(中世基盤層=黒褐色粘質土)まで概ね14層に区分され、少なくとも7時期以上の生活面が確認されている。調査区東壁・西壁土層堆積の状況は図3に示したとおりである。

表土や耕作土の堆積土を除去すると、中世遺物包含層で締まりのない明茶褐色弱粘質土の1層が観察された。この包含層を取り除くと、概ね5cm～拳大の土丹小塊や鎌倉石を破碎したものを多く混えた締まりのある茶褐色弱粘質土の地形層(2層)が顔を覗かせたので、これを第1面として調査を行った。第1面は海拔高13.70～13.85mを測り、遺構は土坑12基、柱穴様のピット55口などを検出した。第1面を構成する破碎土丹・鎌倉石など夾雑物の多い地形層は20～30cmの厚みがあり、これを掘り下げると、包含層を挟まずに表面が破碎土丹による地形面が現れたので第2面とした。この面は概ね数cm大の土丹角を多く混入した茶褐色粘質土による地形層で構成され、海拔高13.55m前後である。検出遺構は土坑6基、建物配置をみせない柱穴様のピット約25口などである。

薄い地形層の第2面構成土を除去すると、その下には調査区の北西側の一定範囲で拳大～人頭大の土丹塊を敷き詰めた面が現れ、南東域では一段落ち込み建物遺構が検出されたのでこれを第3面として遺構検出を行った。面の海拔高約13.30mである。さらに第4面は5層にあたる厚さ10～15cmで暗茶褐色粘質土の面上包含層を挟み、海拔高13.05m前後で確認された生活面である。検出した遺構は土坑5基、井戸1基、柱穴などである。上層面の第4面構成土(6層)は25～40cmの厚みがあり、その下に拳大土丹小塊を混じえた7層の青灰色粘質土が平面的な拡がりを見せ、遺構も確認されたので第5面として調査を実施した。この面の海拔高12.70m前後、遺構は掘立柱建物1軒、土坑3基、柱穴様のピット6口である。

第5面の構成層は平均して20cm程の厚みがあり、これを除去するとすぐにまた破碎土丹による版築面と貝砂を撒いた平坦な地形面が現れたので、第6面とした。検出遺構は土坑2基とピット3口に留り、面の海拔高12.55m前後である。第6面を構成する厚さ20cmほどの破碎土丹による地形層(8層)と9～10層の破碎土丹小塊、貝殻・木片など夾雑物の多い堆積層を除くと、海拔高12.10m前後において平坦な面が表出され、遺構も確認されたのでこれを第7面とした。検出した遺構は土坑2基、埋設曲物、柱穴・ピット10口などである。この時点で現地表下250cmに達していた。

そこで第7面以下の調査に関しては、壁崩落など危険を回避する掘削深度規制により、全体を中世基盤層まで掘り下げることができなかったが、調査区西壁際を深掘りして中世地山の黒褐色粘質土層(14層)を確認した。上面は概ね平坦で海拔高11.80mであった。

第三章 検出遺構と出土遺物

1. 第1面の遺構と遺物 (図4～6)

この面は概ね破碎した5cm角～拳大の土丹小塊や鎌倉石を混えた茶褐色弱粘質土の地形であり、海拔高13.70～13.85 m。遺構は土坑12基、柱穴様のピット55穴などを検出した。遺物は図6のかわらけ、青磁・白磁の貿易陶磁器、国産陶器は瀬戸・常滑窯製品、石・金属製品などが出土した。

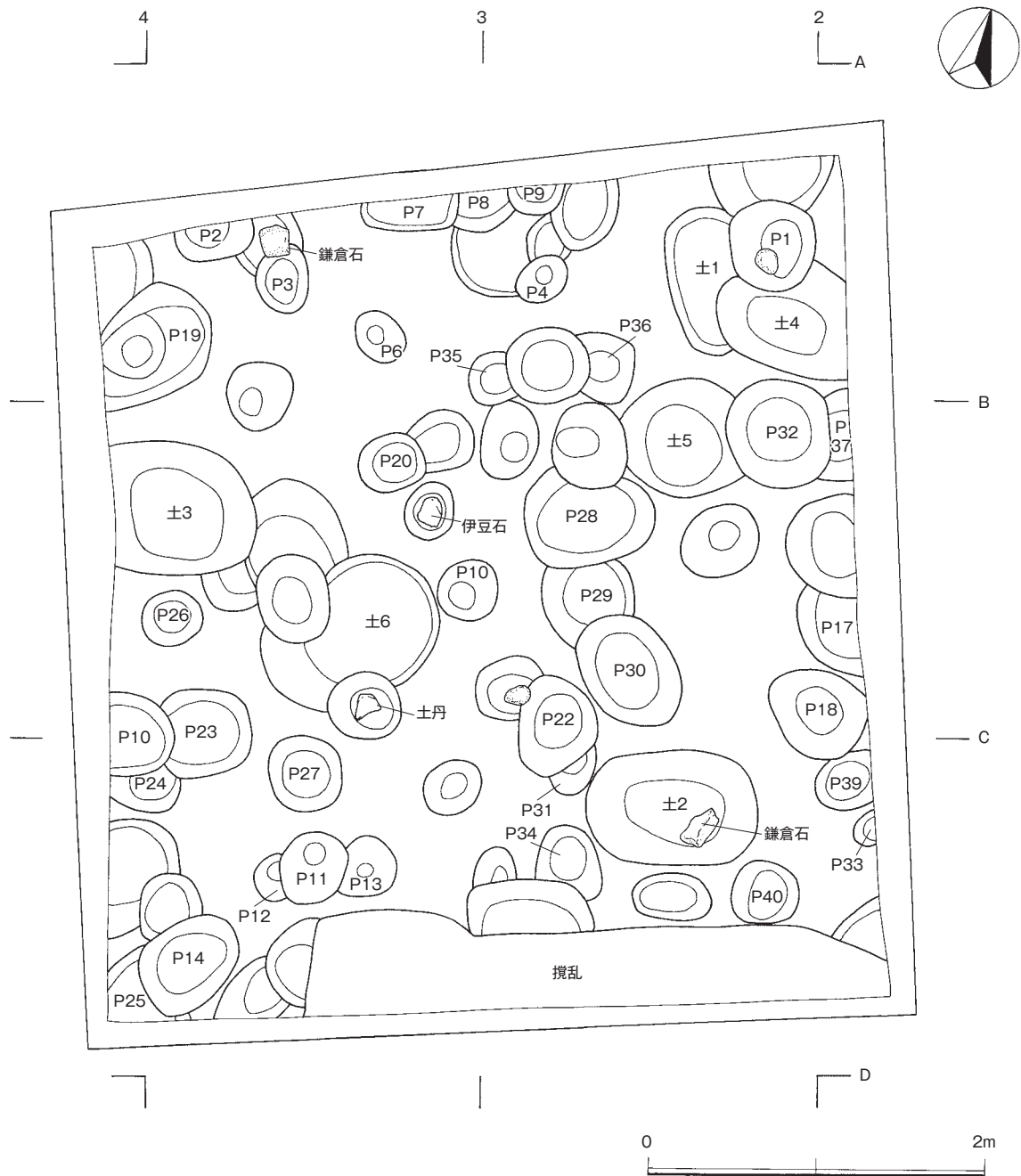


図4 第1面全測図

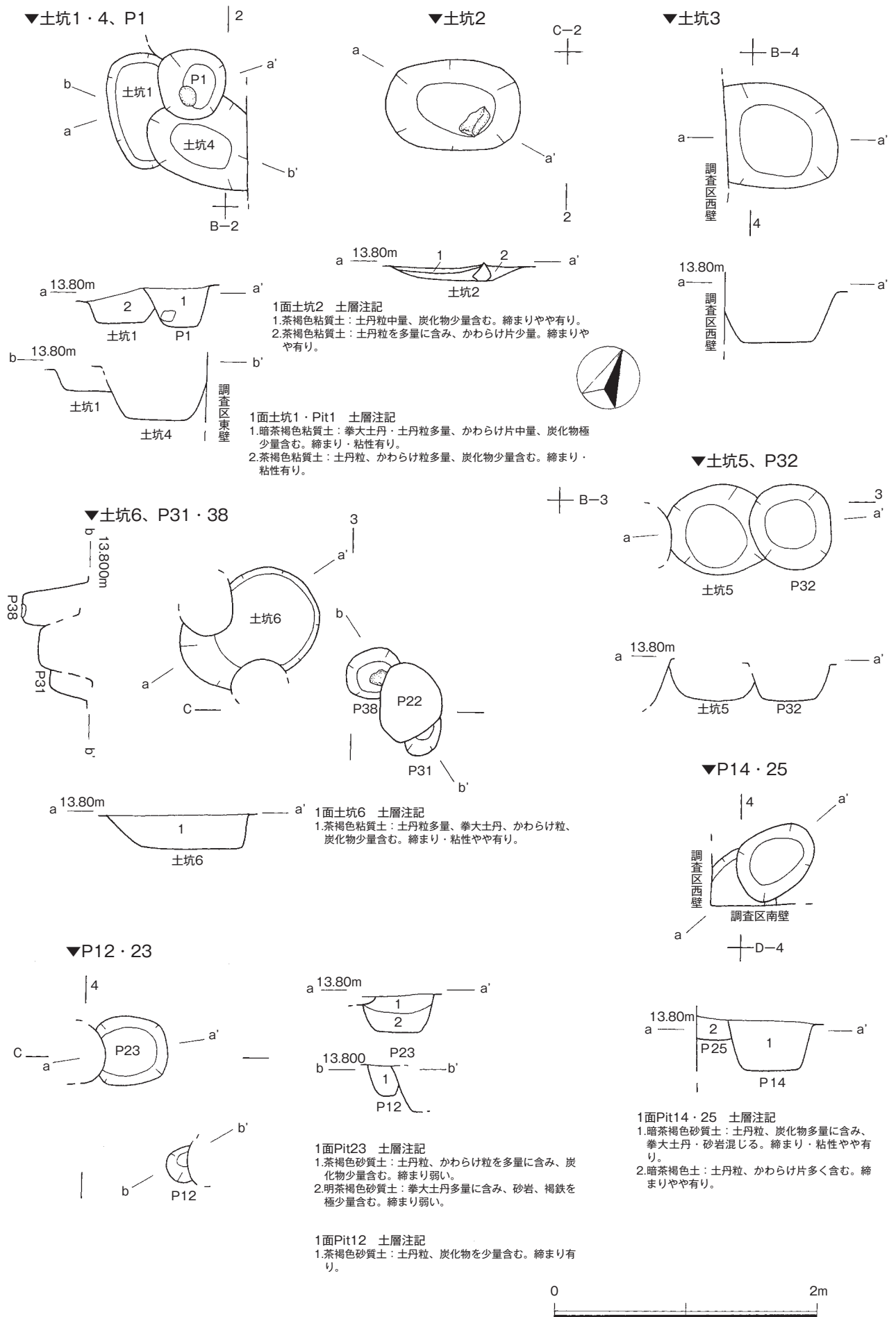


図5 第1面土坑・ピット

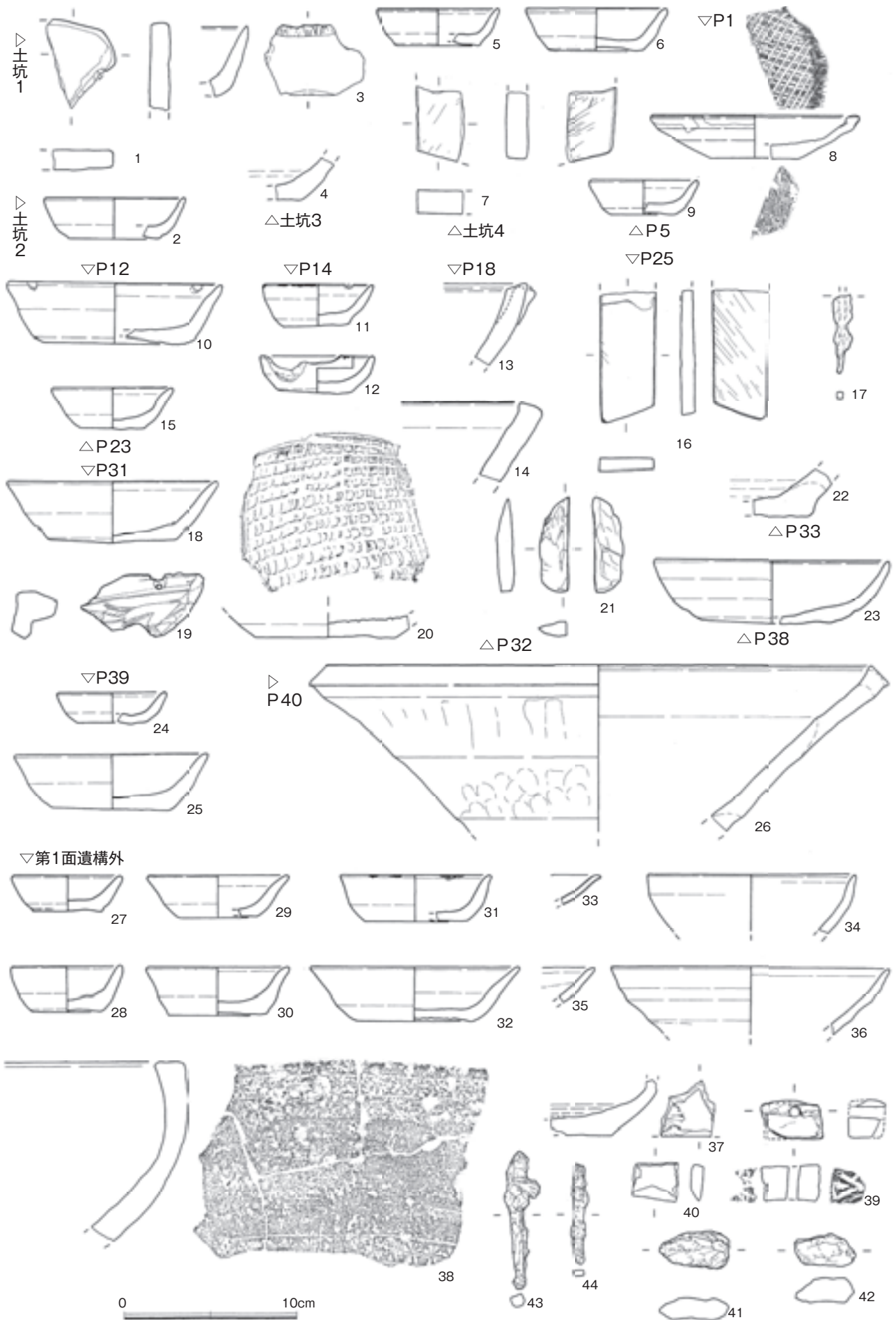


图6 第1面遺構・遺構外出土遺物

土坑1：調査区北東隅の位置で土坑4・P1と重複関係にあり、両者より古い遺構を検出した。形状は楕円形を呈し、大きさは長径92cm、短径50cm以上、深さ30cmであり、掘り方は浅く底面の平らな断面形を呈する。覆土は土丹粒やかかわらけ小片を多量に含み、粘性を有した茶褐色土単一層の堆積が認められた。出土遺物は1の摩耗陶片で常滑甕胴部片を転用している。

土坑2：C-2杭の南西隣に位置する。掘り方の形状は楕円形を呈し、長径103cm、短径78cm、深さ15cm、浅く断面皿状、底面は海拔高13.75mである。覆土はやや締まりのある茶褐色粘質土の2層からなり、下層は土丹粒を多く含む。遺物は2のロクロ成形小皿、薄手器壁で体部上半が外反傾向にある。

土坑3：B-4杭の南側に位置し、調査区外に拡がる。確認できたのは長径92cm以上、短径81cm、深さ38cm、底面の平らな逆台形状の掘り方断面を呈する。覆土は土丹粒や炭化物を多く含む茶褐色粘質土、遺物は3のかかわらけ皿と4の瀬戸折縁皿が出土した。

土坑4：B-2杭に近接した位置で土坑1より新しく、P1に壊されて検出された。調査区外に架かり全体の規模は解らない。確認した大きさは東西径95cm以上、南北径70cm、深さ40cmで平坦な底面をもつ断面逆台形の掘り方である。覆土の主体は締まりのない茶褐色粘質土で上部に炭化物の多い薄い堆積土がみられた。出土遺物は5・6がロクロ成形のかかわらけ小皿、薄手の器壁で外反気味の器形もの、7は熊本県天草産の砥石である。

土坑5：B-3グリットの土坑4南隣に位置でP32などに掘り方一部を壊され検出された。確認できた大きさは東西径70cm以上、南北径72cm以上、深さ30cmで断面播鉢形を呈する。底面の海拔高13.48mを測る。覆土は2層からなり上層が炭化物・かわらけ粒を多量に混じえた暗褐色土、下層が締りのある茶褐色粘質土、遺物はかわらけ細片だけである。

土坑6：C-3杭北西に位置し、ピットなどの遺構一部に壊されている。平面形状は楕円形を呈し、長径108cm、短径80cm、深さ27cmを測り、底面の平らな浅い掘り方で覆土はやや締まりのある茶褐色粘質土である。図示可能な遺物は出土していない。

ピットは調査区の全域にわたり、建物配置や柱並びやを見せない柱穴様のピット55口を検出した。ここでは主に出土遺物を伴うピットについて簡単に触れる。

P1：土坑1・4と重複して検出された。平面形は不整円形を呈し、径52cm、深さ35cmで覆土は土丹粒を多く含む締まりのない砂質土でかわらけ細片を多く伴っていた。遺物は8の瀬戸窯の卸皿である。

P5：B-4杭東隣の位置で検出した。平面は円形を呈し、径40cm、深さ38cmを測り、小さな底面の平らな掘り方である。覆土は炭化物を含む暗茶褐色土、遺物は9の小径のロクロかわらけ小皿である。

P12：C-4グリット中央に位置しP11よりも古いピットである。円形を呈した径30cm、深さ22cmの掘り方で茶褐色粘質土の覆土中からは10のロクロ成形かわらけが出土した。口径・底径比の差が小さく、外反傾向の器形である。

P14・25：調査区北西隅の位置で重複関係にあるピットを検出した。P14が新しく、楕円形を呈し長径66cm、短径48cm、深さ40cm、覆土は土丹粒・炭化物を多量に含む暗茶褐色砂質土、遺物は11・12のロクロ成形かわらけ小皿である。P25は径50cm以上、深さ20cmで浅い掘り方で暗茶褐色土の覆土中からは16の京都鳴滝産の砥石がみられた。

P18・33・39：C-2杭付近で連続した3口を検出した。P18はP39より新しく、楕円形で長径62cm、短径46cm、深さ42cm、覆土は土丹粒・かわらけ粒を多量に含み13の常滑窯片口鉢Ⅱ類が出土した。P33は径20cm以上、深さ32cm、覆土中から22の常滑窯片口鉢Ⅱ類がある。P39は長径40cm以上、

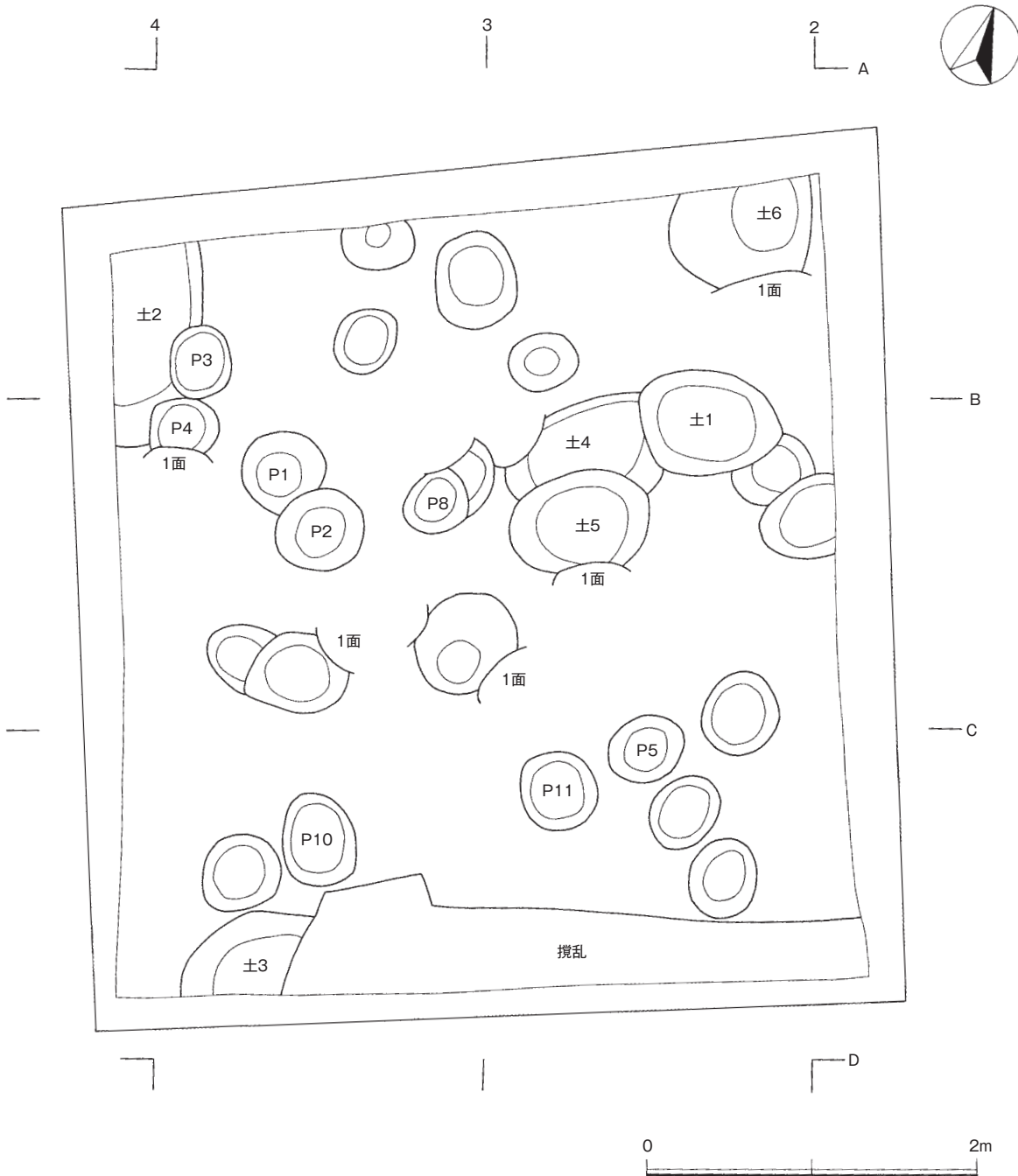


図7 第2面全測図

短径35cm、深さ35cmの楕円形、遺物は24・25のかわらけ皿が出土した。この他の出土遺物はP31から18のロクロ成形かわらけ、19の滑石鍋転用加工の未成品、10の瀬戸卸皿がみられ、P40から26の常滑窯の片口鉢Ⅱ類が出土した。

第1面遺構外出土遺物：図6-27～32はロクロ成形のかわらけ大小皿である。小皿は口径が6cm代と8cm代に大別され、口径と底径の比率差が異なる資料に大別されきるが、器形は概ね外反傾向にある。33は白磁皿、34～37が瀬戸窯の製品である。34が鉄釉の天目茶碗、36が灰釉平碗、35が緑釉小皿であり、ともに古瀬戸後期Ⅱ～Ⅲ頃と思われる。37が胴部に菊花文押印した香炉、38が瓦質火鉢、39が滑石製スタンプで鍋口縁部を加工して三角形の文様を線刻、40が京都鳴滝産の仕上砥、41・42が火打石、43・44が鉄釘である。

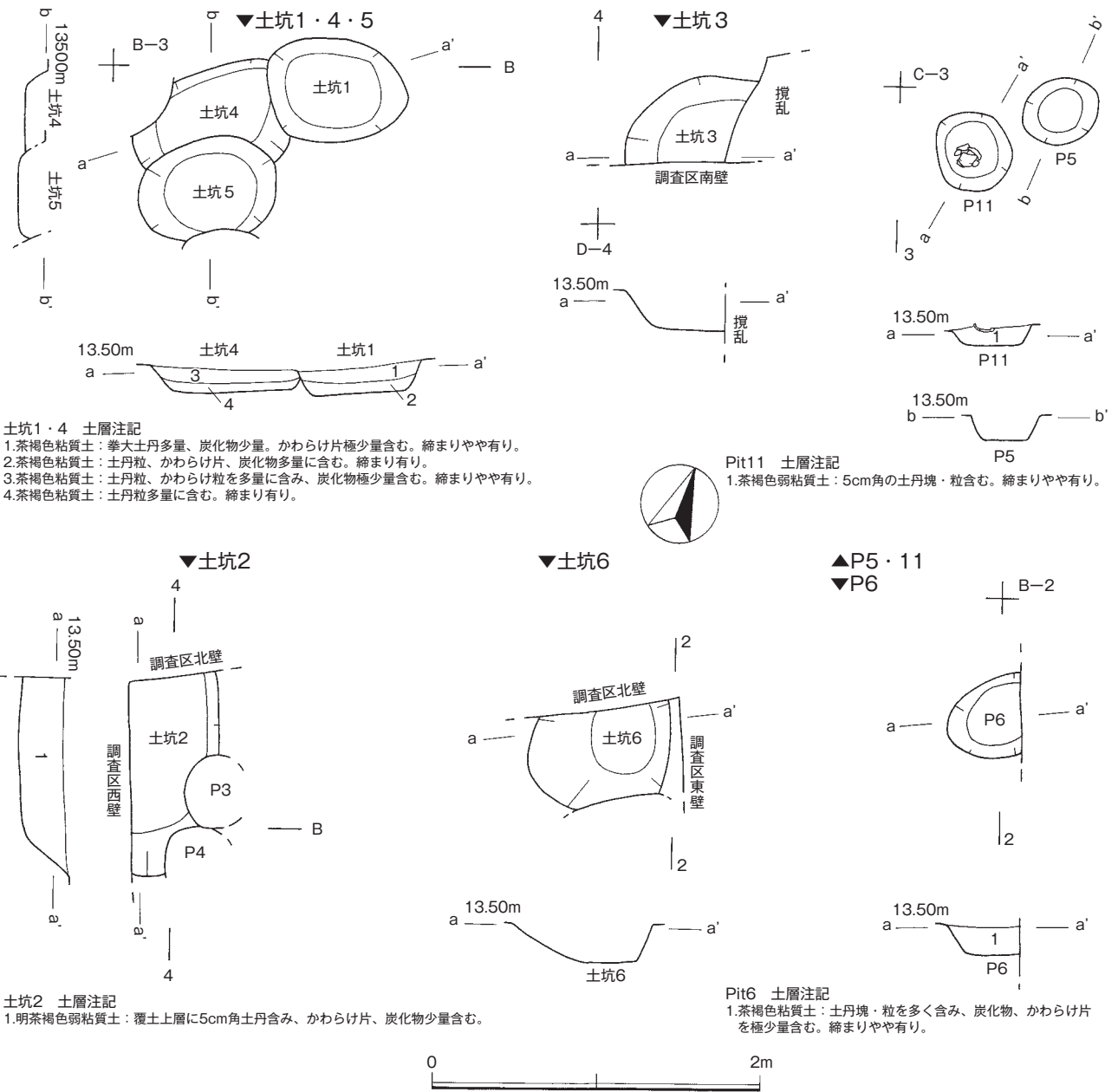


図8 第2面土坑・ピット

2. 第2面の遺構と遺物 (図7～9)

この面は概ね破碎した数cm角の土丹小塊を混えた地形層であり、海拔高13.55m前後を測る。遺構は図7・8のように土坑6基、柱穴様のピット25穴などを検出した。遺物は図9のようにかわらけをはじめ、青磁・白磁の貿易陶磁器、瀬戸・常滑窯の国産陶器、瓦質品、石・骨・金属製品などが出土した。

土坑1・4・5：調査区中央の北東寄りに位置し、土坑1・4・5が重複関係にあり土坑4は両者より古い遺構である。土坑1は形状が楕円形を呈し、長径92cm、短径63cm、深さ30cmであり、掘り方は浅く底面の平らな断面形を呈する。覆土は土丹粒やかわらけ細片を多量に含む、粘性を有した茶褐色土単一層の堆積が認められ、遺物は1の瀬戸入子と2の火打石が出土した。土坑4は長径95cm以上、短径65cm、深さ18cmの底面平らな浅い掘り方、覆土は土丹粒・かわらけ細片・炭化物を多く含む茶褐色粘質土、図示可能な遺物は出土していない。土坑5は楕円形を呈し、長径87cm、短径63cm、深さ21cmの浅い掘り方で土丹粒多量の覆土、遺物はかわらけ小片だけである。

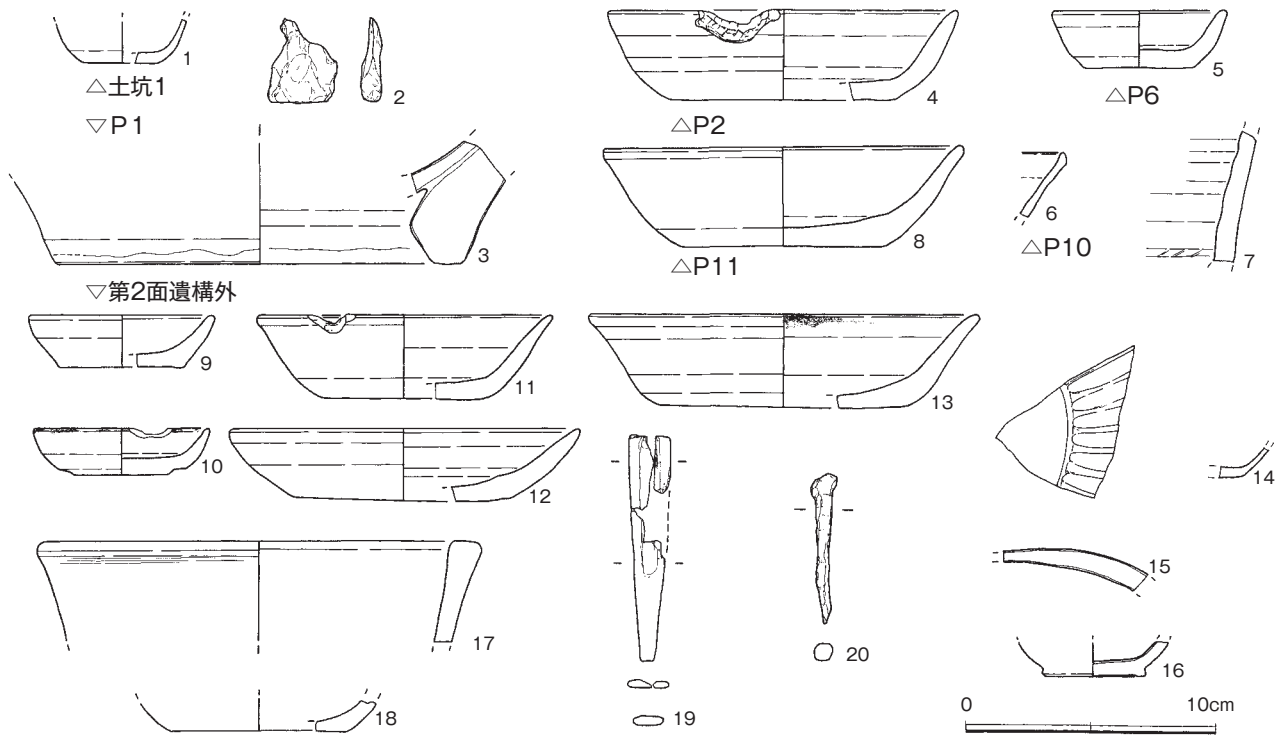


図9 第2面遺構・遺構外出土遺物

土坑2：調査区北西隅に位置し、調査区外へ拡がり全体規模は不明であり、P3・4に掘り方一部が削平される。確認できたのは長径120cm以上、短径55cm以上、深さ28cm、底面の海拔高13.25mである。覆土は数cm角の破碎土丹を含む明茶褐色土、図示可能な良好遺物は出土していない。

土坑3：調査区北西隅に位置し、東側は攪乱削平され、南側は調査区外に拡がり全体規模は不明である。確認できた大きさは東西径80cm・南北径50cm以上、深さ25cmを測り、底面が平らな断面が浅い逆台形状の掘り方、覆土は土丹小塊を少量含む暗茶褐色砂質土、遺物はかわらけ細片が出土しただけである。

土坑6：調査区北東隅に位置し、調査区北壁に拡がる掘り方で全容不明である。確認できた大きさは東西径87cm、南北径60cm以上、深さ22cm、底面の海拔高13.27mを測る。覆土は土丹細片と砂利を多く含む茶褐色砂質土、出土遺物はかわらけ細片だけで図示できなかった。

P1・2：B-4杭の南東に位置し、P1をP2が壊して掘り込んでいる。P1は円形を呈し、径50cm、深さ28cmを測り、断面U字状の掘り方をもつ。覆土は炭化物を多く含む茶褐色砂質土、出土遺物は3が青磁酒会壺が出土した。P2は径56cmのほぼ円形を呈し、深さ35cmで底面に腐食して痕跡だけの礎版2枚が認められ、覆土は締りのない茶褐色土である。遺物は4のロクロ成形かわらけの大皿で、口縁の一部を打ち欠き加工を施している。

P5・11：C-3杭の東隣に位置する。P5は楕円形の掘り方で長径52cm、短径38cm、深さ23cm、覆土はかわらけ片、炭化物を多く含む茶褐色土である。P11は長径50cm、短径42cm、深さ20cmの浅い掘り方で、覆土上層から8のロクロ成形かわらけが出土、大径で外反気味の器形である。

P6：B-2杭南隣に位置し、調査区壁かかり全容不明、南北径50cm・東西径50cm以上、深さ25cmの楕鉢状断面の掘り方である。覆土は破碎土丹小塊多量に含む粘質土、遺物は5の小径背高のロクロ成形かわらけである。

P10：C-4グリットで土坑3北隣に位置する。楕円形を呈し、長径58cm、短径44cm、深さ32cmを測り、遺物は6が北部系山茶碗（東濃型）の口縁部片、7がかわらけ質の筒形製品である。

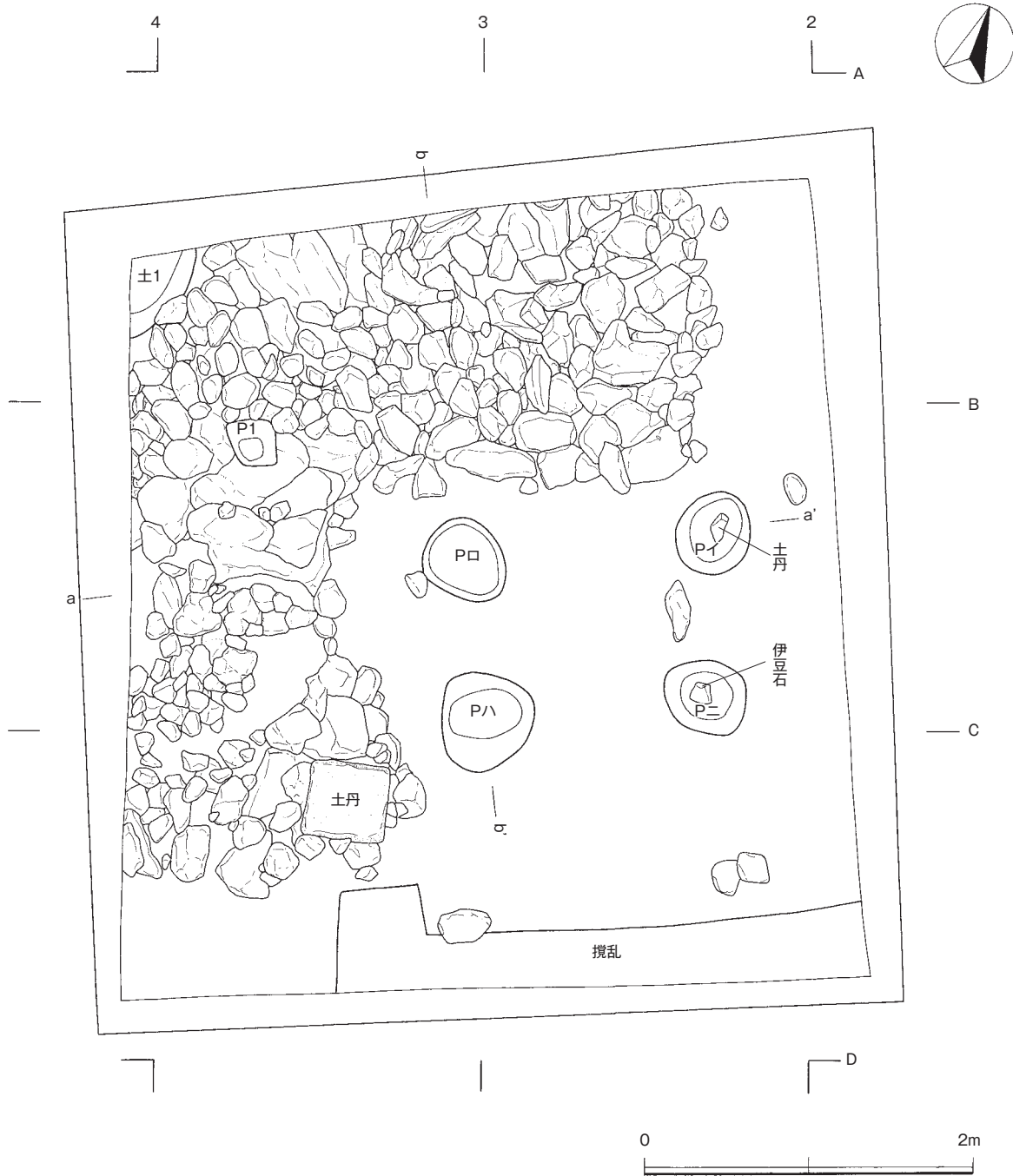


図10 第3面全測図

第2面遺構外出土遺物：図9-9～13はロクロ成形のかわらけ皿である。小皿は9の外反気味ものと10の内湾した器形があり、中大皿は11・13が背高な器高を有した外反傾向の器形をもち、13は口径15cm超える大径の資料である。12は背低な器高で内湾気味の器形である。14は青白磁合子の身底部片、15は青磁酒会壺の蓋部片、16は瀬戸天目茶碗、17・18は瓦質の火鉢・香炉、19は骨製品の筭、20は鉄釘である

3. 第3面の遺構と遺物（図10～12）

この面は概ね破碎した大小土丹塊を用いた地形層で構成されるが、地形層が抜けて一段落ち込んだ建物範囲を思わす遺構が検出された。遺構確認の海拔13.10～13.35m前後を測る。遺構は図10・11のよ

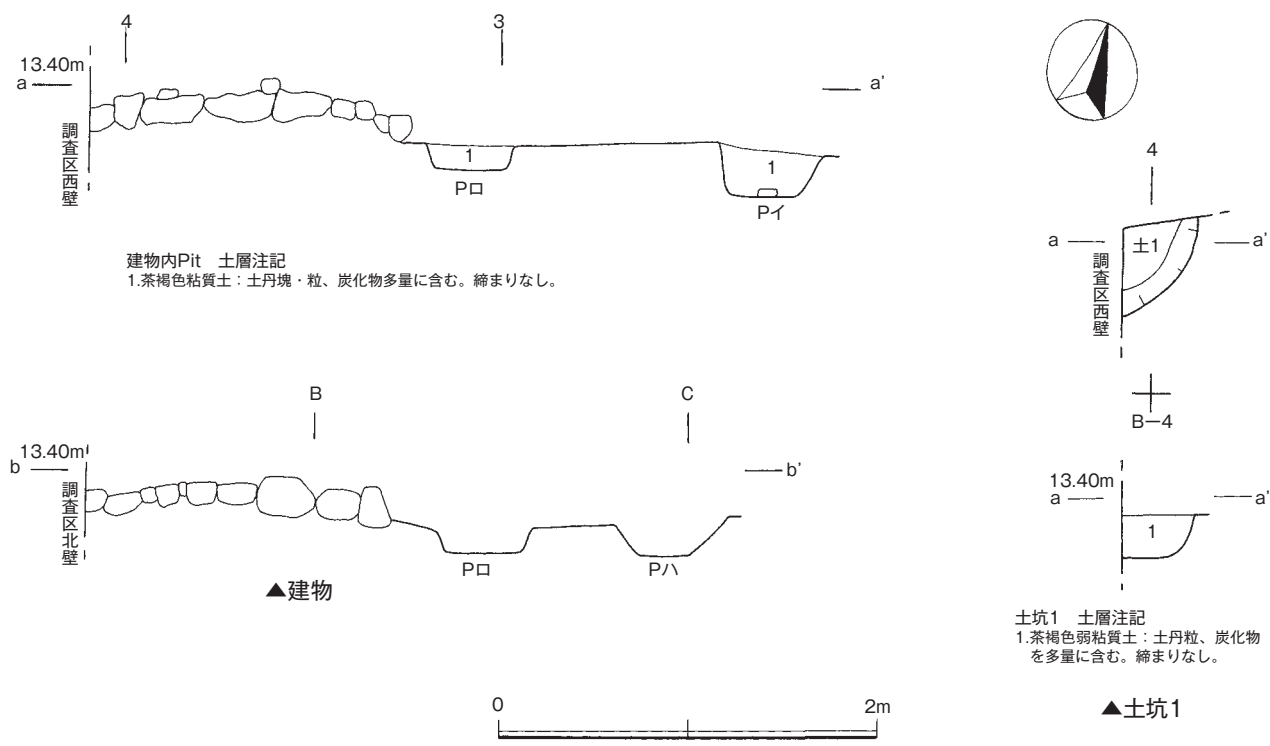
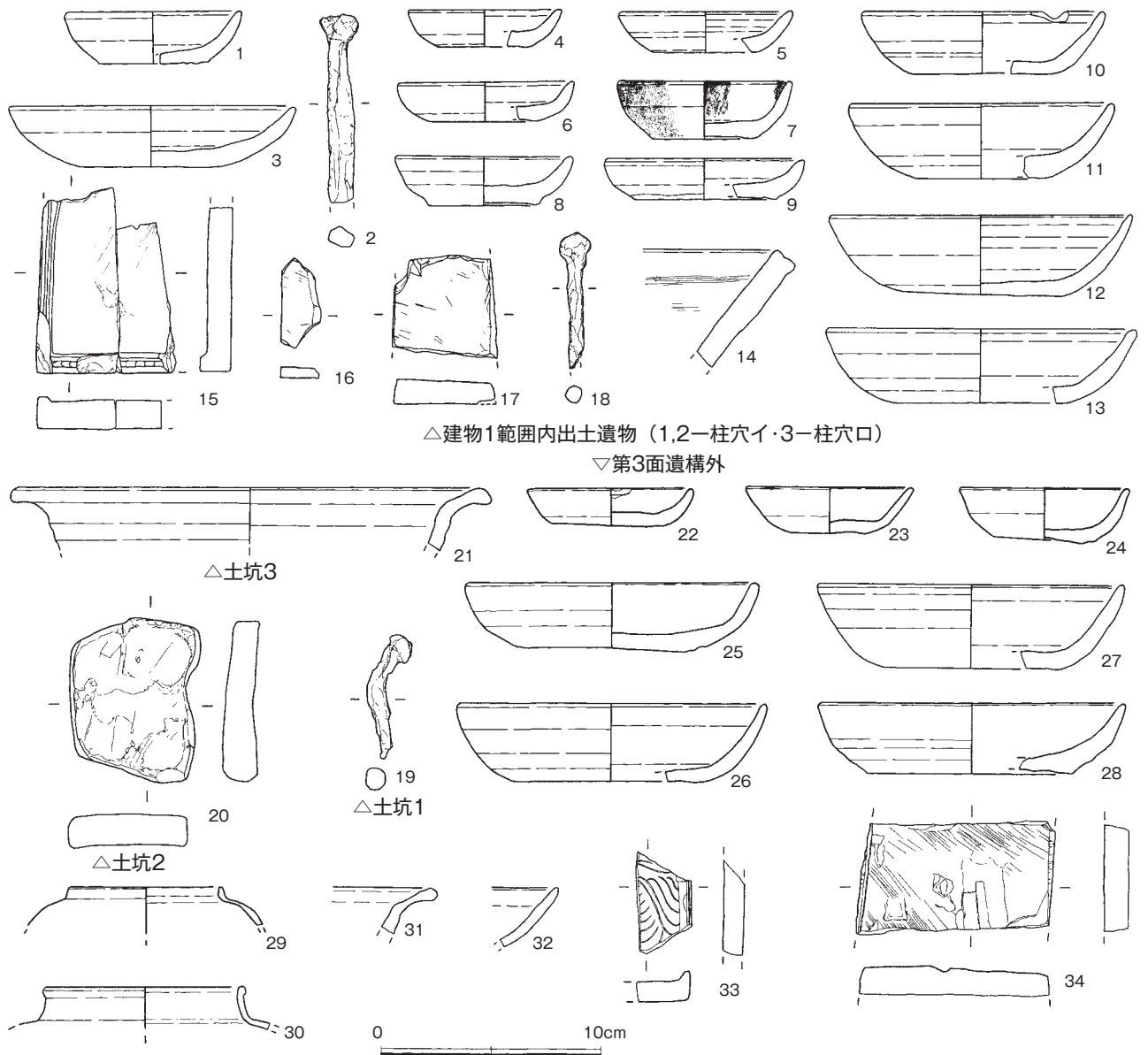


図11 第3面 建物・土坑

うに建物1軒、土坑1基、ピット1口などを検出した。遺物は貿易陶磁器、瀬戸・常滑窯産品、かわらけ、硯・砥石の石製品、鉄釘などがみられた。

建物1：調査区北西域で拳大～人頭大の破碎土丹塊を張り付けたような地形層を確認したが、北東域ではその地形層が抜けて遺構覆土のようなしまりの無い堆積土が確認され、一段落ち込むL字型の範囲が観察された。図3上段の調査区東壁土層堆積のように覆土中位には炭化物層を伴い底面に建物柱穴の掘り方が検出されるので建物遺構として捉え調査を行った。建物は東及び南の方向の調査区外に拡がると考えられる。全体の規模や構造を明確にすることはできなかったので、ここでは底面の建物に伴うと思われる掘り方や伊豆石などの検出状況を中心に触れる。底面には土丹塊地形に沿って建物を構成すると考えられる4穴の円形掘り方(Pイ～Pニ)と、南北方向の軸線上に扁平な土丹塊が検出された。柱間寸法は、図11のエレベションで示したように東西軸方向(a～a')のPイ～P口が距離約150cm、南北軸方位(b～b')のP口～Pハが約距離100cm、南側軸線上の土丹塊までの距離120cm程である。掘り方はPイが楕円形を呈し、長径55cm、短径45cmで底面中央に扁平な土丹塊を据えていた。覆土は土丹小塊・炭化物多量に含む締まりのない茶褐色土である。P口は不整円形で長径52cm、短径45cmで浅い皿状断面をもつ。Pハは不整円形で長径62cm、短径54cm、Pニはほぼ楕円形で長径53cm、短径45cmで逆台形状の断面形を呈し、底面からの深さ18～28cm程とすべて浅い掘り方であった。

さらに底面上や覆土中から出土した伊豆石は被災により破損したものや表面が斫れたものであり、掘り方に用いられていた砥石の可能性が考えられよう。また建物範囲の精査中、L字型に破碎土丹塊の地形層が切れて落ち込んで底面に至る位置で焼け焦げた薄い横板材を確認している。建物内外の海拔高を見ると、建物外の破碎土丹塊の地形層面は13.35m前後、建物内は底面13.10m前後、掘り方底面12.90～13.00m程を測り、建物範囲は地形面より30cm近く一段低い構造になっている。建物形態としては、竪穴建物の木組構造のように礎石基礎上に土台材を四周に配した板壁の建物が想像される。



△建物1範囲内出土遺物 (1,2-柱穴イ・3-柱穴口)

▽第3面遺構外

△土坑3

○19
△土坑1

△土坑2

図12 第3面の遺構・遺構外出土遺物

建物1に伴う遺物は(図12)、建物掘り方のPイが1のロクロ成形かわらけで薄手の背高気味で内湾した器形の小皿と2の鍛造による鉄釘、Pロからは3の背低で内湾気味の器形をもつ大皿である。建物範囲内の覆土中から出土したものは、4～13がロクロ成形かわらけ皿である。小皿は7の薄手器壁で背高気味の資料を除き、施低の内湾傾向をもつ器形が主体、中大皿は背高気味の薄手器壁を呈し、内湾した器形である。14は常滑窯片口鉢Ⅱ類。15は石硯で縁に線刻文様を施すもの、16・17は砥石の仕上砥でこれらは京都鳴滝産岩の製品であろう。

土坑1：調査区北西隅に位置し、掘り方の一部が検出されただけで全容は不明である。大きさは径45cm以上、深さ23cmの浅い掘り方である。覆土は土丹粒や炭化物を多量に含む締めりのない茶褐色土の単一土層、図示可能な遺物は19の鉄釘のみである。

第3面遺構外出土遺物：図12-22～28はロクロ成形のかわらけ皿である。小皿は22が背低の内湾した器形、23・24は背高気味の薄手器壁である。25～28の大皿は背高気味で、薄手の器壁は内湾しながら

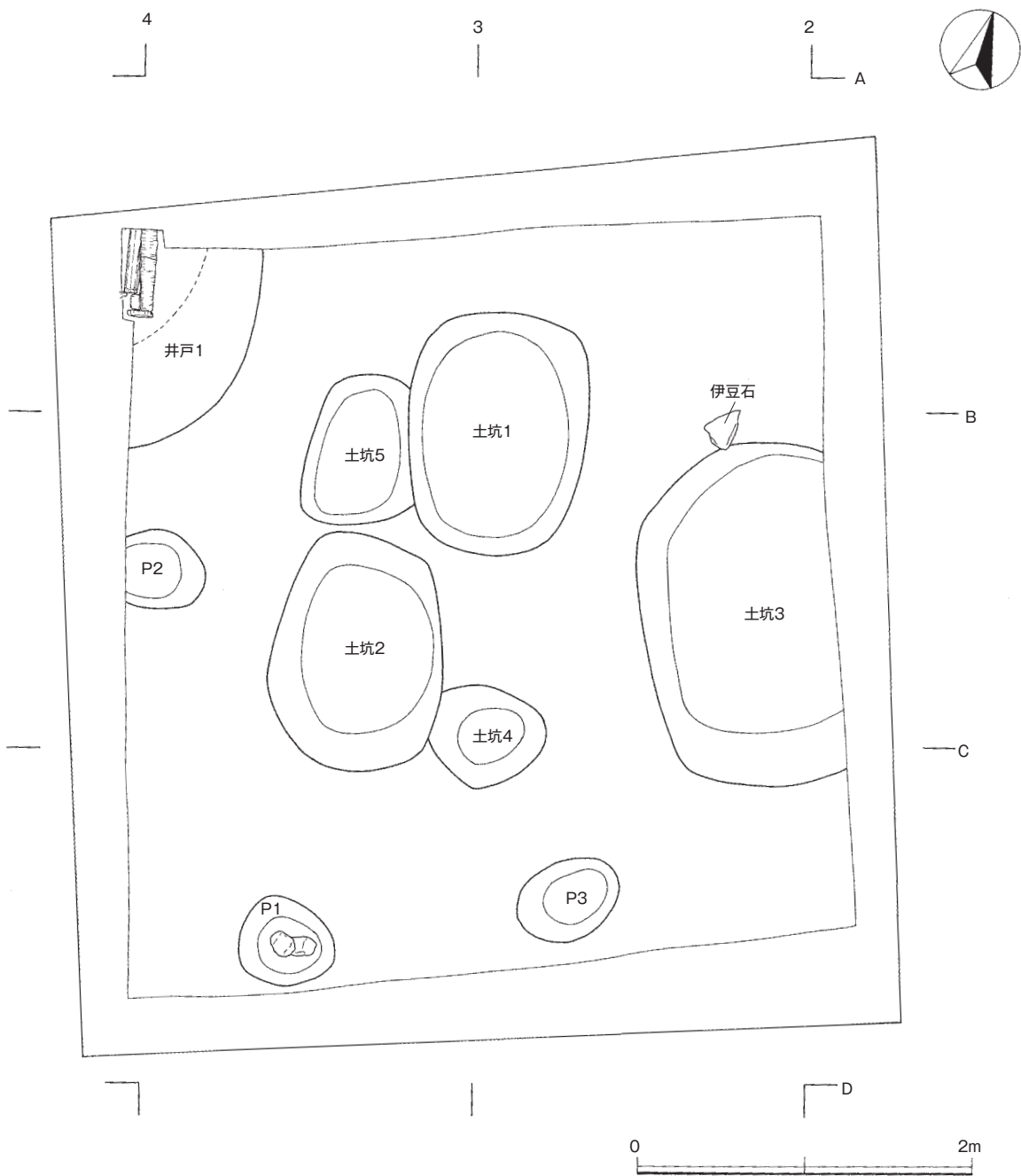


図13 第4面全測図

ら立ち上がる器形である。舶載陶磁器は29の白磁の外型造りの広口小壺と30は黒褐釉壺、31は瀬戸折縁深皿、32は白かわらけ質の皿、33・34は京都鳴滝産岩の石硯である。

4. 第4面の遺構と遺物 (図13～16)

この面は破碎した拳大から頭大の土丹塊を多量に混じえた厚い地形層であり、生活面の海拔高13.00m前後を測る。検出した遺構は土坑5基、井戸1基、建物配置を示さないピット3穴などである。

土坑1：B-3杭に位置し、土坑5を壊して掘り込んだ大型の土坑である。大きさは長径145cm、短径108cmの隅丸長方形を呈し、深さ20cmの断面皿状の浅い掘り方である。覆土は土丹粒や炭化物を多量

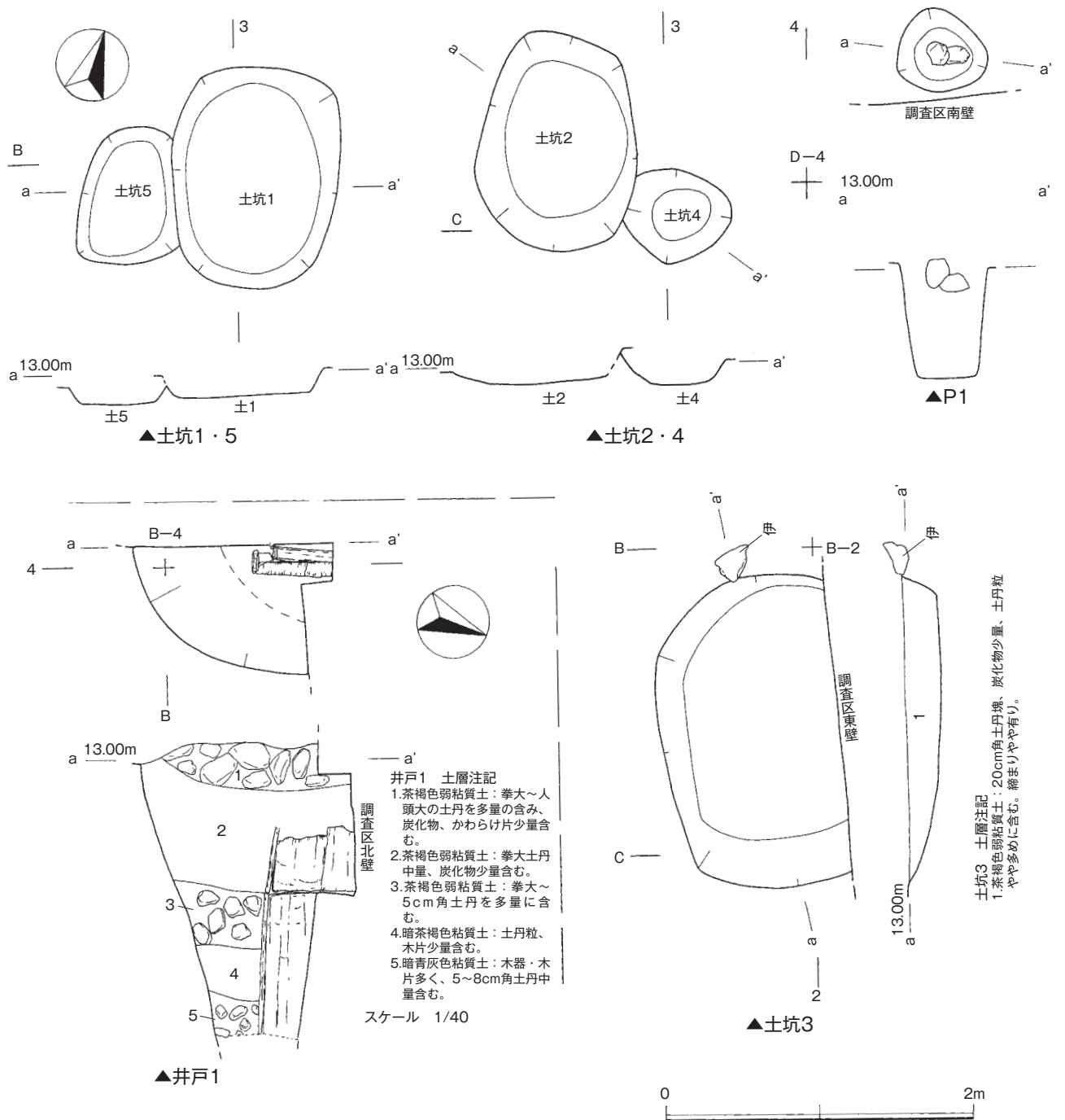


図14 第4面土坑・井戸・ピット

に含む締まりのない茶褐色砂質土の単一層である。遺物は図15-1が回転糸切底のかわらけ小皿、2が滑石製スタンプで表面に草花文を陽刻したもの、3は砥石で京都鳴滝産の仕上砥である。

土坑2：C-3坑に近接した位置で検出され、土坑4より新しい遺構である。平面形は南北位の楕円形を呈し、長径146cm、南北径104cm、深さ25cmで平坦な底面をもつで掘り方である。覆土の主体は締まりのない茶褐色粘質土で上部に炭化物の多い薄い堆積層があり、遺物はかわらけ細片だけで図示可能な資料の出土はみられなかった。

土坑3：調査区中央東端に位置した大型の土坑であるが、東壁にかかり全容は不明である。確認できたのは長径207cm、短径115cm以上、深さ26cm、底面の海拔高12.80mである。覆土は拳大の破碎土丹を含む茶褐色弱粘質土、遺物は4・5のロクロ成形のかわらけ大小皿、背高の薄手器壁で内湾器形である。

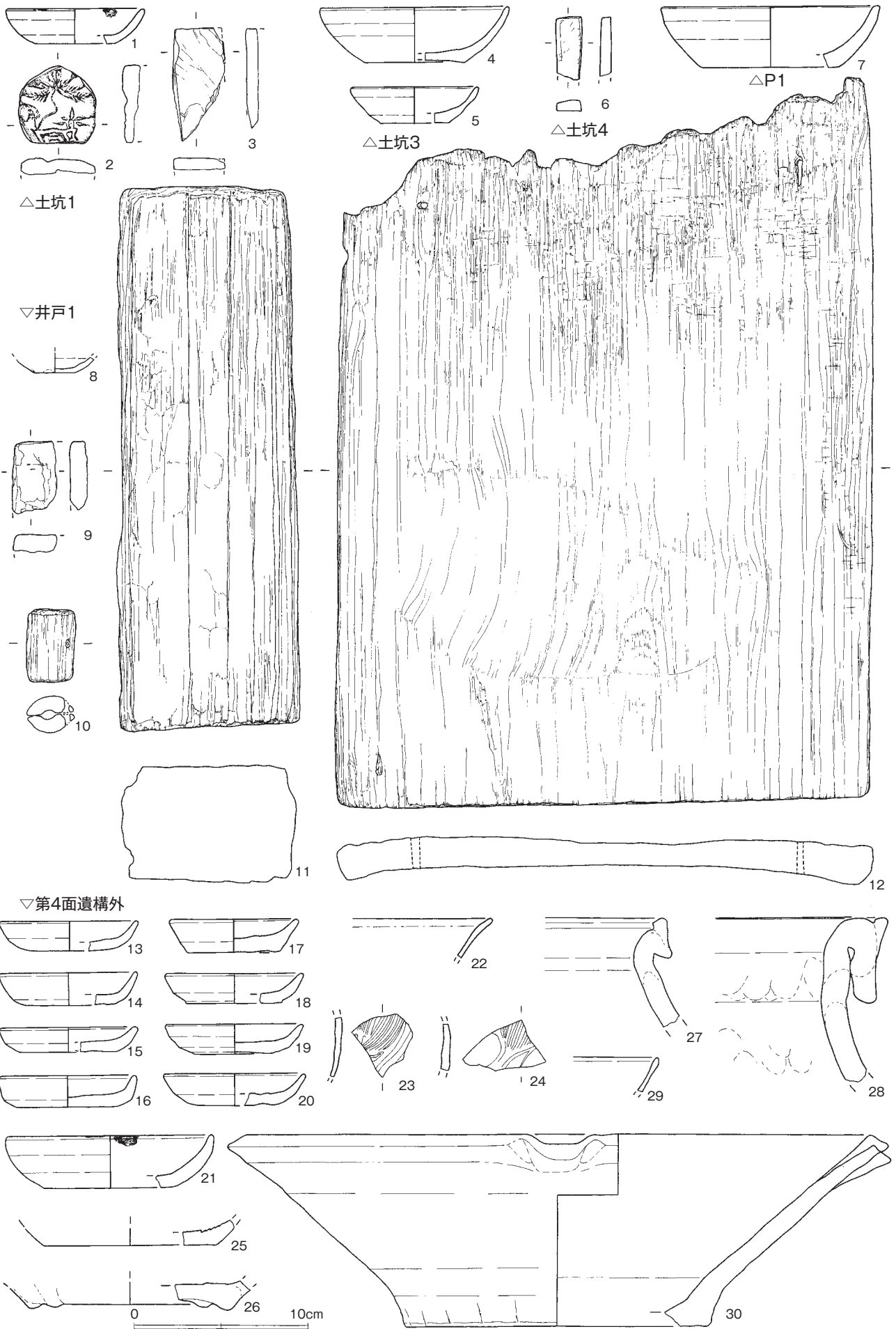


图15 第4面遺構・遺構外出土遺物

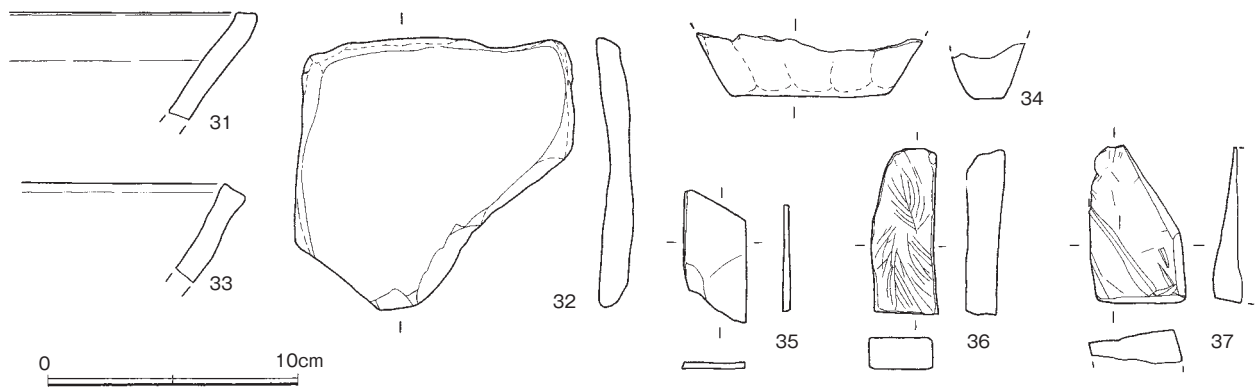


図16 第4面遺構外出土遺物

土坑4：C-3杭の位置で検出された。平面形は不整円形を呈し、長径70cm以上、短径58cm、深さ15cmと浅い掘り方で平坦な底面をもつ。覆土の主体は締まりのない茶褐色粘質土で上部に炭化物の多い薄い堆積層があり、出土遺物はかわらけ細片だけで、図示できたのは6の京都鳴滝産の砥石である。

土坑5：土坑1と重複関係にあり、本址が古い土坑である。平面形は楕円形を呈し、長径90cm、短径70cm以上、深さ15cmの平坦な底面をもつ浅い掘り方である。覆土は締まりのない茶褐色粘質土、遺物はかわらけ細片のみで図示可能な資料は出土していない。

井戸1：調査区北西隅で掘り方と井戸枠の一部が確認されたが、大半は調査区外に拡がっていた。この井戸は調査区壁際に位置して井戸枠内や掘り方の覆土は締まりのない土で埋め戻されており、湧水や降雨で崩落の危険を伴うと判断されたので、この面では深さ60cm程まで掘り方を確認したところで作業を中断した。図14の土層断面図や図版8-d・eの木枠検出状況の写真は、調査深度が下がり崩落の危険がやや和らいだ第7面において壁際にトレンチを設定して実施した。掘り方一部を除去しながら第4面の遺構確認面から約150cmまで掘り下げ、土層観察と外側から井戸枠を確認しただけで井戸底まで調査していないことをお断りしておきたい。

井戸枠の形態は、方形横棧支柱式であり横棧は幅7cm・厚さ9cmの角材を使用して両端がホゾの組み合わせ仕口になり、横棧隅に乘にのせた支柱は高さ42cm程で8cm角材が用いられていた。土留めの側板(図15-12)は幅30.3cm、厚さ2.1cm前後であり、下端から34cm程の位置に並行した釘穴が認められ、床や壁板材などの転用材と考えられる。覆土は5層まで観察できたが、1層は大小の破碎土丹塊を多く混入した茶褐色粘質土で井戸廃絶時の埋戻し土と考えられ、2層以下は掘り方の裏込め土にあたる。遺物は8が褐釉の茶入と思われるもの、9が滑石を加工した小片、10・11が用途不明の木製品である。

P1：調査区南西隅に位置する。平面形状はやや不整円形を呈し、径43cm、深さ60cm程の深い掘り方をもつ柱穴様のピット、覆土はかわらけ細片や炭化物を多く含み締まりの弱い茶褐色土、上部に拳大の土丹塊2個がみられた。遺物は7の背高気味のロクロ成形かわらけの大皿である。

P3：形状は楕円形を呈し、長径63cm、短径46cm、深さ25cmと浅めの掘り方である。覆土は土丹粒・炭化物の多い締り弱い砂質土、遺物はかわらけ細片だけである。

第4面遺構外出土遺物：図15・16-13～21はロクロ成形のかわらけ皿である。小皿は主に背低のやや内湾した器形であるが、17は開いた器形、大皿はやや厚手器壁の内湾器形である。舶載磁器は22の白磁の口元皿と23・24が青白磁の牡丹唐草文梅瓶である。国産陶器は25・26が瀬戸折縁深皿で内底面

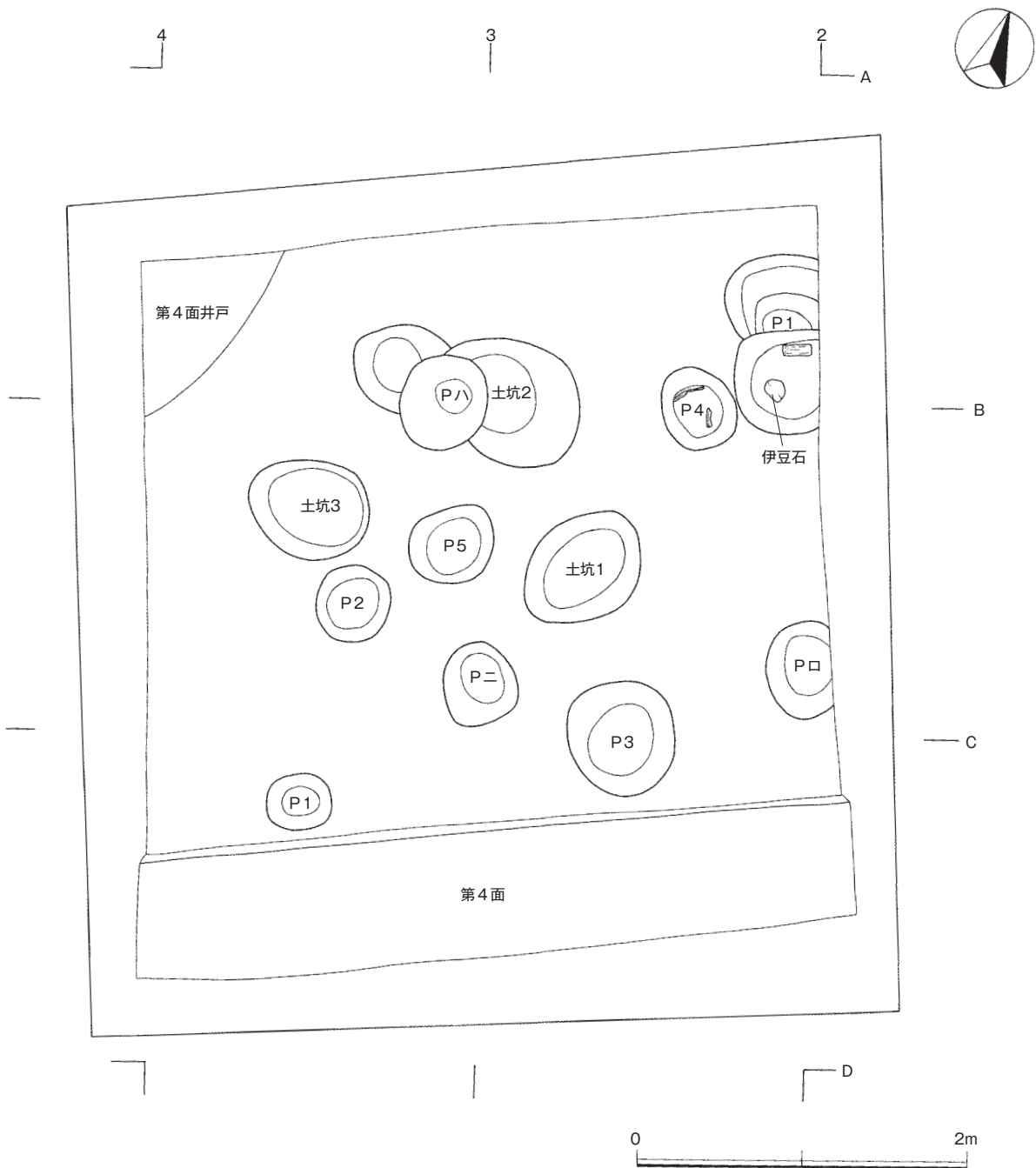


図17 第5面全測図

に円圈文、27が精良胎土の東美濃窯系（北部系）山茶碗、28～30が常滑窯の甕・片口鉢Ⅱ類である。

5. 第5面の遺構と遺物（図17～19）

第5面の厚い構築土を除いて表出したのが破碎した拳大の土丹塊による生活面である。海拔高12.70m前後を測る。検出した遺構は掘立柱建物1軒、土坑5基、建物配置を示さないピット6穴などである。遺物は量的に少ないがかわらけをはじめ、白磁小壺、瀬戸窯卸皿・入子、常滑窯壺・甕・片口鉢、山茶碗、伊勢系土器、骨製筭、鉄釘などが出土している。

建物1：調査区東寄りの位置で一定の配置を示した柱穴で掘立柱建物跡と推定され、建物規模は1間四方で調査区外に拡がるものであろう。柱間距離は東西軸が205cm、南北軸180cm程、柱穴掘り方は平

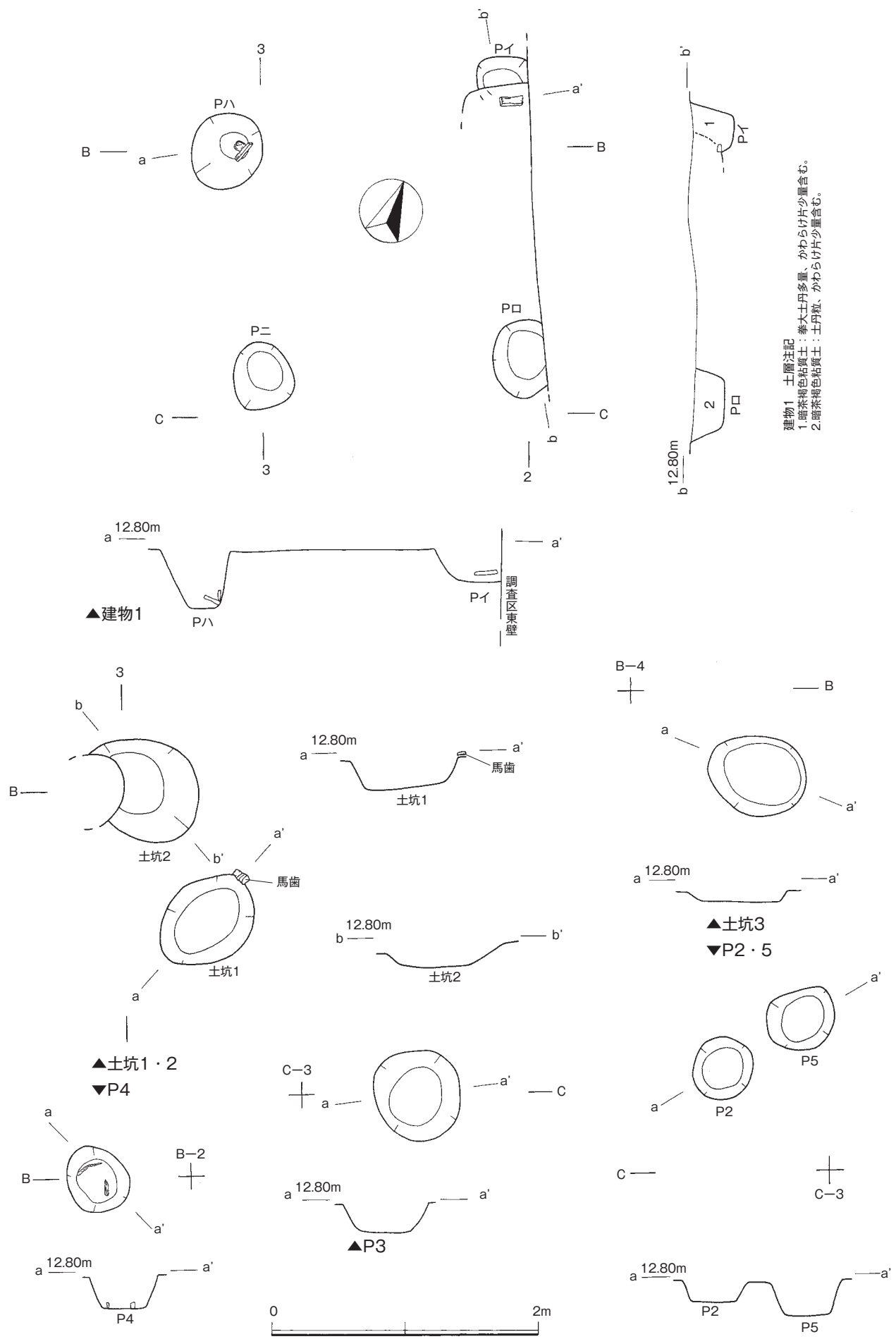


図18 第5面建物・土坑・ピット

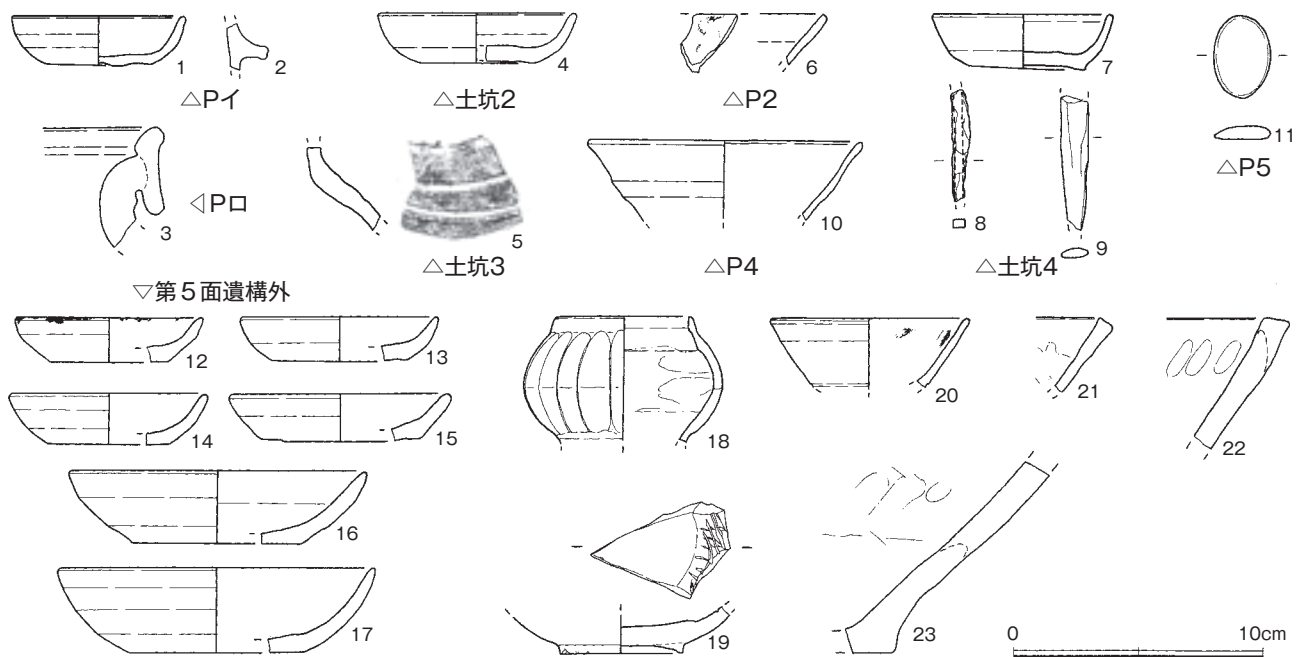


図19 第5面遺構・遺構外出土遺物

面形状が楕円形を呈する。大きさはPイが長径42cm・短径35cm以上、深さ33cm、Pロが長径60cm、短径40cm以上、深さ25cm、Pハが長径60cm、短径52cm、深さ45cm、Pニが長径50cm、短径42cm、深さ43cmでPイ・ハからそれぞれ礎板が検出された。柱穴の覆土は暗茶褐色粘質土で拳大土丹塊を少量含み締りのあるものがPイ・ハ、土丹粒・かわらけ片が少量混る締りの無いのがPロ・ニである。確認した海拔高12.75m前後である。遺物は図19のようにPイが1の薄手器壁のかわらけ小皿、2が伊勢系鏝釜、Pロが3の常滑窯甕の口縁部片で常滑編年の7型式に相当する資料と考えられる。

土坑1：調査区中央に位置する。形状は楕円形を呈し、大きさは長径82cm、短径63cm、深さ26cmと浅めで断面逆台形の掘り方を呈する。覆土は炭化物やや多く、拳大土丹塊を少量含む茶褐色土、遺物はかわらけ細片だけであったが、掘り方の北端上に馬歯が1点出土した。

土坑2：B-3杭に位置し、建物1-Pハの柱穴に一部壊される。形状は楕円形、大きさは長径95cm、短径73cm、深さ20cm程の浅い断面皿状の掘り方を呈する。覆土は土丹粒・かわらけ細片を少量含む砂質土、遺物は4の薄手器壁で内湾気味のロクロ成形かわらけ小皿である。

土坑3：調査区中央西寄りに位置する。形状は楕円形を呈し、大きさは長径76cm、短径60、深さ13cmの浅い皿状断面、茶褐色弱砂質土の覆土、遺物は5の常滑壺の肩部片で二条の沈線巡る。

土坑4：調査区南東に位置する。形状は不整形を呈し、長径70cm、短径62cm、深さ25cmの底面平らな掘り方である。遺物は7がロクロかわらけ小皿で背高気味の薄手器壁、8が骨製筭、9が鉄釘である。

P2・5：調査区中央の位置で2穴を検出した。形状は共にほぼ円形を呈し、大きさはP2が径45cm、P5が径50cm、深さ34cmである。遺物はP2が6の瀬戸入子、P5が11の基石である。

P4：B-2杭の西隣にあたる。形状は楕円形、長径53cm、短径42cm、深さ28cmの大ききで底面に腐蝕した礎版がみられた。遺物は10の瀬戸入子である。

第5面遺構外出土遺物：12～17はロクロ成形かわらけ皿である。大小15の開いて立ち上がる器形以

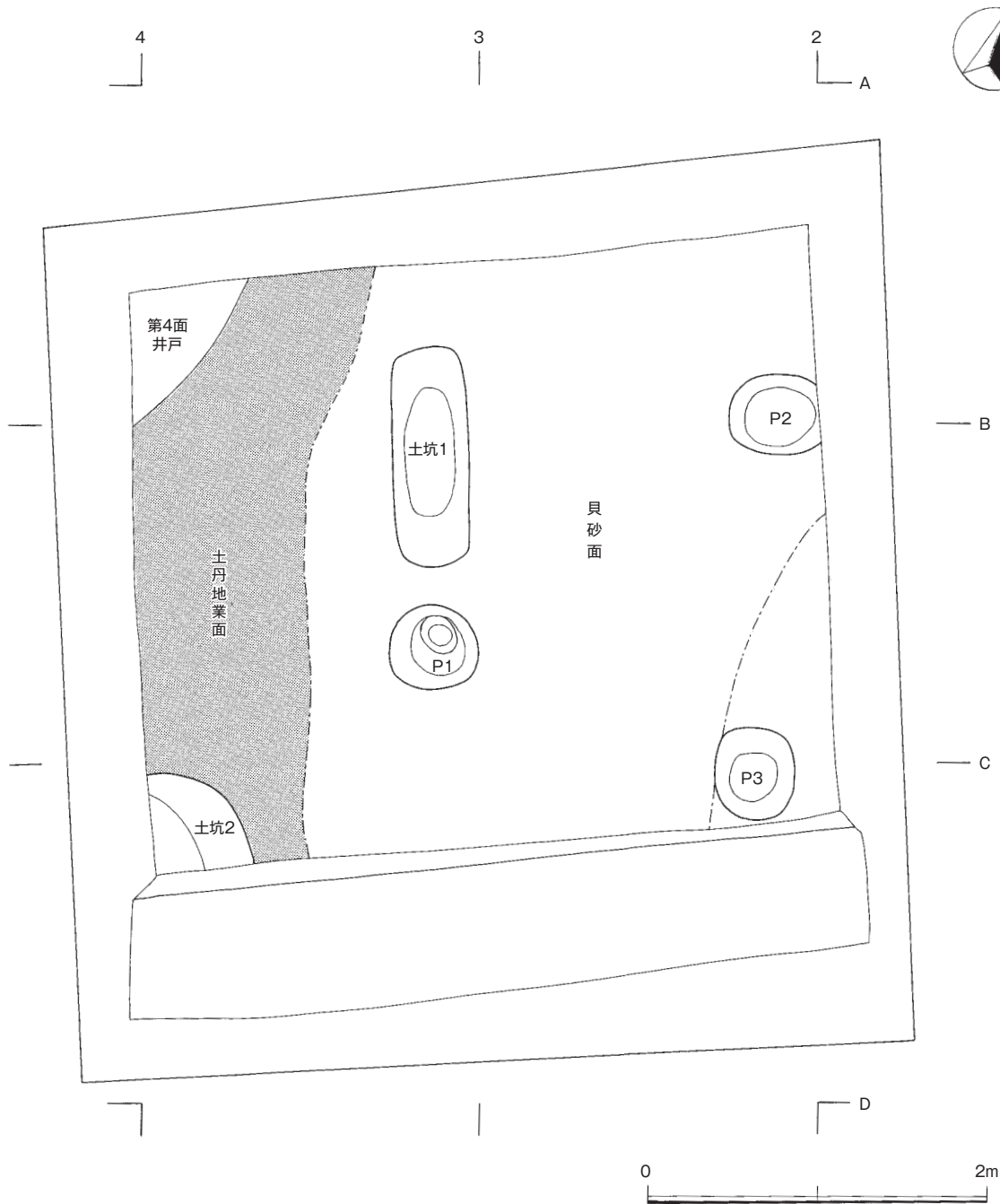


図20 第6面全測図

外は内湾気味の器形である。18は白磁小壺で無頸の瓜形様のもの、19は東美濃型山茶碗で内壁面にヘラ卸目刻みがある。20・21は瀬戸入子・卸皿、22・23は常滑片口鉢Ⅱ類である。

6. 第6面の遺構と遺物 (図20～22)

第5面の構成土を除いて表出したのが破碎した拳大の土丹塊・土丹粒を多量に含む地形層で調査区西端が土丹版築面、その東側が貝砂を撒いた生活面を構成している。海拔高12.50m前後を測る。検出した遺構は土坑2基、建物配置を示さないピット3穴である。遺物は量的に少ないがかわらけをはじめ、青白磁梅瓶、瀬戸窯卸皿、常滑窯甕・片口鉢、東美濃山茶碗、瀬戸内系土器壺、土錘、石・木製品などが出土している。

土坑1：B-3杭に近接した位置である。形状は隅丸長方形を呈し、大きさは南北長130cm、東西長

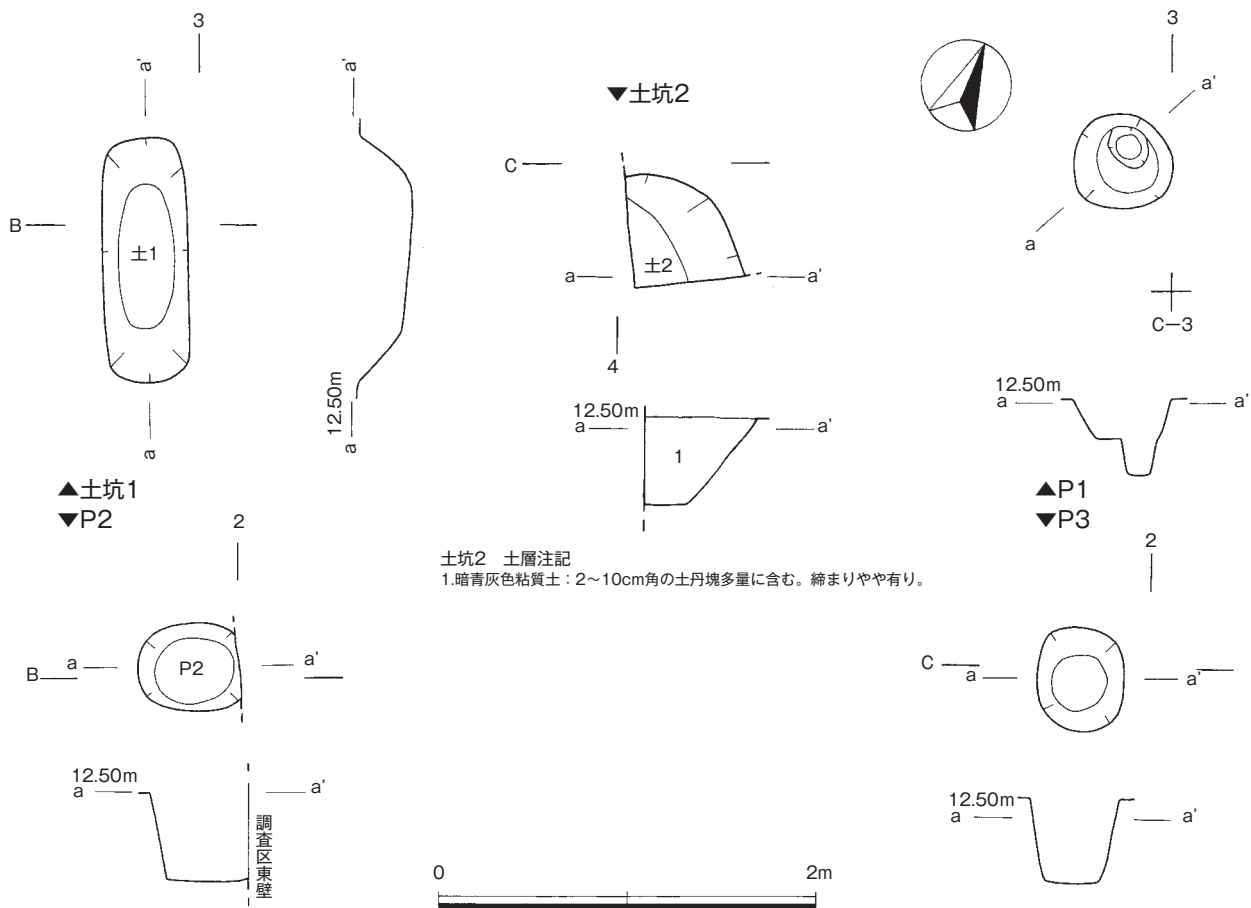


図21 第6面土坑・ピット

45cm、深さ30cmで断面船底形の掘り方を呈する。覆土は炭化物やや多く、拳大の土丹塊や炭化ここに物を多量に含む茶褐色粘質土の単一層が堆積しており、遺物はかわらけ細片が多く、図示できたのが図22-1のロクロ成形のかわらけ大皿、背高で薄手器壁の内湾した器形の資料だけである。

土坑2：調査区南西隅に位置し、掘り方の大半が調査区外へ拡がり全容は不明である。確認した平面径60cm以上、深さ48cm、覆土は2～10cm角の土丹塊多量に含む暗青灰色粘質土である。かわらけ細片だけで図示可能な遺物はない。

P1：C-3杭北側に位置した二段掘りの柱穴様ピットである。掘り方は上段がほぼ円形の径50cm、深さ22cmで平らな底面、底面北端の下段掘り込みは径26cm程、生活面からの深さ47cmであり、土層観察から考えて新旧関係ではなく同一時期の開削である。図示可能な遺物はみられない。

P2：B-2杭に位置し、調査区壁に一部かかり全容不明である。掘り方は楕円形、おおきさが長径52cm以上、深さ50cmで締りのない茶褐色粘質土、遺物はかわらけ細片だけである。

P3：調査区南東隅に位置した柱穴様のピットである。形状は楕円形を呈した長径55cm、短径46cm、深さ45cmの掘り方である。覆土は締りの弱い暗茶褐色弱粘質土、遺物は2のロクロ成形の小型内折れかわらけ、3が瓦質の鉢形火鉢、4が常滑窯片口鉢I類である。

第6面遺構外出土遺物：図22-5～18はロクロ成形のかわらけ皿である。小型は5の背高気味で薄手器壁の資料以外、背低のやや内湾した器形である。10の中型、11～18の大型は背高の薄手気味の器壁で内湾した器形になる。舶載陶磁器は19の青白磁梅瓶の蓋と20の褐釉の長胴壺、21は瀬戸卸皿、22～

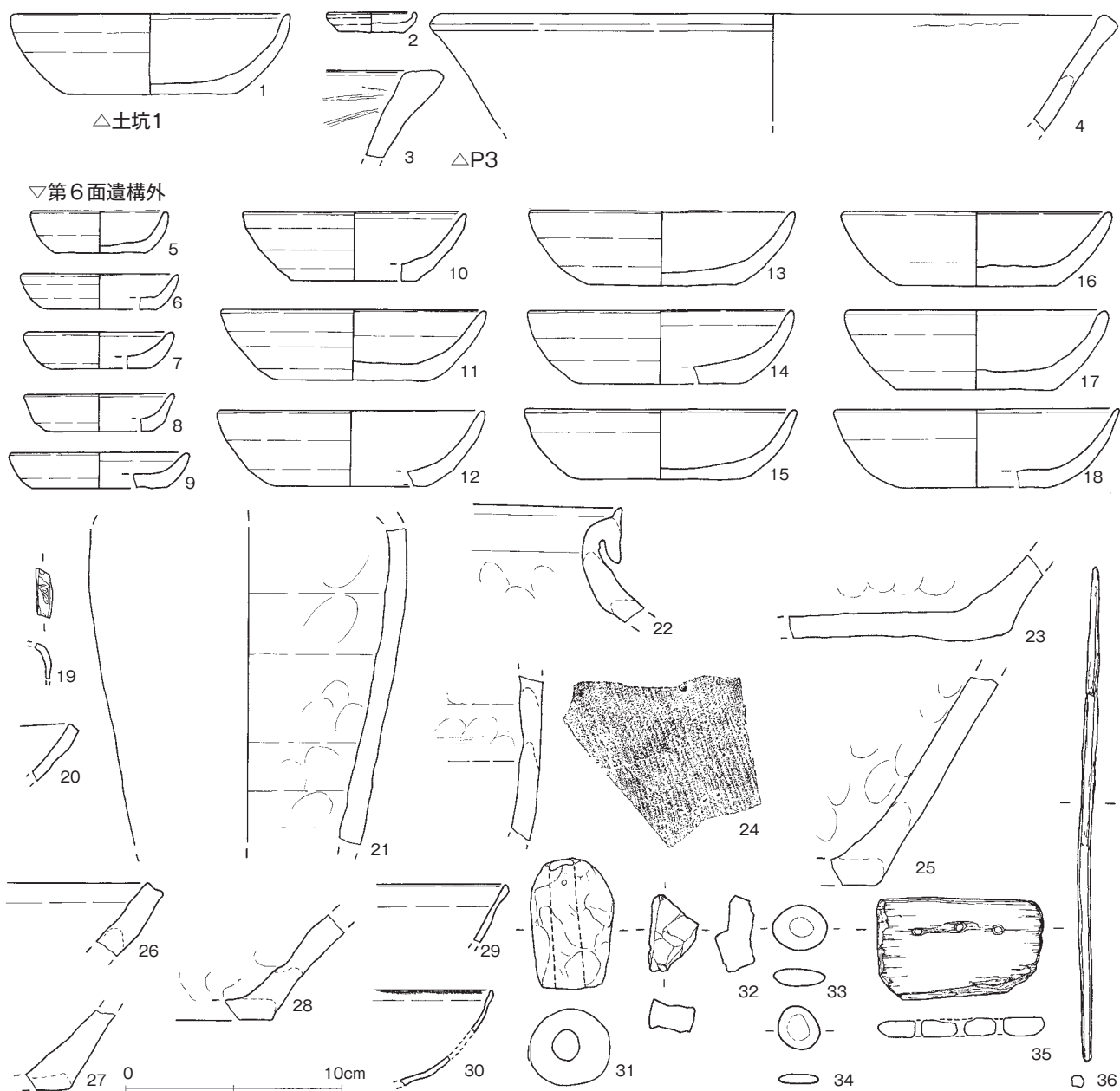


図22 第6面遺構・遺構外出土遺物

28は常滑窯の甕・片口鉢Ⅱ類、29が東美濃窯系山茶碗、30が瀬戸内系土器碗である。31はかわらけ質土錘、32が火打石、33・34が基石の黒、35・36が木製品で箸と不明品である。

7. 第7面の遺構と遺物 (図23～27)

第6面調査時点で表土からの掘削深度が2.2mを超えており、第7面の調査では壁面崩落の危険を避けるために安全を考慮し、範囲を縮小して調査を実施することにした。第6面を構成していた厚さ20cm程の地形層(8層)を除くと、10・11層の破碎した拳大～人頭大の大小土丹塊やかわらけ細片・貝殻片・木片を含む厚さ約30cmの暗茶灰色粘質土が確認され、それを除去して表出したのが拳大の土丹塊を多量に混入し、少量の木片・貝殻片を含む黒褐色粘質土の遺構を伴う生活面を検出した。海拔高12.05m前後を測る。

検出した遺構は土坑3基、柱穴様のピット8穴、埋設曲物などが検出された。注目されるのは埋設曲物内からさし銭のように80枚以上の銅銭が重なった状態で出土している。遺物はかわらけをはじめ、

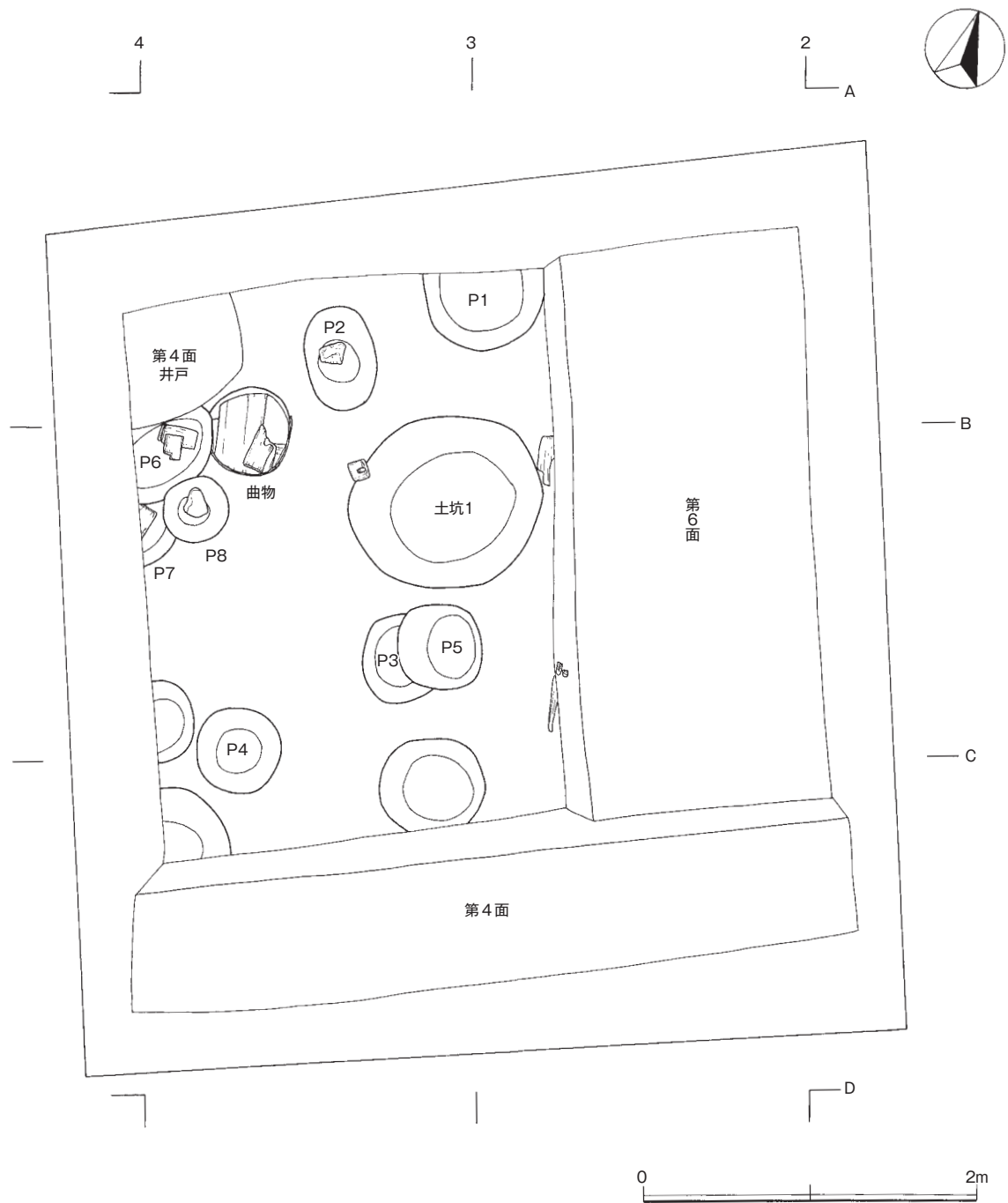


図23 第7面全測図

青磁・白磁の碗皿、常滑窯の甕・片口鉢、石・木製品などが出土している。

土坑1：B-3杭の南隣に位置する。形状は円形を呈し、大きさは径110cm、深さ25cmと浅めで断面逆台形の掘り方を呈する。覆土は三層から構成されており、上層の1層が明茶褐色粘質土で木製品や木片を多量に含んだ有機物腐蝕土、2層が藁状の繊維質を多く含む明茶灰色の腐蝕土、下層の3層が拳大土丹塊や有機物腐蝕土ブロックを混じえた明茶灰色土である。

出土遺物は図25-1が小型のロクロ成形かわらけで背低の薄手器壁で開いた器形、2は白磁口元皿で口唇部の釉薬を欠き取りもの。細片だけであったが、掘り方の北端上に馬歯が1点出土した。3～6の木製品は3・5が箸で両端を細くなるように削り面取りしたもの、所謂利休箸である。4は上側を欠失しているが、端が細くなるよう丸棒状に面取り加工した菜箸と考えられもの、6は曲物の底板を再加工し

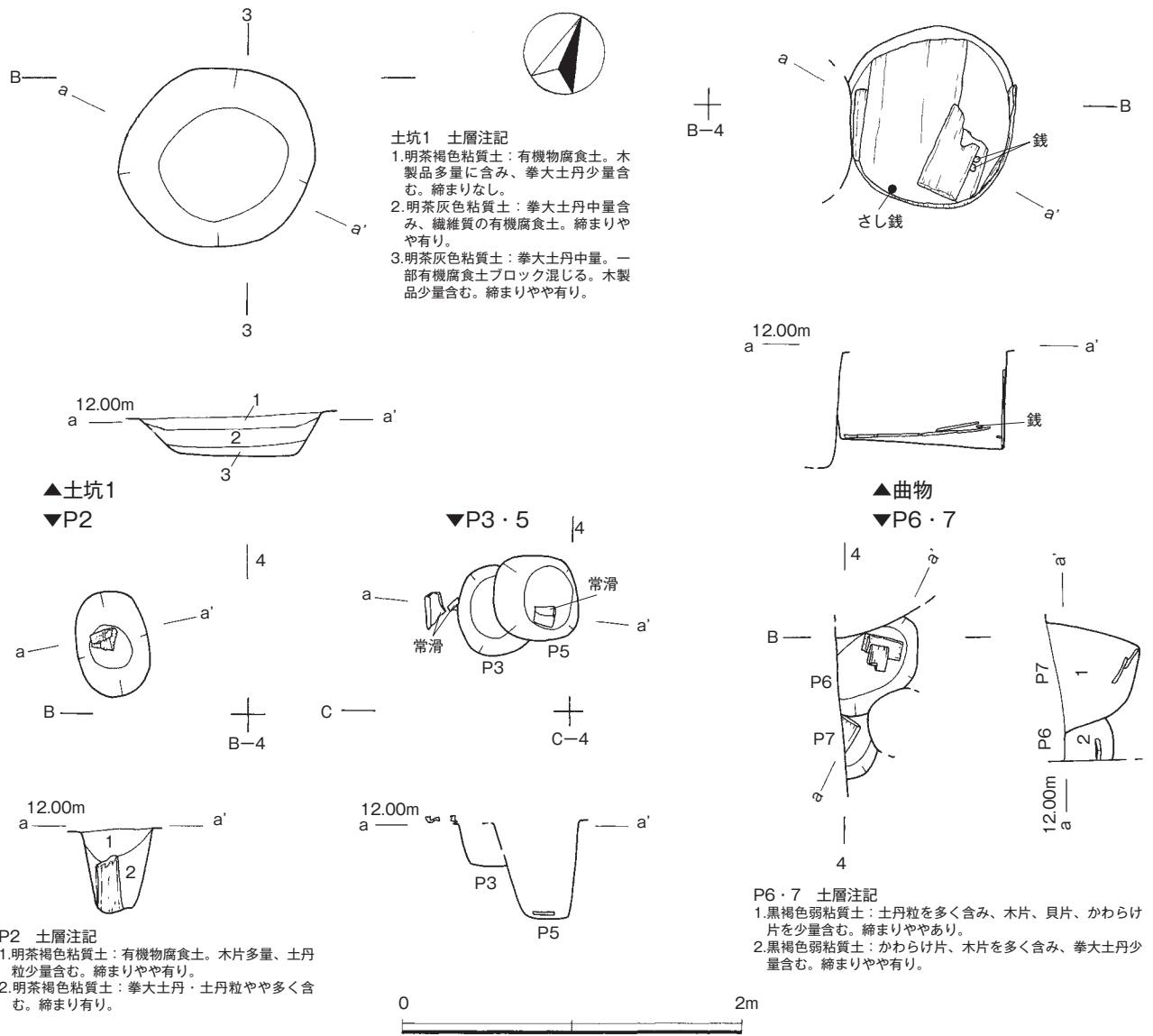


図24 第7面土坑・ピット

ている。

土坑2：C-3杭南隣に位置し、一部調査区壁にかかる。形状は円形を呈し、大きさは径60cm、深さ38cmで平らな底面の掘り方である。覆土は土丹粒・かわらけ細片・有機物腐蝕土ブロックを含む粘質土、良好な遺物は出土していない。

土坑3：B-3杭北側に位置し、調査区外へ拡がっている。円形状と思われ、大きさは東西径72cm、南北径50cm以上、深さ35cmの断面逆台形状を呈し、覆土は土丹粒や木片を含んだ暗茶褐色粘質土である。かわらけ細片だけで図示可能な遺物はない。

埋設曲物：調査区北西に位置し、P6により西端が削平されていた。曲物は径57cm、側板残存高約25cmが確認され、それを埋設した掘り込みは径70cm、深さ30cm程の曲物よりも一回り大きな掘り方に据えていた。図24に示した銅銭が曲物内南端でさし銭状態（図版7-f）で発見され、さらに底板上にも2枚が出土した。このような曲物を埋設した事例としては、市内では鎌倉駅西口に近い諏訪東遺跡で竪穴建物内の底面に曲物2個が並んで検出された例がある（斎木秀雄ほか 1985『諏訪東遺跡』同遺跡調査会）。

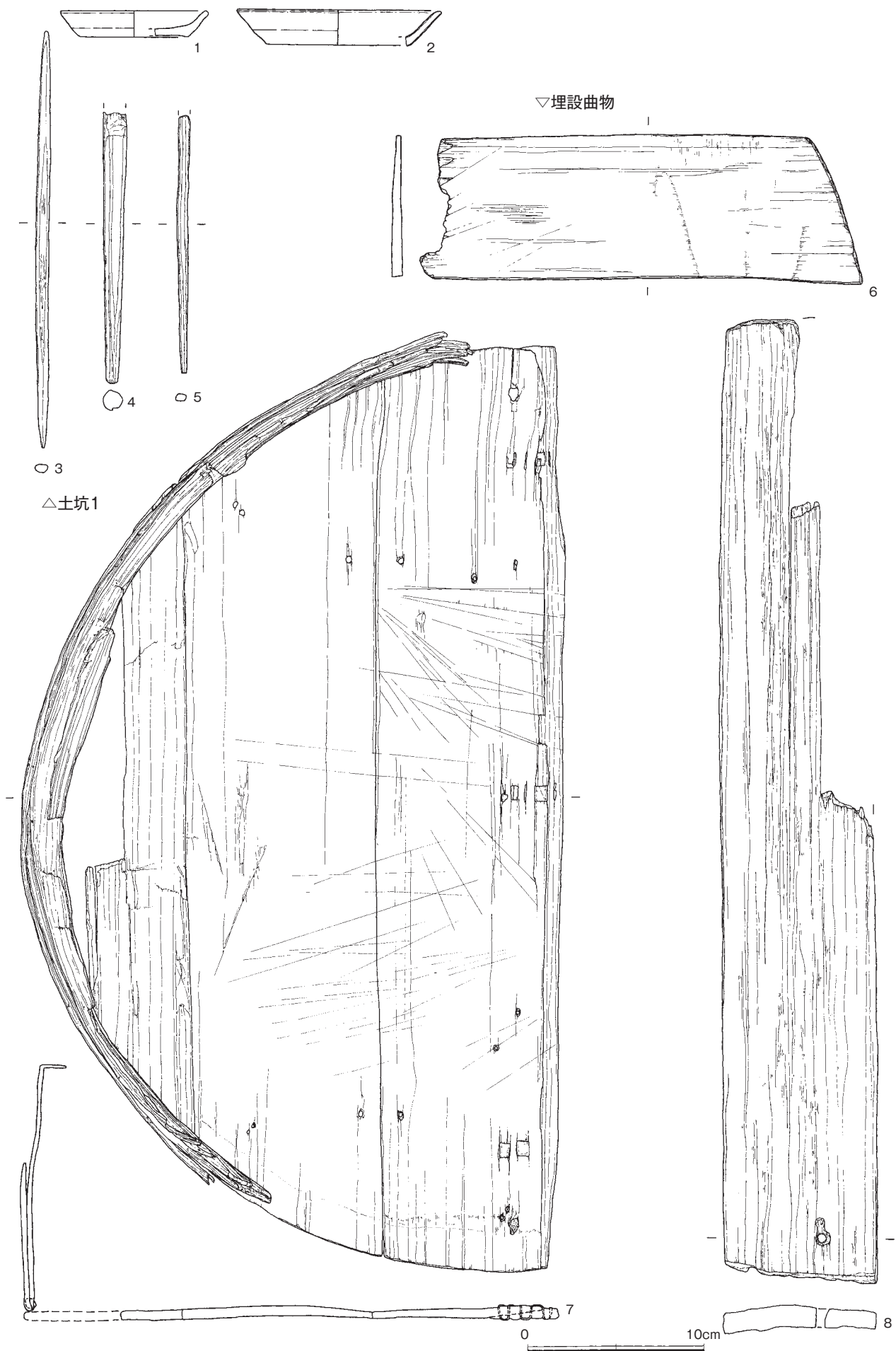


图25 第7面土坑·曲物出土遺物

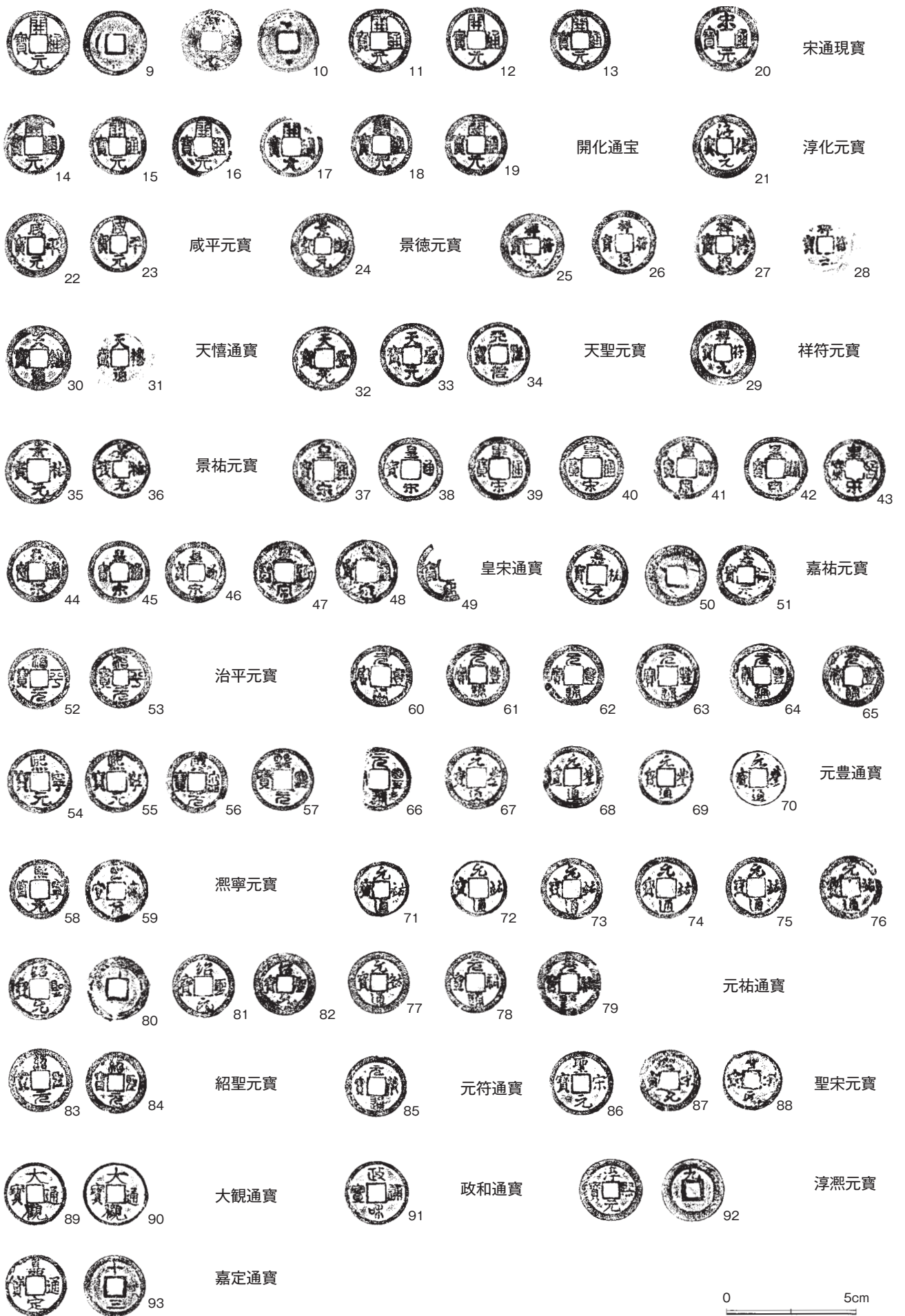


図26 第8面曲物出土さし銭

出土遺物を見ると、7の曲物が厚さ1cmの底板は中央で二枚の板を桜皮紐で継ぎ合わせた作りのものである。側板は厚さ5mmの柂目の薄板材を用い、接合部を桜の皮で縫い合わせており、内面には折り曲げ易くする刃物による縦位の切り込みを施している。

銅銭は図版7出土状況写真のようにさし銭状態で83枚、さらに底板上で2枚が発見され、合計85点が出土している。表2のように銭種別出土点数は以下のとおりである。開元通寶（唐 621年）11点、宋通元寶（北宋 960年）1点、淳化元寶（北宋 990年）1点、咸平元寶（北宋 998年）2点、景德元寶（北宋

表2 埋設曲物出土銭の名称・年代別点数表

	個数	初鑄年		個数	初鑄年		個数	初鑄年		個数	初鑄年
開元通寶	11	621	天禧通寶	2	1017	治平元寶	2	1064	聖宋元寶	3	1101
宋通元寶	1	960	天聖通寶	2	1023	熙寧元寶	5	1068	大觀通寶	2	1107
淳化元寶	1	990	天聖元寶	2	1023	元豐通寶	11	1078	政和通寶	1	1111
咸平元寶	2	998	景祐元寶	2	1034	元祐通寶	9	1086	淳熙元寶	1	1174
景德元寶	1	1004	皇宋通寶	13	1038	紹聖通寶	5	1094	嘉定通寶	1	1208
祥符元寶	5	1009	嘉祐通寶	2	1056	元符通寶	1	1098			

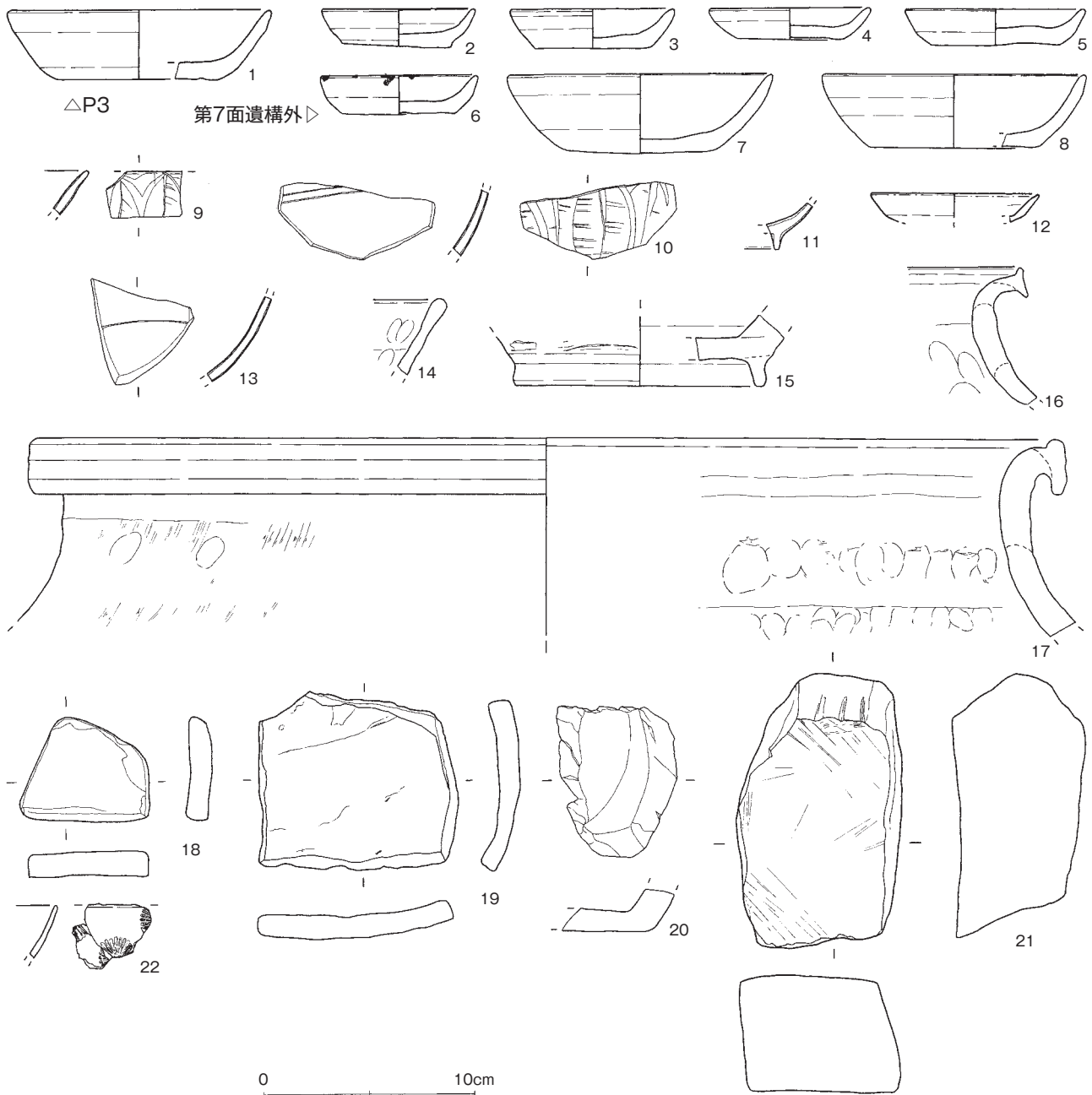


図27 第7面ピット・遺構外出土遺物

1004年) 1点、祥符元寶(北宋 1009年) 5点、天禧通寶(北宋 1017年) 2点、天聖通寶(北宋 1023年) 2点、天聖元寶(北宋 1023年) 2点、景祐元寶(北宋 1034年) 2点、皇宋通寶(北宋 1038年) 13点、嘉祐通寶(北宋 1056年) 2点、治平元寶(北宋 1064年) 2点、熙寧元寶(北宋 1068年) 5点、元豐通寶(北宋 1078年) 11点、元祐通寶(北宋 1086年) 9点、紹聖元寶(北宋 1094年) 5点、元符通寶(北宋 1098年) 1点、聖宋元寶(北宋 1101年) 3点、大觀通寶(北宋 1107年) 2点、政和通寶(北宋 1111年) 1点、淳熙元寶(南宋 1174年) 1点、嘉定通寶(南宋 1208年) 1点が出土した。確認した錢種は23種、時代的には唐代の開元通寶が1種、北宋代が最古の宋通元寶～最新の政和通寶までの時期(西暦 960～1111年)20種、南宋代の淳熙元寶・嘉定通寶の2種を確認した。裏面(背文)には開元通寶に「俯月」・「月星」などの記号、また南宋番銭にあたる淳熙元寶に「九」、嘉定通寶に「十三」の元号をなす数字がみられた。

P2 : B - 3杭北西側で埋設曲物に近接した位置で柱痕を残す柱穴が検出された。平面形は楕円形を呈し、長径63cm、短径43、深さ52cmで平らな底面には15×12cm角の柱痕が据えられていた。覆土は上層が明茶褐色粘質土の有機物腐蝕土、下層が拳大の土丹塊を多く含む締めりのあるもので、図示可能な遺物はみられなかった。

P3・5 : C - 3杭北隣に位置し、新旧関係はP3が壊され古い遺構である。P5は平面形が隅丸方形状を呈し、長さ50cm前後、深さ60cmで掘り方底面に常滑甕片が礎版代わりに据えられていた。覆土は締めりのない茶褐色粘質土でかわらけ細片が出土しただけである。P3は楕円形の掘り方で長径55cm、短径35cm以上、深さ34cmの浅いもので黒褐色粘質土が充填土であった。遺物は図27-1のロクロ成形かわらけの大皿である。

P6・7・8 : B - 4杭南隣に位置する。P6・7は調査区壁にかかり、井戸1やP8に一部壊された柱穴様のピットである。P8は円形を呈し、径40cm、深さ38cmで底面に長さ20cm程の土丹塊が見られた。P6は楕円形の掘り方と思われ、長径68cm・短径50cm以上、深さ55cmを測り、掘り方の底面北寄りには重なった2枚の礎板が据えられていた。P7は深さ30cmで掘り方下位に礎版1枚がみられた。覆土は締めりの弱い茶褐色粘質土である。図示可能な遺物はいずれの柱穴からも出土していない。

第7面遺構外出土遺物 : 図27-2～8はロクロ成形のかわらけ皿である。小型の資料は背低で底部から外反気味に立上がり、中位で内湾傾向になる器形である。大型は背高気味の厚手器壁で内湾した器形になる。舶載陶磁器は9・10が青磁蓮弁文碗、11が畳付露胎で三角高台の無文碗、12・13が白磁口兀碗皿である。14・15は常滑窯の片口鉢I・II類で16・17が甕の口縁部片、18・19が甕転用の磨り陶片である。20は滑石製石鍋、21は砥石で伊予産の中砥であろう。22は漆器碗で黒漆地に朱漆により菊花文スタンプで施文している。

8. 第7面下トレンチ (図28)

第7面の調査を終了した時点で、掘削深度が表土から2.4mを過ぎて危険と判断された。そこで調査区西壁直下において中世基盤層(中世地山)の確認と、第4面で検出した井戸1の木枠や掘り方裏込め堆積土を観察する目的でトレンチを設定した。第7面構築土の12層は厚さ10～20cm程の黒褐色粘質土、その下は土丹粒を含むやや締めりのある黒褐色粘質土が15～20cmの薄い堆積土が確認され、その下から中世基盤層の黒褐色粘質土を検出することができた。中世地山面は海拔高11.80m前後、トレンチ内では海拔高11.50mまで確認した。

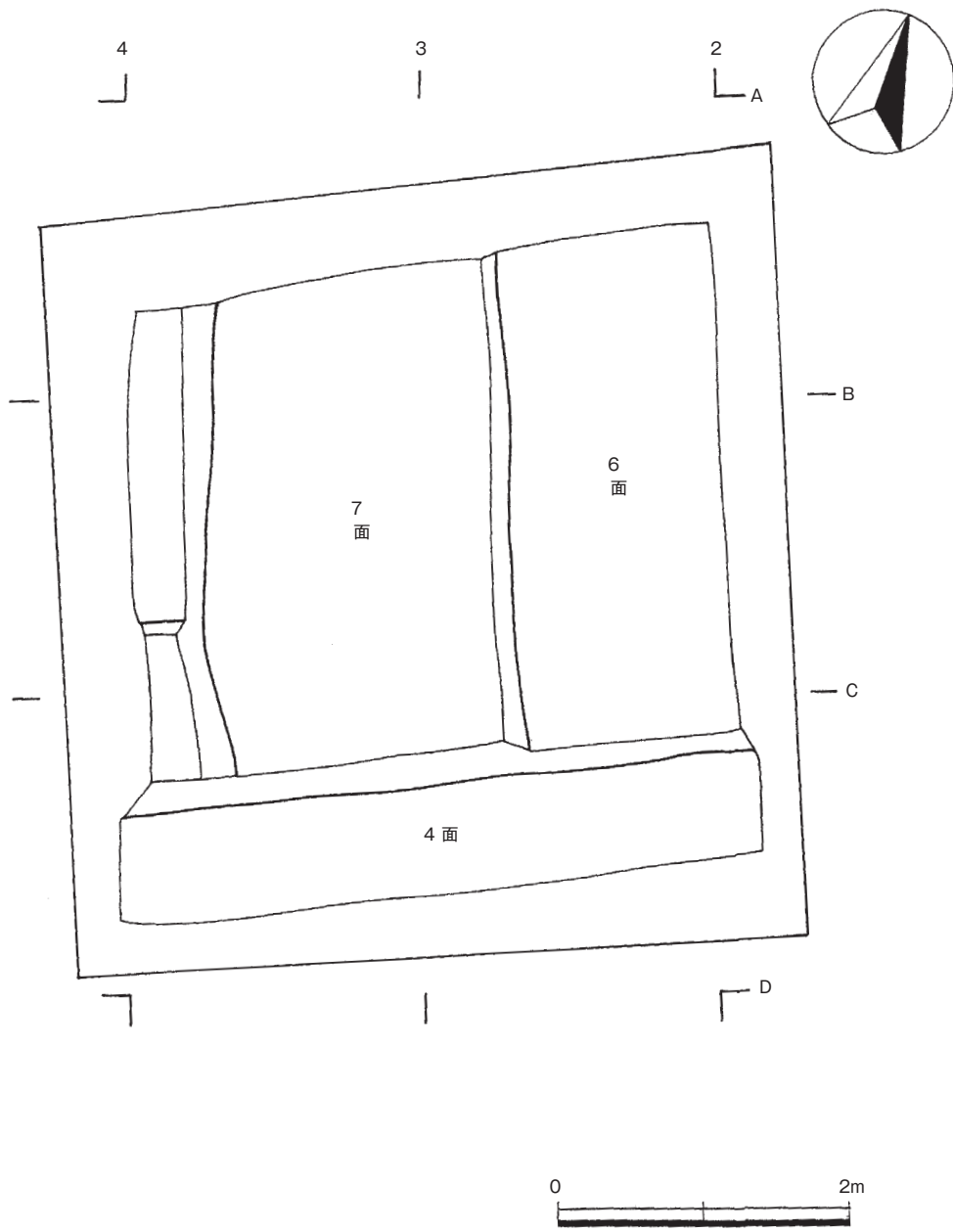


図28 第7面下トレンチ

表3 遺物観察表(1)

()は復元値

挿図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
			(cm)	(cm)	(cm)	
6-1	第1面土坑1	常滑 転用品	胴部片 長さ(4.9)幅(3.8)			f.磨り常滑 外面から内面にかけて丸く磨った痕跡外面器表を磨った痕跡
6-2	第1面土坑2	かわらけ	(8.0)	(5.3)	2.3	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
6-3	第1面土坑3	かわらけ	口縁～体部小片			a.ロクロ b.微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好 f.口唇部外面が打ち欠かされている
6-4	"	瀬戸 皿	底部小片			a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.黄灰色 微砂 白色粒 d.灰緑色 底部:重ね焼き時の自然釉 内部:刷毛塗りやや薄手 f.古瀬戸中期
6-5	第1面土坑4	かわらけ	(7.0)	(4.8)	2.1	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 粗土 c.黄橙色 e.良好
6-6	"	かわらけ	(8.1)	(4.8)	2.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 小石粒 粗土 c.黄橙色 e.良好
6-7	"	砥石	残存長37×幅26×厚さ13			f.中砥 上野産 流紋岩質凝灰岩 表裏使用痕あり 側面ノコ状の切り離し痕
6-8	第1面P-1	瀬戸 卸皿	(11.8)	(5.0)	2.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 内底面卸目浅い b.にぶい黄緑 石英 良土 d.灰白色 やや厚手施釉 e.良好 硬質 f.古瀬戸後期Ⅲか
6-9	第1面P-5	かわらけ	(6.1)	(3.7)	1.9	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
6-10	第1面P-12	かわらけ	(12.3)	(8.0)	3.4	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粉質 やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い f.打ち欠き痕
6-11	第1面P-14	かわらけ	6.3	3.7	2.4	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.灯明皿 打ち欠き痕有り
6-12	"	かわらけ	6.5	4.1	2.1	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.灯明皿 打ち欠き痕有り
6-13	第1面P-18	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片 残存長50×幅60×厚さ12			a.輪積技法 b.黒褐色 白色粒 小石粒 c.黒褐色
6-14	第1面P-21	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片			a.輪積技法 b.灰色 白色粒多め 黒色粒 砂粒 やや粗土 c.灰褐色
6-15	第1面P-23	かわらけ	(6.9)	(3.7)	2.4	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
6-16	第1面P-25	砥石	残存長72×幅32×厚さ0.8			c.黄白色 f.仕上砥 京都鳴滝中山産 側面切り出し痕 表裏使用痕
6-17	"	鉄釘	残存長44×幅0.3×厚さ0.4			a.断面四角形の鍛造品
6-18	第1面P-31	かわらけ	(12.0)	(7.3)	3.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
6-19	"	滑石鍋 転用品	残存長34×幅68×厚さ2.3 穿孔径0.4			a.鏝部を転用しようとした加工途中のもの 取手部分に径4mm程の穿孔あり 鏝内面部分に深い切り込み痕多い
6-20	"	瀬戸 卸皿	底部片 底径8.0			a.ロクロ 外底回転糸切痕 内底へラ状工具による卸目 b.黄白色 精良土 d.内面に灰緑色の釉垂れ e.堅緻 f.使用痕跡なし 古瀬戸中期
6-21	第1面P-32	石製品 漆磨き	長さ5.5×幅1.6×厚さ0.9			f.長崎産対馬石 全体的に磨滅 そのうち一面は特に顕著であり、他三面はノコ状製品で削り出した加工痕がある 拡大鏡でみると漆が石の隙間に入り込んでいるのが確認できる
6-22	第1面P-33	常滑 片口鉢Ⅱ類	底部小片			a.輪積技法 b.暗灰色 長石粒 砂粒 c.器表:暗赤褐色 底部器表:橙色 e.良好 f.外底砂目底 内面:使用により摩耗し滑らか 外面:へら削りによる調整
6-23	第1面P-38	かわらけ	(13.4)	(7.4)	3.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
6-24	第1面P-39	かわらけ	(6.2)	(4.1)	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粉質気味良土 c.橙色 e.良好
6-25	"	かわらけ	11.0	6.7	3.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粉質やや粗土 c.橙色 e.良好
6-26	第1面P-40	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁～体部片 口径(31.6)			a.輪積技法 b.橙色 長石粒 砂粒 c.器表:明茶褐色 e.良好 f.内面:下端に向かって使用による磨滅 外面:横ナデ後上端横位のへら削り 下端押頭調整
6-27	第1面遺構外	かわらけ	6.2	4.1	2.1	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 小径で厚手器壁 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 粉質気味良土 c.淡橙色 e.良好
6-28	"	かわらけ	6.4	4.2	2.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 厚手器壁で背高器形 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
6-29	"	かわらけ	(8.1)	4.7	2.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 厚手器壁 体部上半外反器形 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c.黄橙色 e.良好
6-30	"	かわらけ	(8.2)	(5.8)	2.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 厚手器壁 体部上半外反気味器形 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c.橙色 e.良好
6-31	"	かわらけ	(8.7)	5.8	2.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 厚手器壁 口縁部外反気味器形 体部内汚れあり b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 粗土 c.淡橙色 e.やや不良 f.口唇部内外に油煙煤付着
6-32	"	かわらけ	(12.1)	6.7	3.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 細板状圧痕 体部上半外反気味器形 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粉質良土 粗土 c.淡橙色 e.良好
6-33	"	白磁 皿	口縁部小片			b.灰白色 精良堅緻 d.灰白色不透明 内外に厚く施釉 気泡多く貫入る
6-34	"	瀬戸 天目茶碗	口縁部片 口径(12.2)			a.ロクロ 口縁部垂直から外反気味に立ち上る b.黄味灰白色 良土 d.黒褐色釉の地で口縁部が茶褐色 e.良好

表4 遺物観察表(2)

()は復元値

挿図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
			(c m)	(c m)	(c m)	
6-35	第1面遺構外	瀬戸 緑釉小皿	口縁部小片			a.ロクロ 口縁部外反気味 b.灰白色 良土 d.灰緑色透明 細かな貫入多し 口縁部内外施釉 e.良好
6-36	"	瀬戸 灰釉平碗	(16.2)	—	—	a.ロクロ 口縁部外反気味 ロクロ目痕 b.灰白色 良土 d.灰緑色透明 細かな貫入多し 内面～外面中位まで施釉 e.良好 f.古瀬戸後期Ⅲか
6-37	"	瀬戸 香炉類	底部小片			a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.灰白色 白色粒 砂粒 良土 d.黄褐色～黒褐色外側に薄く施釉 e.良好 硬質 f.外面に菊花スタンプ印
6-38	"	瓦質 火鉢	口縁～胴体部片			f.内外面所々剥離著しい 一条沈線にはさまれてスタンプ文様帯有り
6-39	"	滑石スタンプ	長さ2.2×幅3.4×厚さ2.1			a.表面だけでなく両サイドもスタンプにしている
6-40	"	砥石	残存長25×幅22×厚さ0.7			c.灰白色 f.仕上げ
6-41	"	火打石	残存長40×幅19×厚さ1.2			b.チャート系 f.全体的に打撃痕
6-42	"	火打石	残存長34×幅1.7×厚さ1.6			b.石英系 f.全体的に打撃痕
6-43	"	鉄釘	長さ7.9 φ0.7			a.断面歪んだ円形
6-44	"	鉄釘	残存長58×幅0.7×厚さ0.3			a.断面四角形
9-1	第2面土坑1	瀬戸 入子	底部片 底径(3.0)			b.灰色 精良土 e.良好 f.釉なし
9-2	"	火打石	残存長33×幅2.6×厚さ0.8			b.石英 f.製作途中の剥片か 加工痕なし
9-3	第2面P-1	青磁 酒会壺	高台部片 5.0×9.5 底径(16.1)			a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.灰白色 白色粒 砂粒 良土 d.黄褐～黒褐色外側に薄く施釉 e.良好 硬質 f.底部は別作りで落とし込む
9-4	第2面P-2	かわらけ	(13.8)	(8.9)	3.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 赤色粒 土丹粒 良土 c.橙色 e.良好 f.口縁一部を打ち欠き加工
9-5	第2面P-6	かわらけ	(6.7)	(4.3)	2.3	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 良土 c.橙色 e.良好
9-6	第2面P-10	北部系 山茶碗	口縁部片 残存長30×幅1.7×厚さ0.3			b.淡黄色 砂粒極少量 e.良好
9-7	"	かわらけ質製 品	胴部片 残存長50×幅3.5×厚さ0.8			b.微砂 赤色粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
9-8	第2面P-11	かわらけ	(14.3)	(8.4)	2.9	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 良土 c.橙色 e.良好
9-9	第2面遺構外	かわらけ	(7.3)	(5.0)	2.1	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 良土 c.橙色 e.良好
9-10	"	かわらけ	(6.9)	(3.9)	2.9	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
9-11	"	かわらけ	(11.6)	(6.6)	3.3	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 良土 c.橙色 e.良好 f.口縁一部を打ち欠き加工
9-12	"	かわらけ	(13.9)	(9.0)	2.9	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 良土 c.黄橙色 e.良好
9-13	"	かわらけ	(15.5)	(10.0)	3.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 黒色粒 土丹粒 良土 c.橙色 e.良好
9-14	"	青白磁 合子	底部小片			b.灰白色 微砂少量 精良堅緻 d.水青色透明 薄手施釉
9-15	"	青磁 酒会壺蓋	残存長5.8×幅5.8 ×厚さ0.4～0.9			b.淡灰色 微砂 やや粗土 d.淡緑灰色不透明 薄手施釉 f.両面共に摩擦を受けザラつきツヤなし状態
9-16	"	瀬戸 天目碗	底径(4.1)			b.黄灰色 白色粒 砂粒 良土 c.黒褐色 やや厚め
9-17	"	瓦質 火鉢	推定口径(17.4)			b.灰褐色 白色粒 黒色粒 土丹粒 砂粒 粗土 c.黒色 くすべ状
9-18	"	瓦質 香炉	推定底径(7.0)			b.灰白色 白色粒 砂粒 やや粗土 c.黒灰色 くすべ状
9-19	"	骨製品 筭	残存長90×幅1.7×厚さ0.4			f.中央部形にそって削られている
9-20	"	鉄釘	残存長60×幅0.6×厚さ0.6			a.断面四角形
12-1	第3面 P-イ	かわらけ	(7.8)	(5.0)	2.3	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 良土 c.黄橙色 e.良好
12-2	"	鉄釘	残存長84×幅1.1×厚さ0.8			a.断面四角形
12-3	第3面 P-ロ	かわらけ	(12.8)	(6.5)	2.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 黒色粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
12-4	第3面 建物範囲内	かわらけ	(6.8)	(4.2)	1.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 良土 c.黄橙色 e.良好
12-5	"	かわらけ	(7.7)	(4.7)	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 赤色粒 良土 c.黄灰色 e.良好

表5 遺物観察表(3)

()は復元値

挿図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
			(cm)	(cm)	(cm)	
12-6	第3面 建物範囲内	かわらけ	(7.8)	(5.3)	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 良土 c.橙色 e.良好
12-7	"	かわらけ	(7.7)	4.8	2.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 良土 c.黄灰色 e.やや甘い f.内外ともに 明暗くつきり分かれ黒色化した部分あり
12-8	"	かわらけ	(7.9)	(5.1)	2.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 良土 c.黄橙色 e.良好
12-9	"	かわらけ	(8.8)	(6.4)	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 良土 c.黄橙色 e.良好
12-10	"	かわらけ	(10.8)	(7.0)	2.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 土丹粒 良土 c.黄灰色 e.良好
12-11	"	かわらけ	(11.8)	(6.0)	3.4	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 良土 c.橙色 e.良好
12-12	"	かわらけ	(13.6)	7.5	3.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 黒色粒 土丹粒 やや粗 土 c.橙色 e.良好
12-13	"	かわらけ	(13.9)	(8.0)	3.3	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 良土 c.橙色 e.良好
12-14	"	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片 残存長60×幅70×厚さ11			a.輪積技法 b.赤褐色 白色粒 黒色粒 石英少量 c.赤褐色
12-15	"	硯	残存長8.4×幅3.7 ×厚さ0.9～1.4			a.縁に2タイプの線模様が付いている b.黒色粘板岩 c.黒色 f.接合した右のパー ツは第2面土坑1より出土
12-16	"	砥石	残存長38×幅18×厚さ0.4			f.仕上げ 京都鳴滝産 表面に使用痕あり
12-17	"	砥石	残存長44×幅46×厚さ0.9			f.中砥 伊予産 流紋岩質粗粒凝灰岩 表裏側面全てに使用痕あり
12-18	"	鉄釘	残存長60×幅0.7×厚さ0.7			a.断面四角形
12-19	第3面土坑1	鉄釘	残存長56×幅0.8×厚さ0.9			a.断面四角形
12-20	第3面遺構外	常滑 転用品	残存長72×幅54×厚さ14			f.内面以外摩耗あり
12-21	"	瀬戸 折縁深皿	口縁部片 残存長4.5×幅5.0×厚さ0.7			b.黄灰色 白色粒 砂粒 良土 d.灰釉 灰白色 e.良好
12-22	"	かわらけ	7.4	5.1	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好 f.口縁部故意に削られている
12-23	"	かわらけ	(7.5)	(3.4)	2.1	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好 f.灯明皿
12-24	"	かわらけ	7.6	4.6	2.3	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
12-25	"	かわらけ	(13.1)	(7.9)	2.9	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄 橙色 e.良好
12-26	"	かわらけ	(13.7)	(8.8)	3.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 赤色粒 黒色粒 土丹粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
12-27	"	かわらけ	(13.7)	(7.7)	3.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 赤色粒 黒色粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
12-28	"	かわらけ	(13.7)	(9.8)	3.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄 橙色 e.良好
12-29	"	白磁 広口壺	口縁部片 口径(6.9)			b.白色 精良堅緻 d.緑味灰白色透明 極薄く施釉 口縁部露胎 f.二次焼成受け外面の 釉薬・文様不鮮明
12-30	"	黒褐釉壺	口縁部片 口径(9.0)			b.暗赤褐色 精良堅緻 d.二次焼成を受けた為か鉄釉か黒褐色の釉
12-31	"	瀬戸 折縁深皿	口縁部小片			b.黄灰色 白色粒 良土 d.灰緑色透明釉刷毛塗り 斑状に釉薬 e.良好 f.古瀬戸中期
12-32	"	白かわらけ質 皿	口縁部片			b.微砂 粉質良土 c.灰白色 e.良好
12-33	"	石硯	残存長4.5×幅2.5×厚さ0.9			a.表面：線刻で文様彫る 内側面：横方向の削り 側縁：横方向削りの痕に縦方向の 削り 側縁底部は面取りのように縦方向に削られる b.暗灰褐色粘板岩 f.鳴滝産岩王 子 筆置きか
12-34	"	石硯	残存長5.0×幅8.7×厚さ1.1			a.表面全て剥離 側縁・裏面は刃物で細かく削った痕が見られる b.暗灰褐色粘板岩 f.鳴滝産岩王子か
15-1	第4面土坑1	かわらけ	(7.9)	(4.6)	2.0	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 黒色粒 やや粗土 c.黄 橙色 e.良好 f.灯明皿 剥離あり
15-2	"	滑石スタンプ	長さ44×幅44×厚さ10			a.円形板状 穿孔の痕跡あるが裏面剥離
15-3	"	砥石	残存長6.5×幅3.0×厚さ0.6			b.流紋岩質細粒凝灰岩 c.黄色 f.仕上げ 京都鳴滝産 側面削り出し痕 表面使用痕 裏 面剥離
15-4	第4面土坑3	かわらけ	(10.8)	(5.8)	3.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 黒色粒 土丹粒 やや粗 土 c.橙色 e.良好
15-5	"	かわらけ	(7.3)	(3.9)	2.1	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 黒色粒 良土 c.黄橙色 e.良好

表6 遺物観察表(4)

()は復元値

挿図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
			(cm)	(cm)	(cm)	
15-6	第4面土坑4	砥石	長さ(3.7)×幅1.5×厚さ(6.5)			f.仕上砥 京都鳴滝産 表裏側面全てに使用痕あり
15-7	第4面P-1	かわらけ	(12.3)	(8.0)	3.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 黒色粒 やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
15-8	第4面井戸1	褐袖 茶入	底部片 底径(2.5)			b.暗灰色 精良堅緻 d.暗茶色
15-9	"	滑石製品	長さ(4.0)×幅(2.6)×厚さ(1.0)			f.用途不明
15-10	"	木製品	縦2.7×横4.0×厚さ0.8			a.同形状の2個体を合わせて成立する 浮きのようなものか
15-11	"	木製品	長さ31×幅9.9×厚さ6.8			f.全体的に表面の損傷著しい 用途不明
15-12	"	井戸 側板	残存長41.3×幅30.7×厚さ1.3～2.1			f.木製部材転用
15-13	第4面遺構外	かわらけ	(7.8)	(3.8)	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
15-14	"	かわらけ	(7.8)	(4.7)	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
15-15	"	かわらけ	(7.7)	(5.6)	1.4	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
15-16	"	かわらけ	(7.2)	5.8	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
15-17	"	かわらけ	(7.2)	5.3	1.9	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 黒色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
15-18	"	かわらけ	(7.7)	(5.6)	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
15-19	"	かわらけ	(7.8)	4.6	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
15-20	"	かわらけ	(7.9)	(4.2)	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
15-21	"	かわらけ	(11.6)	(6.6)	3.0	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.灯明皿
15-22	"	白磁 口元皿	口縁～体部小片			b.乳白色 精良堅緻 d.淡青灰色半透明 口唇部露胎
15-23	"	青白磁 梅瓶	体部小片			b.灰白色 精良堅緻 d.青白色半透明 薄手施釉 気泡多い 貫入あり 一部火を受ける
15-24	"	青白磁 梅瓶	体部小片			b.灰白色 精良堅緻 d.青白色半透明 薄手施釉 気泡多い 貫入あり
15-25	"	瀬戸 折縁皿	底部片 底径(12.0)			a.外底回転糸切痕 外底面露胎 b.白灰色 精良土 d.灰緑色透明 表面光沢強い e.良好 硬質 f.内底面に目痕あり 貫入あり 線刻5本入る
15-26	"	瀬戸 折縁皿	底部片 底径(10.0)			a.外底回転糸切痕 外底面露胎 外底縁に釉溜り b.黄白色 良土 d.灰緑色透明 表面光沢強い e.良好 硬質 f.内底面に目痕あり 貫入あり
15-27	"	常滑 甕	口縁部片 縁帯幅(2.3)			a.輪積み技法 内面指頭痕 内外面ナデ有り b.灰色 白色粒 長石 c.暗褐色 d.口縁～外面体部に白緑色の自然降灰 e.良好 硬質
15-28	"	常滑 甕	口縁部片 縁帯幅(4.8)			a.輪積み技法 内面指頭痕 内外面ナデ有り b.灰色 白色粒 長石 c.暗赤褐色 d.口縁～外面体部に白黄緑色の自然降灰 e.良好 硬質
15-29	"	北部系 山茶碗	口縁部小片			a.内外面ナデ有り b.白色粒 良土 c.白 e.良好 f.東濃型
15-30	"	常滑 片口鉢Ⅱ類	(36.0)	(17.2)	11.0	a.内外面ナデ有り b.灰色 白色粒 長石 小石粒多め 粗土 c.暗赤褐色
16-31	"	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片			a.内外面ナデ有り b.暗灰色 白色粒 長石 c.暗褐色
16-32	"	磨り常滑	長さ10.7×幅11.2×厚さ0.8～1.2			b.灰色 白色粒多め 小石粒 c.暗赤褐色 f.破断面に摩耗痕
16-33	"	土器質 火鉢	口縁～体部片			a.内外面ナデ有り b.灰色 白色粒 小石粒 粗土 c.橙色
16-34	"	土器質 火鉢	脚部片			b.灰色 白色粒 黒色粒 土丹粒 小石粒 粗土 c.橙色
16-35	"	砥石	残存長42×幅2.5×厚さ0.3			c.赤味のある灰白色 f.仕上砥 京都鳴滝産 表面に使用痕・剥離あり
16-36	"	砥石	残存長66×幅2.5×厚さ1.3			c.黄味かかった灰白色 f.中砥 上野産 流紋岩質粗粒凝灰岩 表裏と一側面に線刻あり
16-37	"	砥石	残存長6.3×幅3.7×厚さ0.5～1.2			c.橙色 f.仕上砥 京都鳴滝産 表面に剥離あり
19-1	第5面P-イ	伊勢系土鍋	(6.8)	(4.2)	2.0	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒多め 黒色粒 良土 c.黄灰色 e.やや甘い
19-2	"	鍔釜	鍔部片			b.暗淡橙色 粗い粉質 金雲母 c.淡橙色～暗灰色 f.煤付着
19-3	第5面P-ロ	常滑 甕	口縁部片			b.灰色 白色粒多め 黒色粒 c.灰色 d.口縁～外面体部に自然降灰 e.良好 硬質 f.中野編年7型式

表7 遺物観察表(5)

()は復元値

挿図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
			(cm)	(cm)	(cm)	
19-4	第5面土坑2	かわらけ	(7.8)	(4.4)	2.0	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 黒色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
19-5	第5面土坑3	常滑壺	肩部片			a.輪積み技法 内面指頭痕 b.白色粒少量 砂粒 c.茶褐色 d.外面斑に自然降灰 e.良好 硬質
19-6	第5面P-2	瀬戸入子	口縁部小片			b.黄灰色 砂粒 e.良好 f.内面紅付着
19-7	第5面土坑4	かわらけ	7.1	4.7	2.1	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 黒色粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
19-8	"	鉄釘	残存長44×幅0.4×厚さ0.3			a.断面四角形
19-9	"	骨角製品 筭	残存長53×幅1.1×厚さ0.4			a.丁寧な刃物の削り調整 断面蛤型
19-10	第5面P-4	瀬戸入子	口縁部片 口径(10.8)			b.黄灰色 砂粒 e.良好 硬質 f.煤付着 内面摩耗している
19-11	第5面P-5	基石	長さ3.3×幅2.3×厚さ0.6			c.黒色 f.不整形
19-12	第5面遺構外	かわらけ	(7.5)	(4.8)	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 黒色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好 f.灯明皿
19-13	"	かわらけ	(7.9)	(5.4)	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 黒色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
19-14	"	かわらけ	(7.9)	(4.9)	2.1	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 c.黄橙色 e.良好
19-15	"	かわらけ	(8.7)	(6.5)	1.9	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 黒色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
19-16	"	かわらけ	(11.9)	(6.8)	2.9	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 黒色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
19-17	"	かわらけ	(12.7)	(7.0)	3.4	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒多め 黒色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
19-18	"	白磁壺	口縁～体部片 口径(5.3)			a.灰白色 精良堅緻 型作り 底部露胎 d.乳白色 薄手施釉 ピンホール有り f.蓮弁状の文様
19-19	"	北部系 山茶碗	口縁～体部片 底径(5.0)			a.ロクロ 底部～高台部片 貼付高台 粉殻痕あり b.灰色 黒色粒少量 良土 c.灰色 e.硬質 f.東濃型
19-20	"	瀬戸入子	口縁～体部片 口径(7.8)			b.黄灰色 白色粒極少量 砂粒 良土 e.良好 硬質 f.内面に紅付着
19-21	"	瀬戸 御皿	口縁部小片			b.黄灰色 白色粒極少量 良土 d.内外面斑に灰色の釉薬 e.良好 硬質
19-22	"	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片			a.輪積技法 b.灰色 砂粒 白色粒・小石粒多め c.内外面暗赤褐色 d.降灰部灰緑色の自然降灰
19-23	"	常滑 片口鉢Ⅱ類	底部片			a.輪積技法 b.灰色 砂粒 白色粒・小石粒多め c.内外面暗赤褐色 d.降灰部灰緑色の自然降灰
22-1	第6面土坑1	かわらけ	(12.8)	(8.0)	3.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
22-2	第6面P-3	内折れかわらけ	4.0	3.1	0.9	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 良土 c.橙色 e.良好 f.内折れかわらけ
22-3	"	瓦質火鉢	口縁部片			b.灰色 白色粒 砂粒 c.淡紅色 f.二次焼成受ける
22-4	"	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部片			b.明褐色 黒色粒 砂粒 c.明褐色 d.口縁～内面体部に自然降灰 f.内面摩耗
22-5	第6面遺構外	かわらけ	(6.2)	(4.2)	2.0	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 良土 c.黄灰色 e.やや甘い
22-6	"	かわらけ	(7.2)	(5.2)	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 良土 c.黄灰色 e.やや甘い f.灯明皿ではないが煤付着
22-7	"	かわらけ	(6.8)	(4.2)	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好
22-8	"	かわらけ	(7.9)	(5.0)	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 良土 c.黄橙色 e.良好
22-9	"	かわらけ	(8.4)	(6.2)	1.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
22-10	"	かわらけ	(10.2)	(6.0)	3.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
22-11	"	かわらけ	(12.2)	(7.0)	3.3	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
22-12	"	かわらけ	(12.2)	(6.9)	3.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c.黄橙色 e.良好
22-13	"	かわらけ	(12.1)	(6.9)	3.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
22-14	"	かわらけ	(12.1)	(8.0)	3.4	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
22-15	"	かわらけ	(12.4)	7.4	3.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好

表8 遺物観察表(6)

()は復元値

挿図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
			(cm)	(cm)	(cm)	
22-16	第6面遺構外	かわらけ	(12.2)	(7.2)	3.4	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
22-17	"	かわらけ	(12.0)	(7.4)	3.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
22-18	"	かわらけ	(13.0)	(7.0)	3.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
22-19	"	青白磁 梅瓶蓋	蓋部小片			b.白色 精良堅緻 d.水色半透明 薄手施釉 気泡あり
22-20	"	瀬戸 卸皿	口縁部小片			b.黄灰色 白色粒 砂粒 良土 d.淡緑色の灰釉 内外面薄手施釉
22-21	"	褐釉 瓶子	胴部片			a.輪積み技法 内面指頭痕横ナデ 外面縦ナデ降灰有り b.灰白色 白色粒 小石粒 c.褐色
22-22	"	常滑 甕	口縁部片 縁帯幅2.5			a.輪積み技法 内面指頭痕 b.暗灰色 白色粒 黒色粒 粗土 c.褐色 e.硬質
22-23	"	常滑 甕	底部片			a.輪積み技法 内面指頭痕 横ナデ b.暗灰色 白色粒 黒色粒 小石粒 長石 粗土 c.黒褐色 e.硬質
22-24	"	常滑 甕	胴部片			a.輪積み技法 内面指頭痕 外面叩き目あり b.暗灰色 白色粒 黒色粒 小石粒 やや粗土 c.褐色 e.硬質
22-25	"	常滑 甕	胴部片			a.輪積み技法 内面指頭痕 b.暗灰色 白色粒 黒色粒 小石粒 c.暗赤褐色 e.硬質
22-26	"	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部小片			a.輪積み技法 外面縦ナデ b.灰色 白色粒 小石粒 やや粗土 c.暗赤褐色
22-27	"	常滑 片口鉢Ⅱ類	底部小片			a.輪積み技法 内面指頭痕 外面縦ナデ b.暗灰色 白色粒 小石粒多め 粗土 c.暗赤褐色
22-28	"	常滑 片口鉢Ⅱ類	底部小片			a.輪積み技法 内面指頭痕 外面縦ナデ b.暗灰色 白色粒 小石粒 やや粗土 c.暗赤褐色
22-29	"	北部系 山茶碗	口縁部小片			a.ロクロ b.白色粒 黒色粒 良土 c.灰色 e.良好 硬質 f.東濃型
22-30	"	吉備系 土師質碗	口縁～体部片			a.ロクロ b.微砂 c.灰白色 e.良好 f.外側口縁部7mm幅の帯状に黒くなる 内側口唇部位まで少し黒い
22-31	"	土製品 土錘	長さ6.0×幅(3.7)×厚さ3.5			b.微砂 黒色粒 c.黄黒色～赤褐色 e.良好
22-32	"	火打石	長さ3.5×幅2.1×厚さ1.6			f.打撃痕有り
22-33	"	基石	長さ2.0×幅2.5×厚さ0.8			c.黒色 f.不整形
22-34	"	基石	長さ2.0×幅1.9×厚さ0.4			c.黒色 f.不整形
22-35	"	木製品	長さ7.7×幅4.7×厚さ0.8			f.両面削り加工 木目方向に3つの孔がほぼ等間隔に並ぶ 側面荒れるが欠損なし
22-36	"	木製品 箸	長さ22.9 φ0.5			f.断面六角形
25-1	第7面土坑1	かわらけ	(8.2)	(6.1)	1.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒多め 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
25-2	"	白磁 口元皿	口縁～胴部片			b.灰白色 黒色粒 精良堅緻 d.白色不透明
25-3	"	木製品 箸	長さ23.5×幅0.8×厚さ0.5			f.両端細くなる
25-4	"	木製品 菜箸	残存長15.3 φ1.1			f.太くしっかりしている
25-5	"	木製品 箸	残存長14.6×幅0.6×厚さ0.4			f.尖端に若干の焦げ
25-6	"	木製品	最長24.6 最短20.8×幅8.1×厚さ0.3～0.6			f.曲げ物底板再加工作品 一部刃物による切り込みあり、切り込んで割った可能性大
25-7	第7面埋設曲物	木製品 曲物	径(52)×高さ15.6			a.底面：複数の板を桜皮で縫い合わせる 側面：2枚の板を木螺子で接合
25-8	"	木製品	残存長54×幅8.7×厚さ1～1.2			a.片方の端は中央に穴が穿たれる f.用途不明
26-9	"	銅銭	外径2.47内径0.64厚さ0.12			開元通寶 唐 初鑄年621年 f.背文「俯月」
26-10	"	銅銭	外径2.41内径0.77厚さ0.08			開元通寶 唐 初鑄年621年 f.背文「月・星・磨輪」
26-11	"	銅銭	外径2.45内径0.61厚さ0.12			開元通寶 唐 初鑄年621年
26-12	"	銅銭	外径2.42内径0.68厚さ0.11			開元通寶 唐 初鑄年621年
26-13	"	銅銭	外径2.34内径0.62厚さ0.12			開元通寶 唐 初鑄年621年
26-14	"	銅銭	外径2.38内径0.62厚さ0.08			開元通寶 唐 初鑄年621年

表9 遺物観察表(7)

()は復元値

挿図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
			(c m)	(c m)	(c m)	
26-15	第7面埋設曲物	銅銭	外径2.29内径0.6厚さ0.12			開元通寶 唐 初鑄年621年
26-16	"	銅銭	外径2.34内径0.67厚さ0.1			開元通寶 唐 初鑄年621年
26-17	"	銅銭	外径2.43内径0.66厚さ0.09			開元通寶 唐 初鑄年621年
26-18	"	銅銭	外径2.38内径0.64厚さ0.11			開元通寶 唐 初鑄年621年
26-19	"	銅銭	外径2.41内径0.64厚さ0.1			開元通寶 唐 初鑄年621年
26-20	"	銅銭	外径2.41内径0.58厚さ0.08			宋通元寶 北宋 初鑄年960年
26-21	"	銅銭	外径2.49内径0.55厚さ0.09			淳化元寶 北宋 初鑄年990年
26-22	"	銅銭	外径2.47内径0.57厚さ0.1			咸平元寶 北宋 初鑄年998年
26-23	"	銅銭	外径2.22内径0.61厚さ0.1			咸平元寶 北宋 初鑄年998年
26-24	"	銅銭	外径2.48内径0.57厚さ0.1			景德元寶 北宋 初鑄年1004年
26-25	"	銅銭	外径2.41内径0.55厚さ0.1			祥符元寶 北宋 初鑄年1009年
26-26	"	銅銭	外径2.49内径0.6厚さ0.13			祥符元寶 北宋 初鑄年1009年
26-27	"	銅銭	外径2.38内径0.58厚さ0.1			祥符元寶 北宋 初鑄年1009年
26-28	"	銅銭	外径1.76内径0.57厚さ0.09			祥符元寶 北宋 初鑄年1009年
26-29	"	銅銭	外径2.54内径0.58厚さ0.1			祥符元寶 北宋 初鑄年1009年
26-30	"	銅銭	外径2.55内径0.64厚さ0.1			天禧通寶 北宋 初鑄年1017年
26-31	"	銅銭	外径1.9内径0.59厚さ0.09			天禧通寶 北宋 初鑄年1017年 f.磨輪
26-32	"	銅銭	外径2.48内径0.67厚さ0.09			天聖元寶 北宋 初鑄年1023年
26-33	"	銅銭	外径2.47内径0.66厚さ0.09			天聖元寶 北宋 初鑄年1023年
26-34	"	銅銭	外径2.41内径0.65厚さ0.12			天聖元寶 北宋 初鑄年1023年
26-35	"	銅銭	外径2.54内径0.74厚さ0.11			景祐元寶 北宋 初鑄年1034年
26-36	"	銅銭	外径2.24内径0.55厚さ0.08			景祐元寶 北宋 初鑄年1034年 f.磨輪
26-37	"	銅銭	外径2.46内径0.74厚さ0.08			皇宋通寶 北宋 初鑄年1038年
26-38	"	銅銭	外径2.5内径0.66厚さ0.09			皇宋通寶 北宋 初鑄年1038年
26-39	"	銅銭	外径2.44内径0.74厚さ0.08			皇宋通寶 北宋 初鑄年1038年
26-40	"	銅銭	外径2.48内径0.66厚さ0.12			皇宋通寶 北宋 初鑄年1038年
26-41	"	銅銭	外径2.48内径0.66厚さ0.11			皇宋通寶 北宋 初鑄年1038年
26-42	"	銅銭	外径2.46内径0.64厚さ0.12			皇宋通寶 北宋 初鑄年1038年
26-43	"	銅銭	外径2.41内径0.77厚さ0.12			皇宋通寶 北宋 初鑄年1038年
26-44	"	銅銭	外径2.4内径0.63厚さ0.07			皇宋通寶 北宋 初鑄年1038年
26-45	"	銅銭	外径2.42内径0.66厚さ0.09			皇宋通寶 北宋 初鑄年1038年
26-46	"	銅銭	外径2.39内径0.58厚さ0.11			皇宋通寶 北宋 初鑄年1038年
26-47	"	銅銭	外径2.45内径0.78厚さ0.11			皇宋通寶 北宋 初鑄年1038年
26-48	"	銅銭	外径2.45内径0.69厚さ0.1			皇宋通寶 北宋 初鑄年1038年
26-49	"	銅銭	外径 - 内径 - 厚さ0.07			皇宋通寶 北宋 初鑄年1038年

表10 遺物観察表(8)

()は復元値

挿図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
			(c m)	(c m)	(c m)	
26-50	第7面埋設曲物	銅銭	外径2.39内径0.68厚さ0.08			嘉祐元寶 北宋 初鑄年1056年
26-51	"	銅銭	外径2.37内径0.61厚さ0.12			嘉祐元寶 北宋 初鑄年1056年
26-52	"	銅銭	外径2.39内径0.63厚さ0.1			治平元寶 北宋 初鑄年1064年
26-53	"	銅銭	外径2.43内径0.53厚さ0.09			治平元寶 北宋 初鑄年1064年
26-54	"	銅銭	外径2.5内径0.66厚さ0.11			熙寧元寶 北宋 初鑄年1068年
26-55	"	銅銭	外径2.47内径0.62厚さ0.14			熙寧元寶 北宋 初鑄年1068年
26-56	"	銅銭	外径2.43内径0.65厚さ0.12			熙寧元寶 北宋 初鑄年1068年
26-57	"	銅銭	外径2.42内径0.64厚さ0.13			熙寧元寶 北宋 初鑄年1068年
26-58	"	銅銭	外径2.38内径0.67厚さ0.12			熙寧元寶 北宋 初鑄年1068年
26-59	"	銅銭	外径2.43内径0.59厚さ0.1			熙寧元寶 北宋 初鑄年1068年
26-60	"	銅銭	外径2.47内径0.7厚さ0.1			元豐通寶 北宋 初鑄年1078年
26-61	"	銅銭	外径2.45内径0.62厚さ0.11			元豐通寶 北宋 初鑄年1078年
26-62	"	銅銭	外径2.38内径0.69厚さ0.1			元豐通寶 北宋 初鑄年1078年
26-63	"	銅銭	外径2.51内径0.68厚さ0.11			元豐通寶 北宋 初鑄年1078年
26-64	"	銅銭	外径2.48内径0.64厚さ0.11			元豐通寶 北宋 初鑄年1078年
26-65	"	銅銭	外径2.41内径0.69厚さ0.08			元豐通寶 北宋 初鑄年1078年
26-66	"	銅銭	外径2.5内径0.69厚さ0.13			元豐通寶 北宋 初鑄年1078年
26-67	"	銅銭	外径2.44内径0.69厚さ0.11			元豐通寶 北宋 初鑄年1078年
26-68	"	銅銭	外径2.38内径0.57厚さ0.12			元豐通寶 北宋 初鑄年1078年
26-69	"	銅銭	外径2.15内径0.61厚さ0.09			元豐通寶 北宋 初鑄年1078年 f.磨輪
26-70	"	銅銭	外径2.18内径0.6厚さ0.12			元豐通寶 北宋 初鑄年1078年 f.磨輪
26-71	"	銅銭	外径2.18内径0.63厚さ0.08			元祐通寶 北宋 初鑄年1086年 f.磨輪
26-72	"	銅銭	外径2.24内径0.67厚さ0.1			元祐通寶 北宋 初鑄年1086年 f.磨輪
26-73	"	銅銭	外径2.42内径0.65厚さ0.11			元祐通寶 北宋 初鑄年1086年
26-74	"	銅銭	外径2.44内径0.67厚さ0.13			元祐通寶 北宋 初鑄年1086年
26-75	"	銅銭	外径2.39内径0.67厚さ0.11			元祐通寶 北宋 初鑄年1086年
26-76	"	銅銭	外径2.46内径0.55厚さ0.08			元祐通寶 北宋 初鑄年1086年
26-77	"	銅銭	外径2.4内径0.53厚さ0.1			元祐通寶 北宋 初鑄年1086年
26-78	"	銅銭	外径2.4内径0.64厚さ0.13			元祐通寶 北宋 初鑄年1086年
26-79	"	銅銭	外径2.49内径0.62厚さ0.07			元祐通寶 北宋 初鑄年1086年
26-80	"	銅銭	外径2.43内径0.72厚さ0.13			元祐通寶 北宋 初鑄年1086年
26-81	"	銅銭	外径2.45内径0.65厚さ0.12			元祐通寶 北宋 初鑄年1086年
26-82	"	銅銭	外径2.43内径0.56厚さ0.12			元祐通寶 北宋 初鑄年1086年
26-83	"	銅銭	外径2.46内径0.64厚さ0.11			紹聖元寶 北宋 初鑄年1094年
26-84	"	銅銭	外径2.39内径0.55厚さ0.12			紹聖元寶 北宋 初鑄年1094年

表11 遺物観察表(9)

()は復元値

挿図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
			(c m)	(c m)	(c m)	
26-85	第7面埋設曲物	銅銭	外径2.39内径0.61厚さ0.11			元符通寶 北宋 初鑄年1098年
26-86	"	銅銭	外径2.48内径0.58厚さ0.12			聖宋元寶 北宋 初鑄年1101年
26-87	"	銅銭	外径2.39内径0.73厚さ0.11			聖宋元寶 北宋 初鑄年1101年
26-88	"	銅銭	外径2.33内径0.63厚さ0.1			聖宋元寶 北宋 初鑄年1101年 f.磨輪
26-89	"	銅銭	外径2.44内径0.6厚さ0.1			大觀通寶 北宋 初鑄年1107年
26-90	"	銅銭	外径2.52内径0.62厚さ0.13			大觀通寶 北宋 初鑄年1107年
26-91	"	銅銭	外径2.48内径0.62厚さ0.11			政和通寶 北宋 初鑄年1111年
26-92	"	銅銭	外径2.44内径0.55厚さ0.11			淳熙元寶 南宋 初鑄年1174年 f.背文「九」
26-93	"	銅銭	外径2.37内径0.65厚さ0.13			嘉定通寶 南宋 初鑄年1208年 f.背文「十三」
27-1	第7面P-3	かわらけ	(12.4)	(7.6)	3.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯少量 やや粗土 c.黄灰色 e.良好
27-2	第7面遺構外	かわらけ	7.2	5.1	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 黒色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
27-3	"	かわらけ	(7.6)	(5.6)	1.9	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 黒色粒 良土 c.黄灰色 e.やや甘い f.全体的に煤付着黒っぽい
27-4	"	かわらけ	(6.2)	(4.2)	2.0	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 黒色粒 やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
27-5	"	かわらけ	(8.4)	(7.0)	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 黒色粒 土丹粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
27-6	"	かわらけ	(7.4)	(5.4)	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 黒色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
27-7	"	かわらけ	(12.5)	(7.1)	(3.8)	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 黒色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
27-8	"	かわらけ	(12.4)	(8.0)	3.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 黒色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
27-9	"	龍泉窯 青磁 鎬蓮弁文碗	口縁部片			a.ロクロ 複弁蓮弁片切彫 b.灰色 精良堅緻 黒色粒多い d.灰緑色不透明 内外面施釉 気泡あり
27-10	"	龍泉窯 青磁 鎬蓮弁文碗	体部片			a.ロクロ 複弁蓮弁片切彫 b.灰色 精良堅緻 黒色粒 d.灰緑色透明 内外面施釉
27-11	"	龍泉窯 青磁 無文碗	底部～高台部小片			a.たみ付け露胎 断面三角高台 b.灰色 精良堅緻 黒色粒 d.暗灰緑色不透明 内外面・高台部施釉 外面やや厚手施釉
27-12	"	白磁 口元碗	口縁～体部片			a.ロクロ b.灰白色 精良堅緻 黒色粒 d.灰白色不透明 口縁部剥ぎ取り 外面薄手施釉 ピンホール有り
27-13	"	白磁 口元碗	体部片			a.ロクロ b.灰白色 精良堅緻 黒色粒 d.灰白色不透明 薄手施釉
27-14	"	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片			a.輪積技法 口縁部横位ナデ 以下指頭圧痕とナデ b.明灰色 砂粒 白色粒多め 黒色粒 小石粒 d.口縁部内面斑に自然降灰 e.硬質
27-15	"	常滑 片口鉢Ⅰ類	高台部片			a.輪積技法 貼付高台 口縁部横位ナデ 以下指頭圧痕とナデ b.灰色 砂粒 白色粒多め 小石粒 c.外面：暗茶褐色 内面・底部：茶褐色 e.硬質 f.内面使用による摩耗
27-16	"	常滑 甕	口縁部片 縁帯幅1.5			a.輪積み技法 内面指頭痕 b.茶褐色 白色粒少量 砂粒 c.暗茶褐色 e.硬質
27-17	"	常滑 甕	口縁部片 縁帯幅2.2			a.輪積み技法 内面指頭痕 b.暗茶褐色 白色粒少量 砂粒 c.褐色 d.口縁部自然降灰 f.中野編年6型式
27-18	"	磨り常滑	長さ4.8×幅6.2×厚さ1.1			b.灰色 f.内外表面以外全てで摩耗
27-19	"	磨り常滑	長さ8.4×幅9.5×厚さ1.1			b.灰色 砂粒 小石粒やや多め c.茶褐色 d.灰緑色 f.破断面摩耗
27-20	"	滑石鍋	底部小片			a.外底面にノミ状工具の削り加工 f.内部擦痕・摩耗痕 二次焼成を受けている
27-21	"	砥石	長さ12.8×幅7.6×厚さ5.6			f.中砥 伊予産 流紋岩質粗粒凝灰岩 表裏側面全てに使用痕あり 側面ノミ状工具による削り出し痕
27-22	"	漆器 椀	体部小片			f.黒地に朱漆で菊花スタンプ 漆の剥れ著しく状態劣悪

第四章 まとめ

本遺跡の名称が示す「名越」は大町の東の一带の総称で鎌倉時代からの地名で山王ヶ谷開口部に位置し、鎌倉時代に建立された山王堂が存在した旧境内の一角と推定されている。今回の発掘調査は面積が狭く遺構の面的な拡がりから全体の様相を把握するまでには至っておらず、掘削深度の規制により中世地山面の平面的な調査を実施することができなかった。遺跡の営為がいつから始まり、どのような土地利用が行われていたのかを考えてみたい。なお本章の引用・参考文献に関しては第1章を参照してほしい。

名越山王堂跡の遺跡名称が示している「名越」は大町の東の一带の総称、鎌倉時代からの地名で『吾妻鏡』のところでこの名が現れる。北条時政以来北条氏の居館があったといい、問注所執事にあたる三善氏や佐竹秀義以来、大寶寺がある谷戸に居館があったという伝承が知られる。また佐竹天王祭は八雲神社の神輿巡行の際、祇園山の東裏の佐竹屋敷に所在する佐竹一族を祀る五輪塔群の前に神輿を据えて祭を行い、その際に大寶寺にも参向するという。さらに「山王」の名称は、中国の天台山守護神の山王元弼真君に由来すると伝える。最澄が中国へ渡来し、天台山国清寺の山王祠にならったて比叡山の守護神・地主神として祭ったのがその始まりであり、日吉権現とか山王権現と呼ばれて比叡の山岳信仰と深くかかわっている。

ところで調査地は山王ヶ谷と呼ばれ、この谷戸には『吾妻鏡』の火災記事などにみられる「名越山王堂」が所在していたと考えられ、谷戸奥には山王社の小さな祠が祀られていることなどから伝承地に比定されている。古くは赤星直忠氏らによって昭和9・10年(1934~35)に踏査・発掘調査が行われ、石垣と中世瓦片の散布した状況が確認している(沢1972)。その後、谷戸の北奥部で昭和61~63年(1986~88)にかけて企業の研修所改築に伴う発掘調査が実施され、石積基壇もつ三間四方の礎石建物である。母屋は桁行3間(25.5尺)・梁行3間(24尺)で四周に5尺の「裳階」が取りつく構造であり、寺院の本堂に類する礎石建物跡との指摘がなされている(齋木1990 鈴木亘氏による礎石建物跡のコメントを掲載)。またやぐら状の岩窟内で火を焚き、五穀や宝物(ガラス・水晶製数珠玉、銅製仏具)を火中へ焼べるような呪術的な修法を推測される場跡を窺わせた。年代的には概ね13世紀末葉~14世紀前半頃に比定される。この地が鎌倉における山王信仰の拠点、旧境内地であった可能性を想定したいところであるが、創建期を含めて13世紀後半に遡る時期については掘削深度の関係上、調査が実施されていないため解明されていないのが現状である。

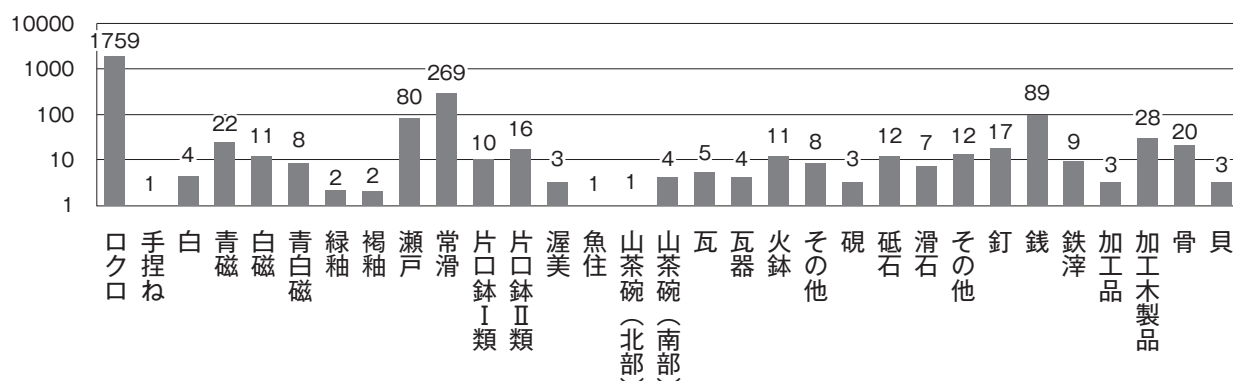
図1に示した今回の調査地点周辺で実施された調査事例について触れてみたい。名越大谷では県道鎌倉・葉山線に近い谷戸の開口部で比較的多くの調査事例が報告されているが、山王ヶ谷、花ヶ谷、釈迦堂口、黄金ヶ谷などの各支谷の低地部での発掘調査は7か所と殆んど実施されていないのが現状である。この谷戸の調査事例は、急傾斜地における崩落対策の一環として実施されたやぐらが調査主体を占めており(図1-A~G地点)、特に本地点裏手丘陵の東側支谷に位置した山王堂東谷やぐら群では多数のやぐらが点在していることは興味深い点である。名越大谷には山王堂推定地をはじめ、善導寺・慈恩寺・木東寺などの所在地の不明な廃寺の伝承が知られているが、今後も調査の成果を積み重ねていけば徐々に明らかになっていくことであろう。

次に出土遺物から各生活面の年代観について簡単に触れてみたい。第7面は土坑、埋設曲物、角柱や礎板を伴うピットを確認したが、掘立柱建物など何らかの建物を構成する柱穴と認識できなかった。出

表12 層別遺物の出土数量表

種類 \ 出土地		第1面	第2面	第3面	第4面	第5面	第6面	第7面	個数	比率(%)
かわらけ	ロクロ	233	93	330	274	328	373	128	1759	72.6
	手捏ね	0	0	0	0	0	0	1	1	0.04
	白	0	0	1	2	1	0	0	4	0.2
舶載陶磁器	青磁	4	5	0	4	1	2	6	22	0.9
	白磁	2	0	1	2	1	0	5	11	0.5
	青白磁	0	2	3	2	0	1	0	8	0.3
	緑釉	0	0	2	0	0	0	0	2	0.1
	褐釉	0	0	0	1	0	1	0	2	0.1
国産陶磁器	瀬戸	26	19	8	5	18	4	0	80	3.3
	常滑	28	31	44	37	31	34	64	269	11.1
	片口鉢Ⅰ類	0	1	0	1	0	3	5	10	0.4
	片口鉢Ⅱ類	4	0	1	9	1	1	0	16	0.7
	渥美	0	0	0	0	0	1	2	3	0.1
	魚住	1	0	0	0	0	0	0	1	0.04
	山茶碗(北部)	0	0	0	0	1	0	0	1	0.04
山茶碗(南部)	1	1	0	0	0	1	1	4	0.2	
土製品	瓦	1	3	0	0	0	1	0	5	0.2
	瓦器	1	1	0	0	1	1	0	4	0.2
	火鉢	7	1	0	2	0	1	0	11	0.5
	その他	3	2	0	0	1	1	1	8	0.3
石製品	硯	0	1	2	0	0	0	0	3	0.1
	砥石	4	0	2	4	1	0	1	12	0.5
	滑石	2	0	0	2	1	0	2	7	0.3
	その他	4	1	3	0	0	3	1	12	0.3
金属製品	釘	6	2	4	1	2	1	1	17	0.7
	銭	0	1	1	2	0	0	85	89	3.7
	鉄滓	0	2	0	6	1	0	0	9	0.4
骨角製品	加工品	0	0	1	1	1	0	0	3	0.1
木製品	加工木製品	0	0	0	3	0	4	21	28	1.2
自然遺物	骨	2	0	0	3	11	4	0	20	0.8
	貝	0	0	0	0	0	2	1	3	0.1
合計		329	166	403	361	401	439	325	2424	100%
比率		14	7	17	15	16	18	13	100%	

表13 種類別遺物の出土比率表



土遺物の組成からおおよそ13世紀後葉頃と思われる。さらに調査区南壁に沿ってトレンチを入れたが中世基盤層の地山面上からは地形層や、それに伴う遺構を確認することはできなかった。

第6・5面の様相は、第6面のような土丹版築面や貝砂撒いた面などの丁寧な地形面の空閑地が形成され、第5面では部分的な検出に留まるが掘立柱建物がみられたことから前代とは異なる敷地利用が読み取れる。両面の年代は出土遺物からみて13世紀後葉～14世紀前葉頃と考えられる。

第4・3面を特徴づけるのは、板囲建物や井戸などである。板囲建物の周囲は通路状に土丹塊を貼り付けて積み増し、木枠を備えた井戸が開鑿されており永続的な生活が営まれていたことは確実である。出土遺物の年代観からおおよそ14世紀前半頃の時期に比定したいところである。

第2面と第1面は図6-34・36の瀬戸天目茶碗や平碗、かわらけの背高気味で口縁部が開きながら外反した器形などの型式から15世紀代と考えられる。第2面からも図9-8・11・13の資料のように時代的に下る遺物も少量出土しており、その存在を考慮すれば、両生活面の年代差は大きく変わらず、14世紀後葉から15世紀中頃まで存続していたと思われる。

表12・13に示したように出土遺物について観察すると、分類の困難な小破片を除き接合後の破片数の合計は、2,424点が得られた。このうち大多数を占めているのが、ロクロ成形のかわらけで1759点で総出土量の7割以上の出土比率を示しており、手づくね成形は中世地山面上の包含層に伴う1点だけであった。陶磁器類では常滑窯の甕や片口鉢が全体の12%強とかわらけに次いで高い出土比率であるのに対し、瀬戸窯製品3.3%、貿易陶磁器は総て合わせても2%にも満たない出土量を示しているのが出土傾向の特徴になろう。

以上のように低地部の僅かな調査事例の成果をもとに、谷戸全体の性格を類推することしかできないので、今後の調査の進行に注目して行きたいところである。

【引用文献】

沢 寿郎・赤星直忠 1972『鎌倉 - 史蹟めぐり会記録 -』鎌倉文化研究会

第十八回 昭和九年一月二十八日と第二十九回 昭和十年四月廿八日には名城山王堂の踏査と発掘調査の記録を赤星直忠氏が掲載している。

斎木秀雄 1990『名越・山王堂跡発掘調査報告書 - 電通鎌倉研修所改築に伴う中世寺院跡の発掘調査報告 -』同遺跡発掘調査団



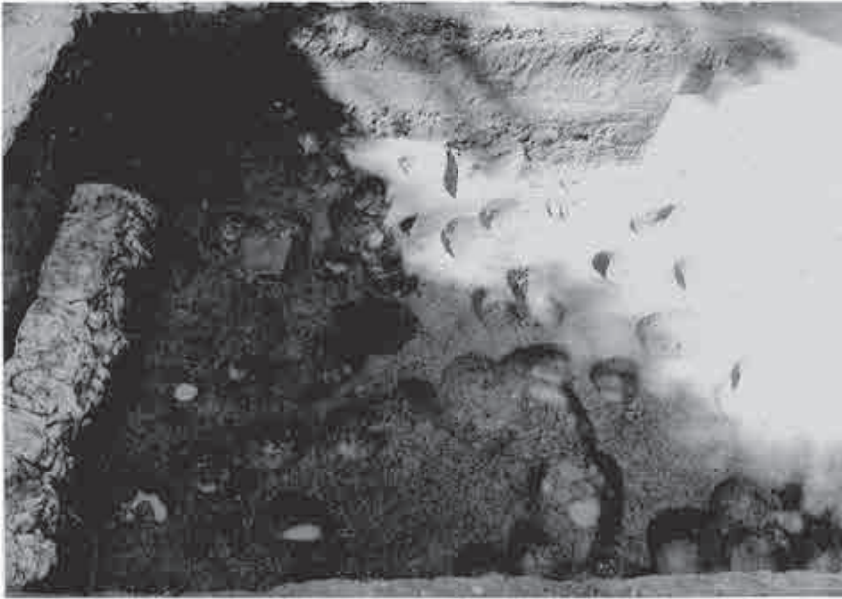
◀ a. 山王堂跡の谷を望む
(南から)

▶ b. 第1面全景(南から)

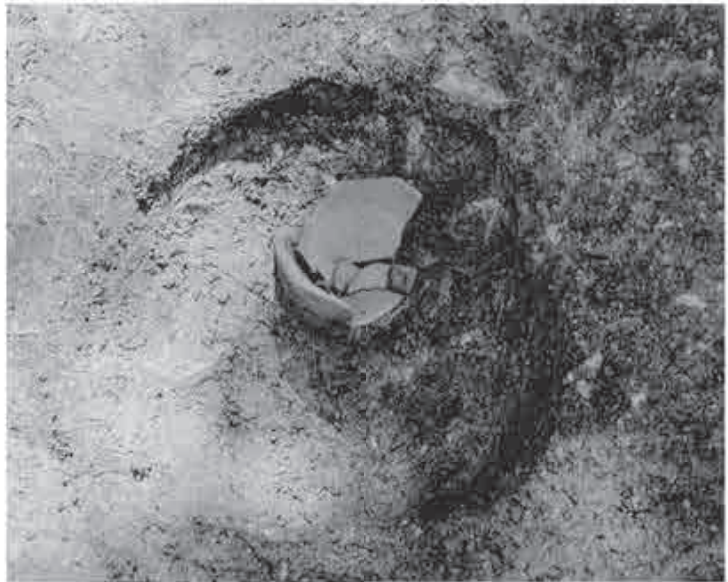


◀ c. 第1面全景(西から)

◀ a. 第2面全景（南から）



▶ b.
P11
かわらけ出土状況

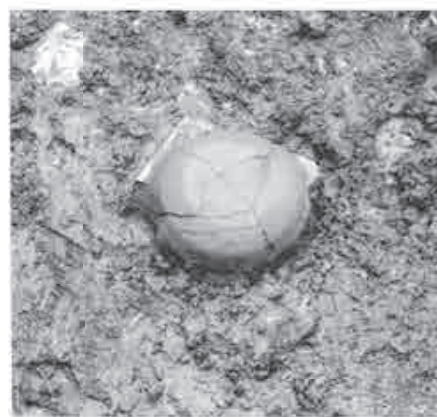


◀ c. 第3面全景（南から）





◀ a. 第3面全景（西から）



▲ b. 面上遺物出土状況

▶ c. 第3面全景（西から）



◀ d. 第3面建物1（東から）

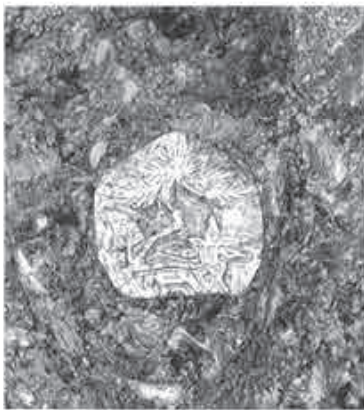


◀ a. 第4面全景（南から）

▼ b. 第4面全景（西から）



▼ c. 滑石製スタンプ出土状況



▼ d. 井戸1（西から）



▼ e. 井戸1木枠



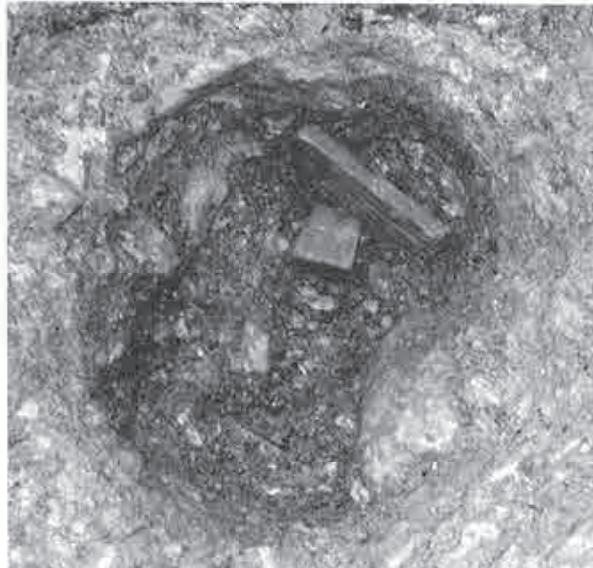


◀ a. 第5面全景(北から)

▼b. 建物1(北から)



▼d. 建物1 P八



▼c. 第5面全景(東から)



▼e. 面上馬歯出土状況





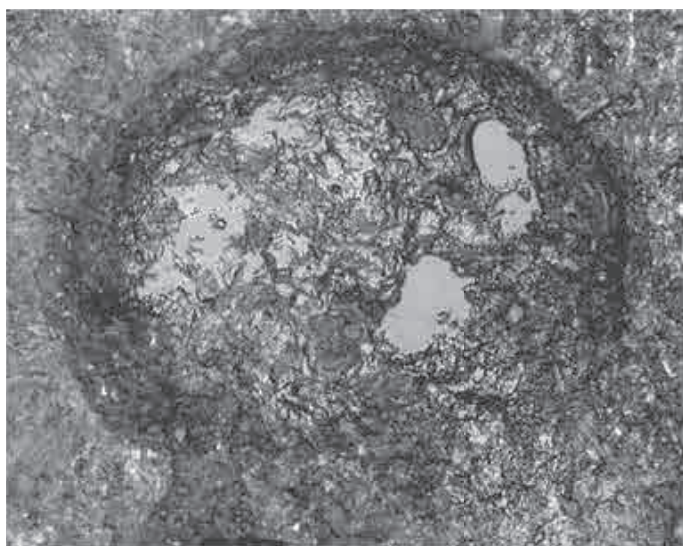
◀ a. 第6面全景(西から)



▶ b. 第6面貝砂敷



◀ c. 第7面全景(西から)



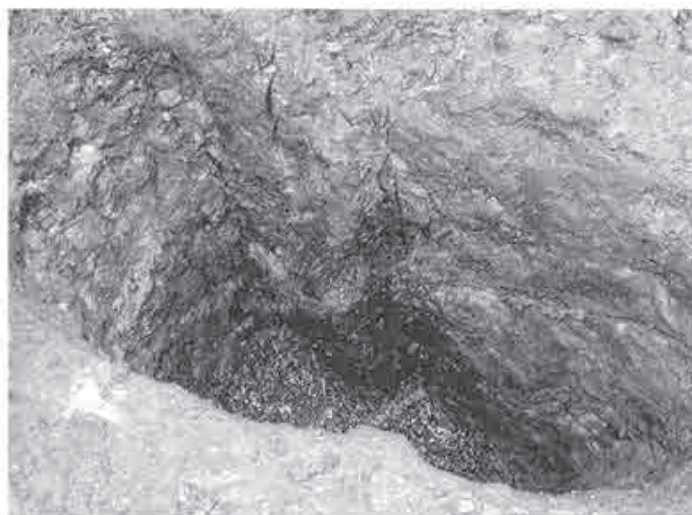
▲ a. 土坑1



▲ b. P2柱跡



◀ d. 常滑甕出土状況



◀ c. P2土層断面



◀ f. 曲物内出土のさし銭



◀ e. 曲物



▲ a. 調査区南壁土層断面



▲ b. 調査区北壁土層断面



▲ d. 井戸 1

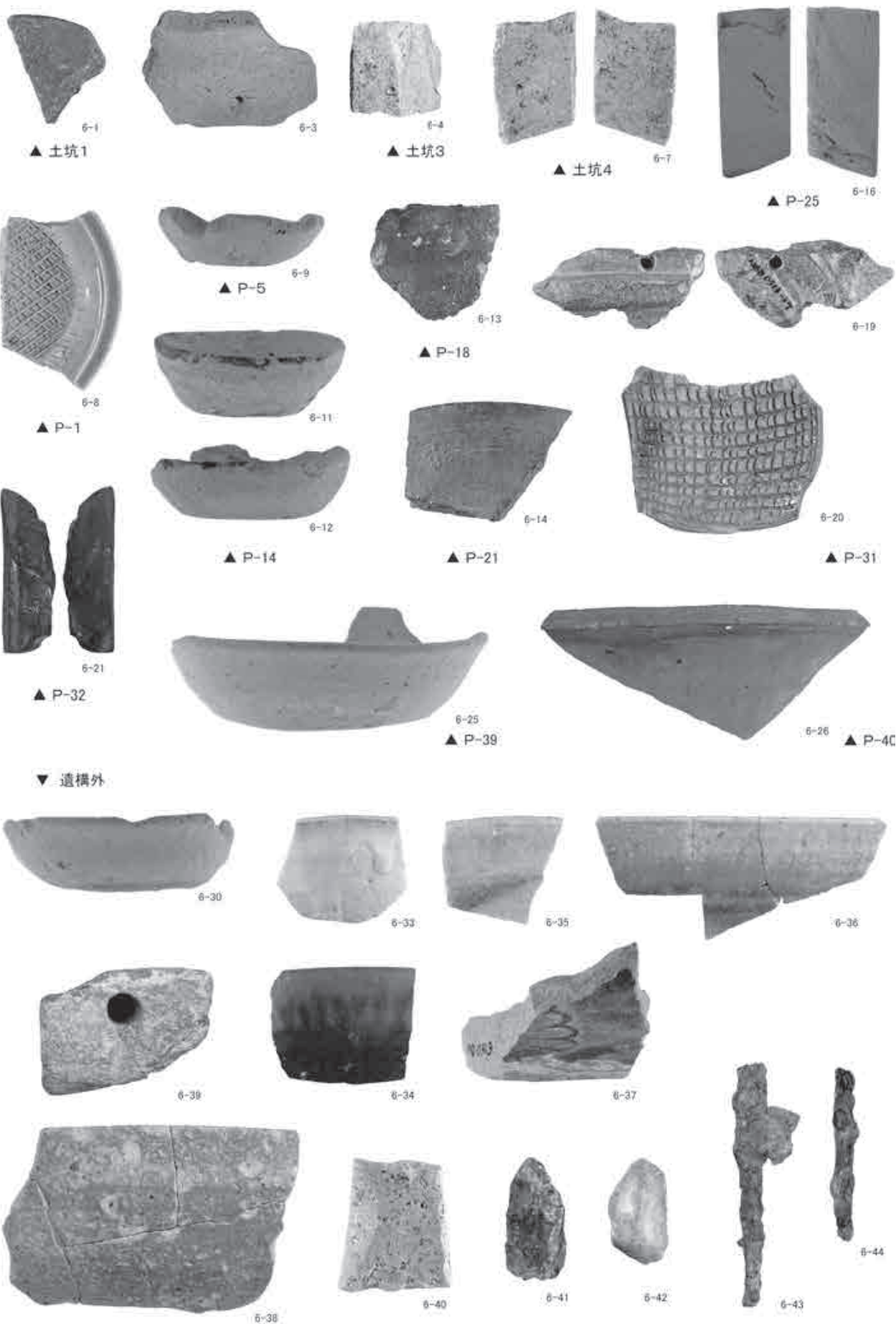


▲ c. 調査区北壁西端土層断面

▶ e. 井戸 1 木枠検出状況

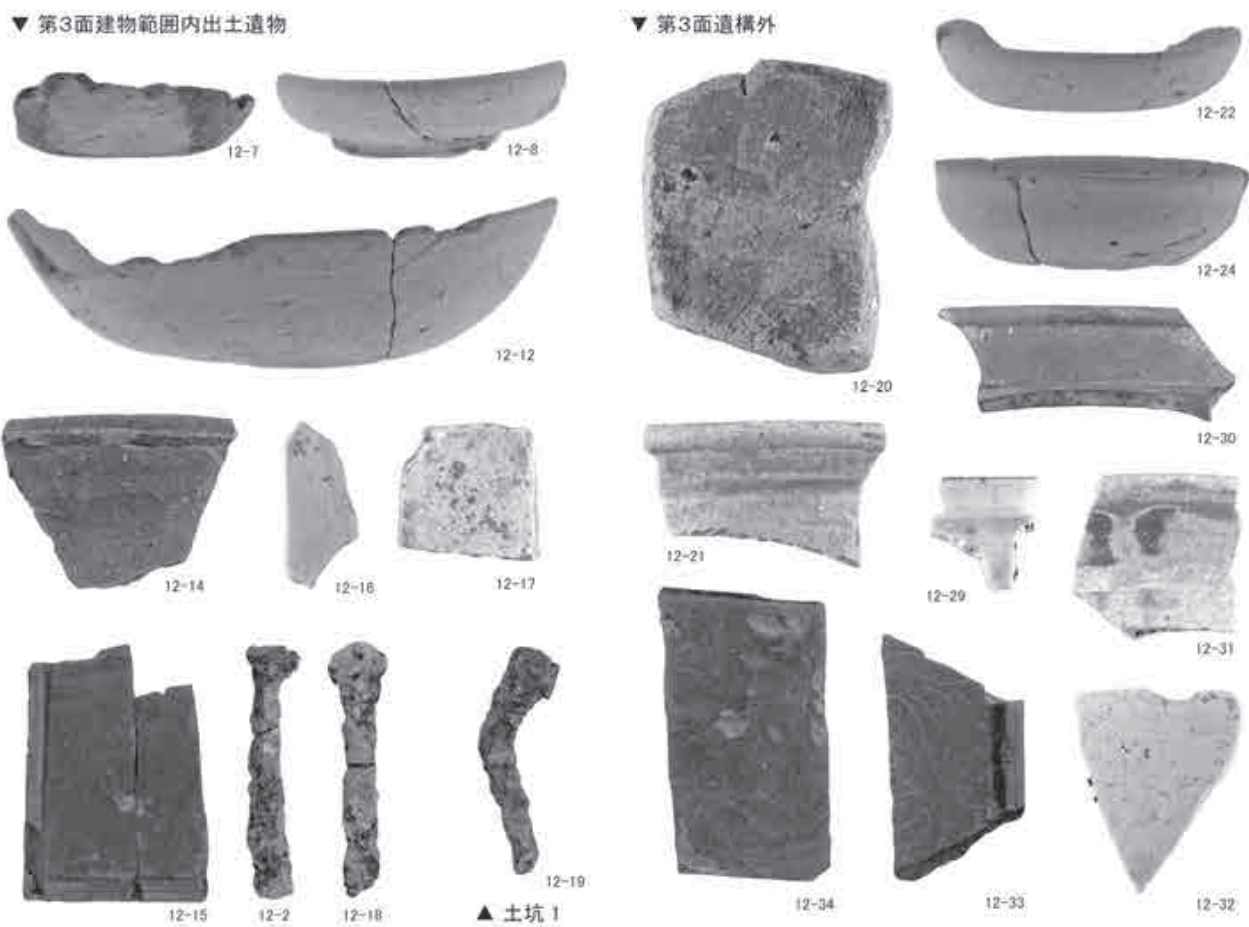
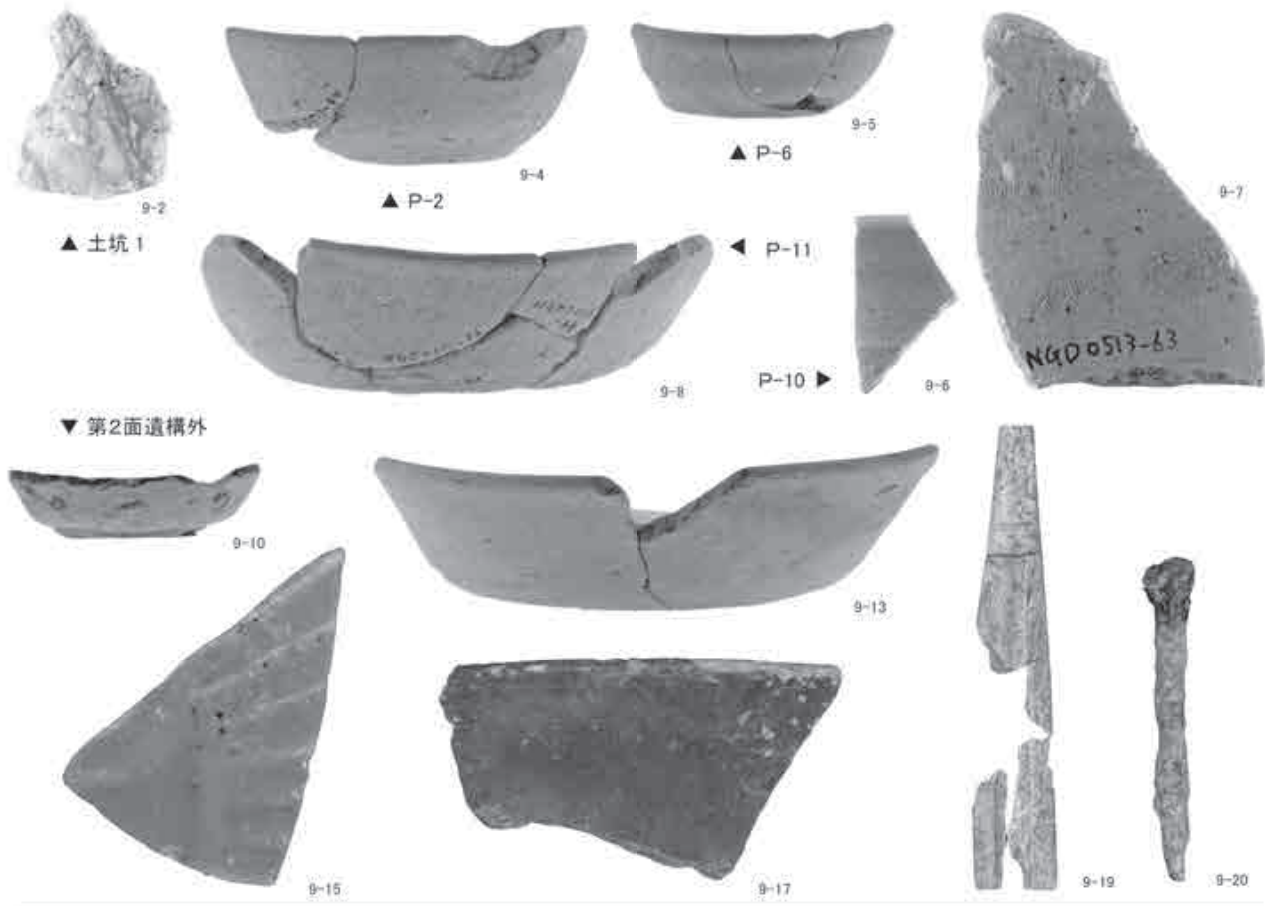


横棧の検出状況

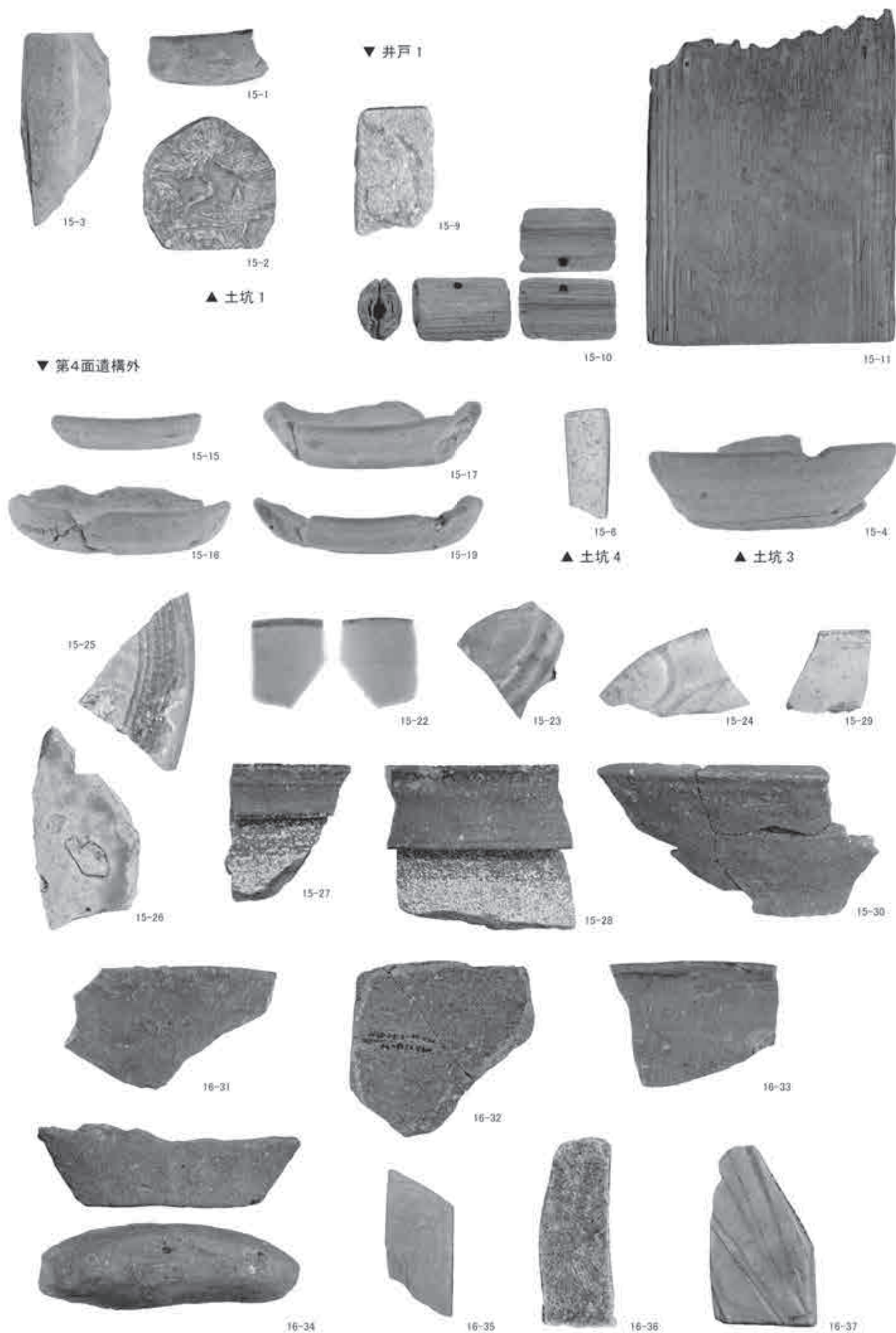


第1面各遺構

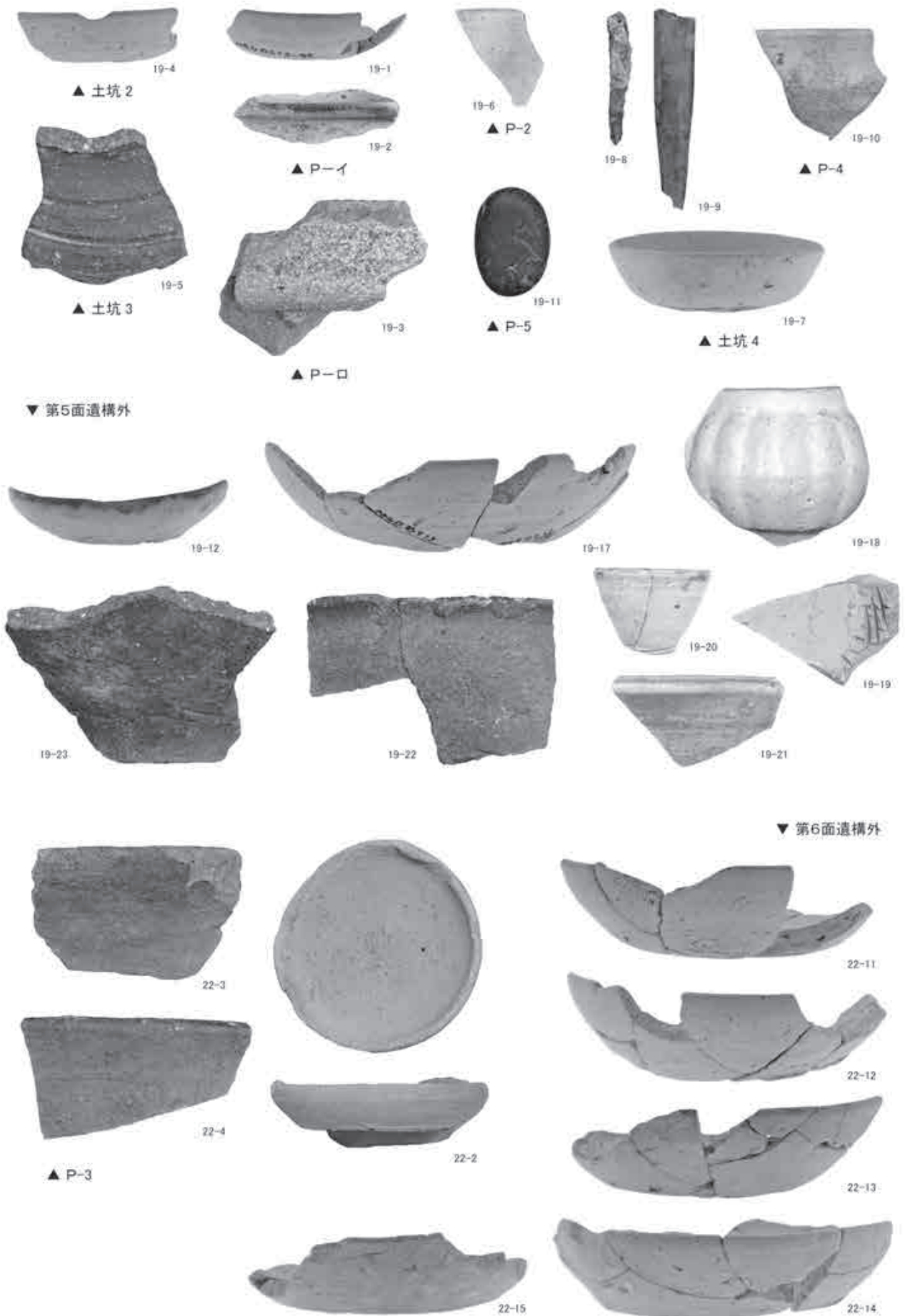
图版 10



第2・3面各遺構



第4面各遺構



第5面各遺構・第6面遺構外

▼ 第6面遺構外



22-19



22-20



22-22



22-25



22-21



22-23



22-24



22-26



22-27



22-28



22-30



22-29



22-36



▲ 第7面土坑 1



22-32



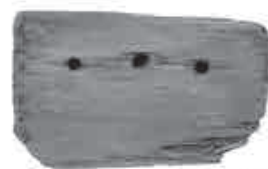
22-31



22-33



22-34



22-35

▼ 第7面埋設曲物



25-2



25-5



25-4



25-3



25-7



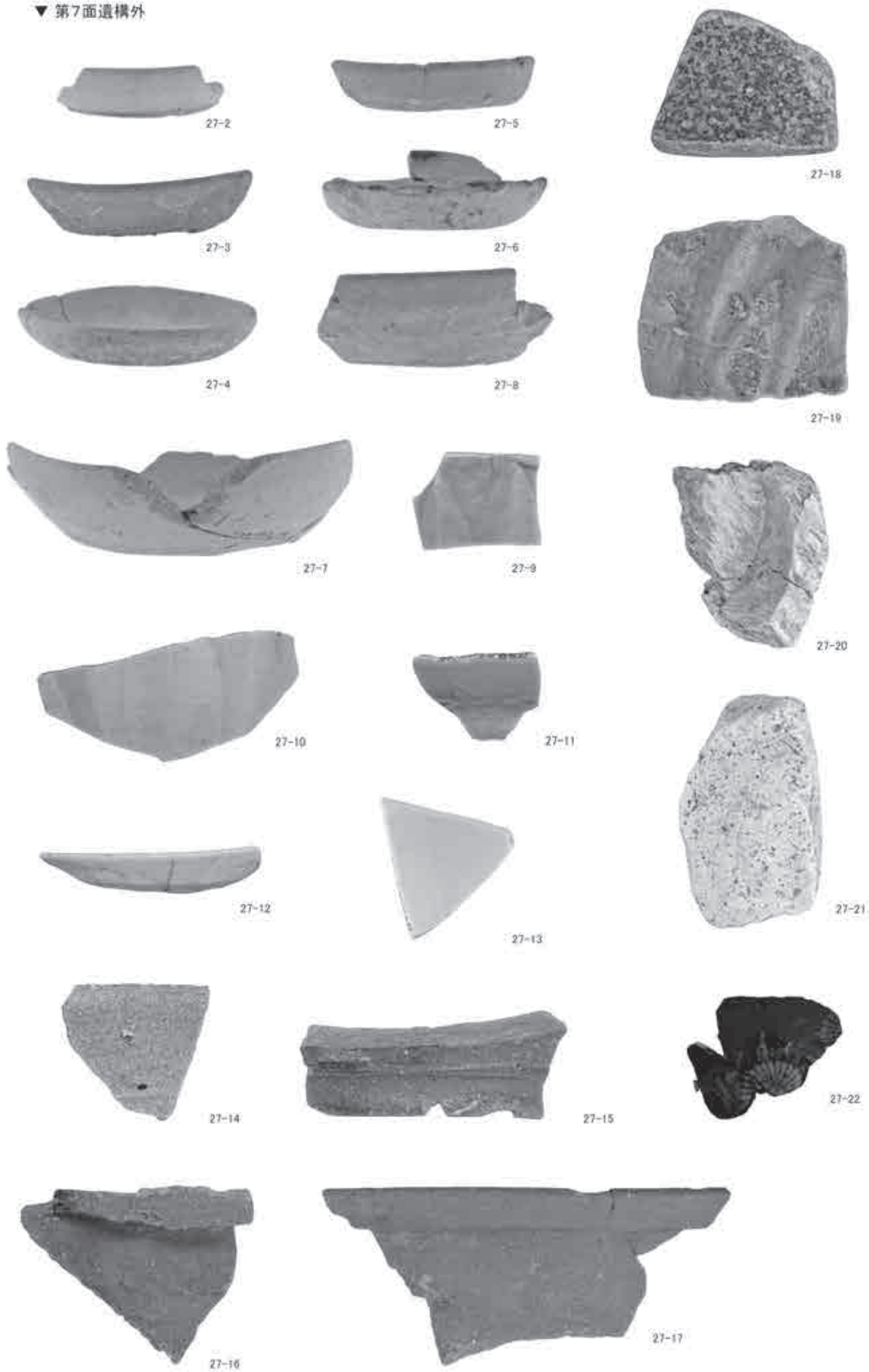
25-6



25-8

第6面遺構外・第7面各遺構

▼ 第7面遺構外



第7面遺構外